

2017年度

宿毛市沖の島・鵜来島および宿毛湾沿岸域調査

報　告　書

2017年12月

特定非営利活動法人　黒潮実感センター

目　次

[はじめに 5](#_Toc503212473)

[1. 沖の島について 6](#_Toc503212474)

[1.1. 沖の島の概要 6](#_Toc503212475)

[1.2. 沖の島の歴史 6](#_Toc503212476)

[1.2.1. 古文書への沖の島の出現 6](#_Toc503212477)

[1.2.2. 沖の島の集落の発展 7](#_Toc503212478)

[1.2.3. 沖の島の国境争い 8](#_Toc503212479)

[1.2.4. 弘瀬浦掟 9](#_Toc503212480)

[1.2.5. 明治以降の沖の島の人口 10](#_Toc503212481)

[1.2.6. 風土病フィラリア 11](#_Toc503212482)

[1.3. 沖の島の産業 12](#_Toc503212483)

[1.3.1. 沖の島・鵜来島定期船について 12](#_Toc503212484)

[1.3.2. 漁業 16](#_Toc503212485)

[1.3.3. 渡船業 18](#_Toc503212486)

[1.3.4. ダイビング業 22](#_Toc503212487)

[1.3.5. その他の産業 22](#_Toc503212488)

[1.4. 沖の島の文化 23](#_Toc503212489)

[1.4.1. 弘瀬地区荒倉神社の祭り 23](#_Toc503212490)

[1.4.2. 弘瀬地区白皇神社の祭り 25](#_Toc503212491)

[1.4.3. 弘瀬地区鴨姫神社のお祭り 26](#_Toc503212492)

[1.4.4. 弘瀬地区傘鉾 27](#_Toc503212493)

[1.4.5. 弘瀬地区正月行事 28](#_Toc503212494)

[1.4.6. 母島地区日吉神社の秋祭り 29](#_Toc503212495)

[1.4.7. 沖の島の食 31](#_Toc503212496)

[2. 鵜来島について 32](#_Toc503212497)

[2.1. 鵜来島の概要 32](#_Toc503212498)

[2.2. 鵜来島の歴史 32](#_Toc503212499)

[2.3. 鵜来島の漁業 37](#_Toc503212500)

[2.4. 鵜来島の文化 40](#_Toc503212501)

[2.4.1. 春日神社の縁日 40](#_Toc503212502)

[2.4.2. 春日神社の春祭り 41](#_Toc503212503)

[2.4.3. 2017年の春日神社の大祭 41](#_Toc503212504)

[2.4.4. 昭和40年代の春日神社のお祭り 44](#_Toc503212505)

[2.4.5. 昭和50年代の春日神社のお祭り 46](#_Toc503212506)

[2.4.6. 鵜来島流人伝説 46](#_Toc503212507)

[2.4.7. 鵜来島の食 47](#_Toc503212508)

[3. 宿毛湾沿岸部について 48](#_Toc503212509)

[3.1. 小筑紫町栄喜地区について 48](#_Toc503212510)

[3.1.1. 栄喜地区の歴史・文化について 48](#_Toc503212511)

[3.1.2. 栄喜地区の漁業について 49](#_Toc503212512)

[3.2. 片島・大島地区について 53](#_Toc503212513)

[3.2.1. 片島・大島の歴史 53](#_Toc503212514)

[3.2.2. 片島・大島の文化 58](#_Toc503212515)

[3.2.3. 片島・大島の産業について 60](#_Toc503212516)

[3.3. 宇須々木地区について 69](#_Toc503212517)

[3.3.1. 宇須々木の概要 69](#_Toc503212518)

[3.3.2. 海軍基地としての宇須々木 69](#_Toc503212519)

[3.4. 池島地区について 72](#_Toc503212520)

[3.4.1. 池島の歴史 72](#_Toc503212521)

[3.4.2. 宿毛湾港（池島）について 72](#_Toc503212522)

[3.4.3. 豪華客船の来航について 73](#_Toc503212523)

[付録appendix(1) 宿毛の偉人について 77](#_Toc503212524)

[酒井南嶺（さかいなんれい） 77](#_Toc503212525)

[小野義真（おのぎしん） 77](#_Toc503212526)

[竹内綱（たけうちつな） 78](#_Toc503212527)

[岩村通俊（いわむらみちとし） 78](#_Toc503212528)

[大江卓（おおえたく） 78](#_Toc503212529)

[林有造（はやしゆうぞう） 78](#_Toc503212530)

[小野梓（おのあずさ） 79](#_Toc503212531)

[竹内明太郎（たけうちめいたろう） 79](#_Toc503212532)

[【参考文献】 80](#_Toc503212533)

[【高知新聞アーカイブス】 81](#_Toc503212534)

[沖の島・鵜来島定期船について 81](#_Toc503212535)

[沖の島・鵜来島の渡船業者について 82](#_Toc503212536)

[沖の島の漁協 82](#_Toc503212537)

[沖の島の漁業・その他の産業 83](#_Toc503212538)

[沖の島の味 83](#_Toc503212539)

[沖の島の祭り・習俗 83](#_Toc503212540)

[鵜来島の産業 84](#_Toc503212541)

[鵜来島の文化 84](#_Toc503212542)

[宿毛湾の漁協 84](#_Toc503212543)

[栄喜地区について 84](#_Toc503212544)

[豪華客船関係 86](#_Toc503212545)

[片島の歴史 86](#_Toc503212546)

[片島港航路 86](#_Toc503212547)

[片島港開発 87](#_Toc503212548)

[片島の祭り 87](#_Toc503212549)

[【ヒアリングの記録】 89](#_Toc503212550)

[（鵜来島）20171001\_谷本徳光さんと佐々木保さんの話 89](#_Toc503212551)

[（鵜来島）20171030\_田渕満博さんの話 89](#_Toc503212552)

[（鵜来島）20171101\_宮本定子さんの話 91](#_Toc503212553)

[（鵜来島）20171101\_田中辰徳区長の話 92](#_Toc503212554)

[（鵜来島）20171107\_中山達男さんの話 94](#_Toc503212555)

[（鵜来島）20171121\_宮本五さんの話 95](#_Toc503212556)

[（沖の島母島）20171101\_金子誠さんの話 97](#_Toc503212557)

[（沖の島母島）20171214\_岡謙二さんの話 97](#_Toc503212558)

[（沖の島母島）20171216\_堀景さんの話 98](#_Toc503212559)

[（沖の島弘瀬）20171104\_市原芳政さんのお話 99](#_Toc503212560)

[（沖の島弘瀬）20171104\_金子渡船岡崎正勝さんの話 102](#_Toc503212561)

[（沖の島弘瀬）20171104\_金子五郎さんの話 102](#_Toc503212562)

[（沖の島弘瀬）20171128\_弘瀬徹さんの話 103](#_Toc503212563)

[（沖の島長浜）20171221\_千﨑周子さんの話 104](#_Toc503212564)

[（宿毛湾沿岸域‐宇須々木）「宇須々木の旧海軍基地」 106](#_Toc503212565)

[（宿毛湾沿岸域‐宇須々木・藻津）20171222\_増田卓生さんの話 107](#_Toc503212566)

[（宿毛湾沿岸‐宇須々木・片島）20171220\_宿毛歴史館矢木館長の話 109](#_Toc503212567)

[（宿毛湾沿岸‐池島）20170822\_マリンジャパン武内専務の話 109](#_Toc503212568)

[（宿毛湾沿岸‐田ノ浦）20170822\_与力水産の話 110](#_Toc503212569)

[（宿毛湾沿岸‐栄喜）20170426\_河原海産河原優さんの話 111](#_Toc503212570)

[（宿毛湾沿岸‐栄喜）20170823\_河原海産河原優さんの話 113](#_Toc503212571)

[（宿毛湾沿岸‐片島） 20170822\_TATEDAGROUP立田昌敬さんの話 114](#_Toc503212572)

[（宿毛湾沿岸‐片島） 20171216\_橋本邦彦さんの話 115](#_Toc503212573)

[（宿毛湾沿岸‐片島）20171220\_笹木保さんの話 117](#_Toc503212574)

[（宿毛湾沿岸域‐片島）20171221津野幸恵さんの話 118](#_Toc503212575)

[（宿毛湾沿岸域‐片島・大島）20171222\_山口しずかさんの話 118](#_Toc503212576)

[（宿毛湾沿岸‐高砂）20171201\_パシフィックマリン川田さん 119](#_Toc503212577)

[（宿毛湾沿岸‐すくも湾漁協）20170426\_すくも湾漁協河原宜人参事のお話 120](#_Toc503212578)

[（宿毛湾沿岸‐養殖業）20171130\_バイオ科学販売　谷村様 123](#_Toc503212579)

[（宿毛湾沿岸‐鮮魚販売業）20171219\_堀尾鮮魚店堀尾さんの話 123](#_Toc503212580)

[（宿毛湾沿岸域‐クルーズ船）20171218\_宿毛市観光協会の白石洋平さんの話 125](#_Toc503212581)

# はじめに

本調査報告名：宿毛市沖の島・鵜来島および宿毛湾沿岸域調査

対象：沖の島　鵜来島　宿毛湾沿岸域の住民

内容：漁業や暮らし、歴史、文化、資源等

本調査では、宿毛湾沿岸域における海洋教育に資する資源（漁業や暮らし、歴史、文化、その他資源等）を次代に残すことを目的とし、文献調査、現地視察、住民へのヒアリングを実施した結果を記録する。

本調査の対象地とした宿毛湾は、瀬戸内海・豊後水道と太平洋からの黒潮の流れが混ざり合う、豊かな漁場であるとともに、戦前は軍港としても栄えた天然の良港である。宿毛湾沖合に位置する、高知県唯一の有人離島である沖の島・鵜来島は、足摺宇和海国立公園に指定されており、手つかずの自然と昔からの文化が残っている。これらの島が属する宿毛市は、江戸末期から明治・大正・昭和にかけて日本の政治経済を動かした偉人を数多く輩出したことでも知られている。大隈重信とともに、立憲改進党や早稲田大学の前身である東京専門学校を設立した小野梓、明治維新の志士として、その後は政治家や実業家として活躍した竹内綱、自由民権運動の中心的役割を果たし、現在の宿毛市片島の発展の礎を築いた林有造、など枚挙にいとまがない。

四国西南端という、都市部からの時間距離が遠い不利な立地条件ながら、水産業や海運業などの面では有利な条件を有する宿毛湾において、この地域の資源を見つめなおすことは、他地域と比べ複合的で、厚みのある海洋教育を促進することにつながると考えられる。

文献調査は、宿毛市史、学校史（鵜来島小中学校による「我が母校鵜来島」、弘瀬小学校による「わが故郷土佐・沖の島」）、その他宿毛市教育委員会や郷土史家の著した文献、高知新聞アーカイブスなどを用い、歴史の事実関係を把握することに力点を置いた。

現地調査では、沖の島・鵜来島、宿毛湾沿岸部で海に携わる方々のお話を聞き書きし、その内容を取りまとめた。

# 沖の島について

## 沖の島の概要

　沖の島は、四国の最南端である足摺岬から西へ約４２km、宿毛市の片島港から南西へ約２５kmの距離に位置している。島の中央に標高４０４mの妹背山があり、北西部に母島（もしま）、南西部に弘瀬（ひろせ）という集落がある。全島が花崗岩からなるが、島の北側は褐色で、鉄酸化物が多い。弘瀬の東部および北部にはわずかに水成岩が露出している。



図 　沖の島町弘瀬

以下、歴史・産業・文化の観点から、沖の島について記載する。

## 沖の島の歴史

沖の島の歴史については、小川(1998)、わが故郷「土佐・沖の島」、宿毛市史などの文献調査をもとに記述した。特に、風土病といわれたフィラリアについては、伊藤(1967)を主に参照した。

### 古文書への沖の島の出現

　沖の島には、古くから人が住んでいたといわれるが、はっきりと年代がわかる史料はない。

　奈良時代には山伏の修行地となっていた。現在の黒潮町上川口あたりは、当時、畑庄（はたのしょう）と言われ、都から遠く離れた遠流の地であった。山伏たちは、遠流の舟を利用して沖の島に渡り、托鉢や修行をしていたといわれている。沖の島には、大峰や北峰、妹背山や王子など山伏にゆかりがある吉野や熊野と同一の地名が多くあり、「沖の島」という地名も、大崎の港を出て初島沖に見える沖の島と同一である。これらの地名は、山伏の往還文化の中でつけられたのではないかと考えられる。（小川, 1998, p.12）

　平安時代末期（天永～保安（1110～24年））頃成立といわれる今昔物語集の巻26第10話「土佐国妹兄行住不知島語（現代語：土佐国の妹兄（いもせ）知らざる島に行きて住む話）」に、「土佐の国の南の沖に、妹兄の島とて有とぞ、人語りし」と記されている。この話は、両親と離れ、島に流れ着いてしまった１４、５歳の兄と１２、３歳の妹が、島で田んぼを拓き、食いつないで暮らすうちに、年ごとになった二人は夫婦となり、息子、娘をたくさん産み、人が島から溢れるほどになったという。

　沖の島には、幡多周辺の土地を持たない人たちが渡り、荒れ地を開いて生活を営んでいたが、移住者も少なく、婚期になって結ばれる相手も乏しかった。苦労して耕した土地を知らぬ他人に渡すよりは身内への思いから近親結婚が広がり、このような風俗と身内関係の多い島の生活を托鉢で見た山伏たちが、妹背山の名をとって、妹兄島の話を創作したのではないかと考えられている。（小川, 1998, p.20）

13世紀前半に成立した宇治拾遺物語にも、ほぼ同じ話が巻4第4話「妹背島の事」に収録されているが、このタイトルの通り、妹兄島は妹背島に変わっている。

### 沖の島の集落の発展

　沖の島における人の生活の発祥地は、現在は廃墟となっている大浦からと言われている。大浦は、母島の北東に位置し、地形的に季節の風を避けることができ穏やかなことから、周辺の貧しい人々が集まり、土地を開墾して生活をしていたと思われる。（小川, 1998, p.24）

　母島の開発については、沢近文書の「御境目由来書」によると、「沖の島は、昔人が住んでいなかったのであるが、大峯(大和の大峯か)から山伏が渡って来て、芦のおりのりへ船を着け、尻なし尾を登って、峯伝いに鍬抜の峠まで通り、それから川へ下って母島に住居した。沖の島のでき始めの浦であるので、母島と名付けた。その頃は、母島浦に、善福寺、寿生庵、幸禅庵、清蔵庵、旨定庵、出心庵、峯伝庵という７つの寺があった。その後、我等の先祖が流人であったが、この島へ渡り、住居して数十代になる」とある。（宿毛市教育委員会, 1977）

　善福寺の古文書には、大浦と母島との間で争いがあり、８名の死者があったことが記されている。これは、「南宇和郷土史」の記述によれば、伊達家が宇和島城に入城した翌年である１６１６（元和２）年１２月、御荘沖の島の百姓一揆をおこして脱走した、と記されてあり、同件であると考えられる（小川,1998, p.30-33）。御荘の支配する母島に対し、大浦は島に国境のない頃からこの地に居住した人たちで、伊予の支配として取り扱われることを不安に思い、島を脱出したものと考えられる（小川, 1998, p.35）。

　一方、弘瀬の島祖については、宿毛市史によれば次のような伝承が残っている。

‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐

　鎌倉幕府の重臣であった三浦大助の孫に、三浦新助則久という人がいた。何かの事情で罪を受けたのか、その家族家来ともども西へ西へと逃れたのであった。伊予の三津浜から、更に船出して沖の島に着き、芦のおりのりから上陸したのであった。そして、峯伝いに島を縦断して仏の峠(弘瀬と谷尻間の峠)に居を定め、その付近を開墾して農耕をなし、海岸に出ては漁業をして生活を始めたのである。

　この地には、御先祖様といわれる数十基の石碑が林立し、三浦家と、仏の峠の歴史の古さを物語っている。

　三浦家の先祖を祭った神社を若宮神社といい、荒倉神社の境内にあるが、その御神体として三浦氏先祖の鎧を祭っている。しかし、その鎧は、江戸初期前後の具足で、古いものではないが、その鎧を入れた箱の中に、わずか２片ではあるが、皮製の古い小札こざねが入っていた。この小札こそ古い鎧の残片である。その小札の写真、実測図を山上八郎氏に見せたところ、伊予札いよざねで南北朝時代のものであろうということであった。これが、三浦家の古さを実証する１つの資料である。新助則久から８代まで仏の峠に居り、９代目から弘瀬に居住し、島の領主として村君（むらきみ）を勤めていたのである。

　村君とは、室町時代の浦の領主的な存在で、後の庄屋以上の大きな権限をもっていたようである。弘瀬浦の村君であった三浦宗見の証文には、７か所も村君の事が記されている。

○むろ網で、魚がどれほどとれても、村君が３分の１はとること。

○千州より借りた家敷の借り賃２００文は、村君が調へ、後で一軒につき５０文ずつ村君が取ること。

○地下へ流れ寄ったものは、地下の者が拾っても村君が取ること。

○引猟で、どれほどとれても、半分は村君が取ること。

○土地を出て行く者の網や船も、村君の身代とすること。

○正月１日、３月３日、５月５日、７月１５日に地下中を集めて酒で祝をするのは、村君の用事のため、いつ使うかもわからないからである。

などの記録がある。これは、文禄３年(１５９４)のものであるが、室町末期には、まだこのような証文が残っているところをみると、村君の権限もまだ相当残っていたことと思われる。

長宗我部元親は、地方役人として庄屋刀祢を置いたが、弘瀬の刀祢は三浦助左衛門を任命しているので、村君をそのまま刀祢としたことがわかる。

‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐

　郷土誌編集委員会(1982)では、三浦氏の出生地とされる神奈川県三浦半島の三浦市に三浦新助則久について問い合わせをしたところ、そのような人物は史実として存在せず、伝承もない、という回答であった。小川(1998)では、三浦大介の孫義盛の三男である義秀の和田一族が沖の島に流れ着いた三浦一族ではないかという仮説を提起している。

### 沖の島の国境争い

　沖の島は、明治７（１８７４）年に高知県に編入されるまでは、母島と鵜来島は伊予、弘瀬は土佐に属していた。国境については、中世には確定していたと考えられており、室町後期（１５５０）の作成という新助証文、宗見証文、長宗我部元親による天正地検帳などに記載されている。これらに基づくと、両国の国境は、「芦のおりのり－川－しりなしを、－えぽしとり－北峰－大峰－仏の岡の道－ぬべるはえ－弘瀬の川－まくうちはえ－姫島はきれとうが境」、と宿毛市史に示されている。江戸時代になって、１６４４年話し合いで許されていた伊予領の大和山の伐採を宇和島藩が禁止されたことに端を欲し、幕府を巻き込んで議論がなされた。両藩が譲らず自身の主張を展開し争った結果、１５年後の１６５９年に判決が出され、大部分土佐側の主張が認められて勝利となった。ただし、海の利用については伊予側の利用を許す内容となっており、双方不満の残るものであったと思われる。

### 弘瀬浦掟

境界争いが落着した翌1660年、野中兼山の手により弘瀬浦掟が出された。これは、半農半漁で生計を立てている浦人の生活を細かく規制したもので、全十七条からなっている。以下、宿毛市史より全文を引用する。

‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐

地下人は耕作を渡世とし猟などはうきものと心得ること。

２月より８月までは猟を専とすべし、

８月より正月までは耕作に励むべし、但し冬も猟を怠ることなく、また、夏も耕作を捨てるべからず、

鰹釣りは魚群を探すこと、見当らぬ時は早々に帰って陸上の仕事をすること。

鰘漁の火光使用の船を２艘に増し、魚尋船も２艘とする。中の網代に魚を発見しない時は遠出して網漁をすること。

月夜に、はえなわをすること、闇夜でムロアジ猟のできないときまたは昼間でも隙の時は、はえなわを仕掛ること。

沖に出ることのできないときは竹薪を伐り、苫かやを採ること、取りためた品は買い上げる。海上の仕事のできないときは網ごしらえ、苫編みをすること。

苫かやの成長しすぎた所は時期を見て延焼しないように焼くこと。

田地をわけ誰が耕作に精を出し、誰が不精であるかを吟味すること。

地下人が漁の魚を盗まぬように申付ける。

塩魚の塩をつけるには適度にすること。

助左衛門に貸米のある間は助左衛門の取前を差引くこと。

弘瀬浦の風俗が悪いので今後は厳に男女の別を正すこと。守らぬ者は罪科に処する。

１２、３才から１５才迄の子供で沖に出られない者には薪を取らせ、苫あみ繩ないなど相応の仕事をさせて油断させぬこと。

地下人が釣猟または山仕事に従事するときは飯米を１人に５合宛貸すが、猟道具、網拵へ、苫あみなどの時は蔬飯とする。秋には鷹をとること、鷹は地方で買上げる。

弘瀬浦の女は他所に嫁いではならない。

右の条々を堅く申つける。此の如き法を出しても、浦奉行が其所へ行って詳かに吟味をとげなければわからないので、浦奉行は時々沖立の船に乗り又は山の作業をも見分し、３日に一度づつ家々を廻り精を出したものは取り立て、怠リたるものは誡め、浦奉行が先に立って教へ、随わない者には罪の軽重を申つける、勿論重科の者は死罪にすべきこと

‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐

となっている。野中兼山は、労働と節約を旨とし、生活を厳しく取り締まることで支配を強化しようとしたと考えられる。弘瀬浦の人々は厳しい生活を強いられることとなった。

### 明治以降の沖の島の人口

「わが故郷　土佐・沖の島」によれば、明治33年に369世帯2187人だった沖の島の人口は、明治43年には407世帯2622人、大正9年には462世帯2912人、昭和5年には490世帯3912人、昭和16年には555世帯3678人と増加の一途をたどった。昭和20年には596世帯3546人となり、世帯数が増加し、人口は減少した。

図 　明治後期から昭和20年までの沖の島の人口と世帯数

昭和30年以降、昭和30年には535世帯2738人、昭和40年には487世帯1969人、昭和50年には383世帯1077人となり、昭和60年には282世帯593人と急激な減少となった。昭和30年から40年の10年間では48世帯769人が減少であり世帯は残ったまま子ども世代の流出が大きかったと考えられる。昭和40年から50年の10年間では、104世帯892人が減少、昭和50年から60年の10年間では99世帯484人が減少となっており、子ども世代の流出も止まらず、さらに世帯ごと移転する件数が増えたと考えられる。平均世帯人数でみると、昭和20年までは1世帯あたり6人前後であったが、昭和30年には平均世帯人数が5.1人、昭和40年には4.0人、昭和50年には2.8人と世帯人数も減少を続けた。

平成7年には218世帯400人、平成17年には141世帯236人、平成27年には90世帯149人と現在に至るまで、人口減少・世帯縮小の傾向で推移した。

図 　戦後の沖の島の人口と世帯数

※平成7年～平成27年は国勢調査、昭和60年，平成2年は1月末日現在の人口調査票（沖の島集落センター提供）、昭和55年以前は国勢調査の結果を「わが故郷　土佐・沖の島」より使用

### 風土病フィラリア

沖の島・鵜来島の風土病と言われたフィラリアについて、以下、伊藤(1967)に基づき、記述する。

フィラリアは、象皮病とも呼ばれ、蚊によって媒介される寄生虫が元になって発症する病気である。この病気になると、寒気がし、高熱を発し、毎年数回発作を起こすことが多い。この病気の後遺症は、忘れたころに出てくることもあるが、皮膚や皮膚組織がフィラリアの寄生によって厚くなり、象皮のようになる。多くは、陰嚢や大腿部や乳房に来るが、患部は巨大に膨れ上がって、その後遺症は死ぬまでなおらない。この病気だけで死亡するということはないが、治療薬も開発されていなかった（伊藤, 1967, p.30）。そのため、島のフィラリア患者はこの病気を遺伝だと考えていた。患者はほとんど血縁関係者に多かったからである。

昭和27年、長崎医大の北村教授を中心とする本格的なフィラリア調査班が来島した。フィラリア仔虫は、昼間は内臓やリンパ管の中に隠れていて、夜の10時を過ぎるころから血管内に出てくるのである（伊藤, 1967, p.102）。そのため、実態調査のための採血は、夜間でなければならず、思うように進まなかった。昭和35年にもかなり大掛かりな実態調査が行われた。その結果、幼児、小中学生にも新患者が発見され、県や島民を驚かせた（伊藤, 1967, p.104）。

昭和37年、待望の特効薬「スパトニン」が発見された。しかし、副作用として、頭痛、めまい、吐き気、嘔吐、胸やけなどが出るため、「フィラリアの発作の方がまだ楽」という患者もいた。また、県の支援の下、患者は無料でこの薬を使用できたので、服薬を嫌い、捨てられてしまうこともあった。服薬は、8週間を１周期として行われ、他所に出稼ぎに出ている者にも及んだ。特効薬の服用と同時に、実態の一斉調査を重ねていく必要があった。これは、年に２度必ず行われた（伊藤, 1967, p.112-114）。

特効薬の服用と同時に、フィラリアを媒介する蚊を撲滅しなければ、フィラリアを撲滅させることはできない。集落内と集落周辺の清掃や衛生管理について、部落会や婦人会の協力を得ながら、進められた。このような地道な活動の結果、当初は島内の３００人以上がフィラリアに罹患していたが、昭和４１年には１１名にまで減少した（伊藤, 1967, p.202）。

上記の取り組みには、沖の島弘瀬地区出身の荒木初子氏の貢献が極めて大きかった。同氏は、1949年（昭和24年）から20年以上にわたり、離島である沖の島にただ1人の保健婦として勤めた。同島の保健衛生向上、乳幼児の死亡率減少、風土病であるフィラリアの撲滅などに多大なる貢献をし、高知の地域医療発展の先駆けとなった。第1回吉川英治文化賞受賞、昭和43年公開の映画『孤島の太陽』のモデルにもなった。

## 沖の島の産業

### 沖の島・鵜来島定期船について

以下、沖の島、鵜来島への定期船について、宿毛市史（1977）と高知新聞アーカイブスをもとにして概略を記述する。

沖の島、片島間の航路には、大正の初めより、幡多汽船株式会社の幡西丸が就航し、その後土佐商船株式会社の三洋丸、土予汽船株式会社の大和丸、豊国丸、芙蓉丸と続き、沖の島及び大月町沿岸の人々に利用されていた(方島中学校編郷土史による)。

他に柏島郵便局が昭和18年6月21日から船による柏島、宿毛問の郵便逓送を始めたのでこの船も利用されていた。

戦後は土予汽船株式会社の九島丸が沖の島、片島間を運航したが、この九島丸も、柏島、片島間で大月沿岸の乗客を、柏島郵便局の郵便船春日丸、土佐商船株武会社の新高知丸と争奪することとなり、その上沿岸各地の人達にバス利用者が増えて来たので九島丸の乗客が少なくなった。

そこで23年頃より九島丸は実質不定期となり、24年柏島の岡崎商会が土予汽船株式会社の航路権を譲り受け、九島丸に代って郵便逓送を兼ねた福久丸を就航させた。しかし従来、大変不便を感じていた沖の島村民は、この不便解消を県に訴えたところ、県は、木造船県あがた丸(縣丸、40馬力、総工費133万円)を造り、昭和25年6月に完成させ、赤字のできた場合は補てんするという契約のもとに、沖の島村に無償で譲渡した。しかし、航路権がとれず3ヶ月にわたり就航不能、県と村は四国海運局へ陳情を続けたが、「現在就航中の土予汽船および郵便船で年間7万人の輸送能力があり、実際の利用者は2万人内外、これ以上航路を増やす必要はない」「1ヶ月に5日以内に限り、土予汽船の欠航日運行してもよい」という臨時運行許可がもらえたのみであった。

そこで、25年10月に四国海運局、高知県、沖の島村、土予汽船は協議の結果、あがた丸を土予汽船に賃貸し、沖の島、柏島、片島間を運行させることになった。

26年6月から沖の島村営として、26年8月から毎日1往復、母島、弘瀬、母島、柏島、泊浦、片島の航路を開いた。然し赤字が続いたので、28年20万円、29年30万円を県から財政援助をうけている。29年3月、町村合併で宿毛市となり、村営を市営とした。

一方、民間ではその頃鵜来島は定期船の運航がなく、わずかに沖の島の郵便船かもめ丸が2日に1回来ていた。舟が小さいので欠航が多く大へん不便を感じていたため、昭和30年にあがた丸寄港期成同盟が結成され、陳情を続けていた。そのころには、沖の島の郵便船つばめ丸が1日1回通っていたが、接続が悪く、同じ市内でありながら宿毛市役所まで往復で3泊4日もかかっていた。

市営渡船の鵜来島までの航路延長を再三要望していたが実現に至らなかった。27年8月に土予汽船から航路権と船を買い取り、航行をしていた岡崎商会が、31年6月、鵜来島航路の開設を決め、四国海運局からも承認を得た。31年12月25日、約200万円で建造した17トンの新船みしま丸が片島ー鵜来島間を就航した。

一方、32年5月、あがた丸の代船として、70馬力の焼玉式内燃機関を備えた26.6トンの木造船あがた丸がつくられ就航することとなった。県補助は百万円で総事業費の約3分の1であった。

この頃には、市営渡船が1日1往復、岡崎商会が1日2往復運行しており、乗客が按分され、双方とも赤字が多くなった。32年11月には、最も利用客が多かった柏島地区へ県交バスが運行を開始したため、乗客が激減、運営はますます苦しくなったため、2航路の運営を統合する検討を開始した。岡崎商会は、片島ー鵜来島の航路権を有しているが、市営渡船は鵜来島航路を有しておらず、課題であった。

昭和33年3月、岡崎商会では、観光シーズンを迎えて、湾内遊覧船を兼ねた定期航路を開設することになり、海運局へ申請を出した。新航路は小筑紫を起点として、片島、池島、大島水族館、咸陽島、宇須々木、貝ヶ崎、藻津間で、1日3〜4往復することになった。

昭和33年5月には、鵜来島へは沖の島母島を経由して毎日1往復就航していたが、年間40万円あまりの赤字となり、欠航しがちな状態が続いていた。そもそも鵜来島航路は、離島航路整備法による交通機関への国庫補助を当てにしていたが、市営渡船あがた丸との競争線であるという理由で取り上げられず、岡崎商会は就航早々、厳しい経営となった。市営渡船のあがた丸も特別会計によって運営され、年間40万円あまりの赤字を出している状況であった。

昭和33年6月、沖の島住民の反対（「独占企業化すると将来島の利益にならない」など）もあり、市営渡船と岡崎商会の統合を断念し、7月宿毛市が沖の島母島ー鵜来島間の航路権認可申請を実施した。岡崎商会は、あがた丸の回航に異論なく、個人としての責任は果たしたとして8月2日に航行を中止した。そのため、宿毛市は海運局の仮免許を待たず、16日にあがた丸の鵜来島運行を開始した。

その後、35年11月、岡崎商会は赤字経営を理由に、午前8時半片島港発の朝便の運行を取りやめたため、岡崎商会は片島港を午後0時50分、沖の島を翌午前6時40分となり、市営渡船の片島港を午後1時半、沖の島を翌午前7時10分とほぼ同時刻での運行となっていた。そこで、36年4月に官民共同で宿毛巡航有限会社を設立することを合意し、議会でも可決した。沖の島の住民感情にも配慮し、市が一応主導権を取る形で55万円、岡崎商会が45万円をそれぞれ出資し、6月より発足することになった。11月7日より県丸、みしま丸、福久丸、予備船かすが丸を使用して、母島、鵜来島、弘瀬、母島、柏島、一切、安満地、橘浦、泊浦、竜ヶ迫、片島の航路の運航を始めた。しかし、船が小さいので少し波があると欠航することが多く、大きい鋼船の就航が要望されていた。

この要望にこたえ38年4月には、鋼船すくも（62.6トン、推進力180馬力、定員45人）が国の辺地対策事業として1,400万円の融資を受けて完成、5月より運航した。

39年9月宿毛巡航有限会社の代表者が死亡したのに伴って、会社が解散となった。10月、市はこの航路に離島航路整備法の適用をうけ航路を継承し、すくも、県丸を就航させた。

昭和41年宿毛市渡船事業審議会は、片島ー沖の島間の運賃を30％値上げすることを認め、市長に答申した。30％アップでの収益増では赤字解消には焼け石に水であるため、将来は沖の島航路を県営にするべきと答申した。運賃は、片島ー柏島間が130円から190円、母島が150円から210円、弘瀬が155円から220円、鵜来島が180円から230円となった。

42年12月県丸の代船として、おきのしま(鋼船、67.7トン、ディーゼル機関65馬力、定員65人)を総工費2,910万円(内県補助800万円)で建造し、航路を片島－竜ヶ迫－橘浦－安満地－柏島－母島－弘瀬－鵜来島－片島と、1日2往復することとした。

42年、43年頃、年間利用客が約５万人となり、磯釣り客など県外客の増加が大きく、わずかに黒字となった。その後、44年度以降は赤字であり、47年度520万年、49年度1,460万円、50年度1,980万円の赤字となった。

そのため、48年3月末で片島港と大月町竜ヶ迫、橘浦、安満地、柏島を結んでいた大月町沿岸便は廃止となった。昭和38年に民間航路から市営渡船に編入した時には、無くてはならない住民の唯一の足であったが、この10年で道路整備が急ピッチで進み、マイカーの普及も進んだため、利用者が激減し、廃止となって、片島－鵜来島－弘瀬－母島－柏島－片島と運行し、午後は片島－柏島と逆に運航していた（50年過ぎ頃まで）。

48年4月には、新船すくも(鋼船97.8トン、750馬力、定員108人)を総工費6,352万円(内県補助金2,200万円)で建造し就航させた。大月沿岸便と異なり、沖の島航路は年々利用者数が延びており、定員65名のおきのしまでは、県外客が大幅に増える夏には定員オーバーしていたため、新船が望まれていた。しかし、48年当時は母島港、弘瀬港ともに港が浅く狭いため、全長3m、幅0.8m大型になった新船すくもでは、スムーズに接岸できず、満潮以外は港沖合300m付近に停泊、旅客を小さなはしけ船で上陸させていた。風が強い時には、はしけ船での上陸は危険が伴うため、おきのしまを出航させていた。

48年末のオイルショック以来、燃料費が３倍に跳ね上がり、物価の上昇とともに運賃も値上がりが続く。49年11月には平均40％の運賃値上げ（片島ー母島、弘瀬、鵜来島片道350円、柏島片道290円）、51年8月にも平均41.4％の運賃値上げ（片島ー母島、弘瀬、鵜来島片道500円、柏島片道410円）、55、6年頃には29.6％の値上げ（片島ー母島、弘瀬、鵜来島片道650円）があり、58年4月に48％の運賃値上げ（片島ー母島、弘瀬、鵜来島片道960円、柏島片道780円）、60年4月から20％の運賃値上げ（片島ー母島、弘瀬、鵜来島片道1,160円、柏島940円）となった。

48年4月就航のすくもが老朽化し、予備船がない状態であったため、昭和59年度に新船を総工費1億1,864万円で建造することとなった。こうして建造された新船おきのしま(鋼船90トン、800馬力、定員95人)は60年4月より主船として就航し、すくもは予備船となった。新船おきのしまには、起重機装置が設置され、島民の利便性が向上し、貨物の運搬が増加した。速度は11.5ノットで、片島ー母島間を1時間20分程度で航行していた。

その後、平成15年4月、新船すくも(鋼船82トン、1,000馬力、定員70人)が就航した。総工費2億4,990万円で、最大速度20ノットで航行できるため、片島ー母島間を50分で航行できるようになった。

利用者については、49年度は片島乗船者が29,602人(島民12,923人、市内320人、市外12,537人)、50年度は同じく29,284人(島民12,789人、市内4,100人、市外12,386人)、51年度、52年度は全体で約64,600人となっており、船が大型化して欠航が少なくなったため、年間を通して乗船者があった。平成12年には、年間利用者は約24,700人となった。

なお、宿毛市史と高知新聞アーカイブスの間に一部記載事実のずれがあった。下記にずれがあった部分を記載する。

・昭和31年みしま丸の就航開始時期が異なる（宿毛市史では11月、高知新聞では12月）

・昭和31年みしま丸は宿毛市史では沖の島経由とあるが、鵜来島直行便（高知新聞　昭和31年12月29日）。ただし、昭和33年3月には母島経由（昭和33年6月16日）との記載あり。

・宿毛巡航有限会社の設立年月が異なる（高知新聞　昭和36年4月28日）

### 漁業

沖の島の漁業について、高知新聞アーカイブス、各種ヒアリングの結果より記述する。

#### メノリ

　メノリ刈りは、寒い季節風が吹く1月から3月にかけてだが、解禁日にしか取ることができない。岩に十分ノリが付いてなければならず、潮がよく引いていて、風と波のない日でないと危険が伴う。そのため、メノリの解禁は、回数が限られ、漁協によって異なるが、月に2回程度である。日の出前の午前6時ごろ、港の漁協のスピーカーからの突然の放送で知らしめられる。メノリ刈りは、放送の後、再び漁協がサイレンを鳴らし、それを合図に一斉に始まる。高知新聞アーカイブスより、昭和49年のある日、午前7時ごろから潮が引き始め、サイレンが鳴ったのは午前9時、母島側では約120人が浜に出たが、9割は女性であった。ノリ場は、母島漁協が弘瀬に近い小島から芦ノ浜までの北海岸、弘瀬漁協は残りの南海岸と分かれていた。芦道峠を越えて久保浦や芦ノ浦に行くと収量が多かったという。縦50㎝横60㎝の1枚が400円ほどになった。多い人は100枚分以上も刈ったというが、平均は10枚くらいであった（高知新聞　昭和49年3月14日より）。

メノリ刈りをするには一口いくらの権利を購入する必要があった。解禁後、1～2回の漁を経て、一般に開放されると、誰でも取ることが許可された（千﨑周子さんの話より）。

#### 寄せ網漁

昭和34年、母島、弘瀬、鵜来島の三漁業協同組合は、高知県に寄せ網漁の許可を申請した。寄せ網漁は、沖縄式漁法ともいわれて、磯魚や赤物類をとる漁法であり、当時高知県ではまだ許可漁業になっていなかった。三漁協では、キビナゴ、テングサなど原始的な漁に頼っている状態であったが、豊後水道と太平洋からの黒潮がまじりあう沖の島一帯は高知県下でも有数の漁場であったので、漁業振興を進めたいと考えていた。県は、同年5月に4ヶ月間を試験期間として許可した（高知新聞　昭和34年4月13日より）。

沖の島海域での寄せ網を漁を成功させるため、寄せ網先進地の伊豆大島の上次丸漁協組に指導を依頼、当初、予想以上の1ヶ月程度は豊漁が続いたが、その後、まったくふるわず、許可された漁期を待たずして解散になった（高知新聞　昭和34年8月17日より）。

昭和35年にも前年に引き続き三漁協は寄せ網漁の許可を申請したが、柏島の一本釣り業者から寄せ網の影響で魚が餌を恐れて寄り付かず、漁獲量が減少したと陳情があったこともあり、許可されなかった。

#### 伝統漁法刺網

キビナゴの刺し網漁は、高知県下では沖の島弘瀬にしかないと言われる伝統漁法で、5月末から6月いっぱいにかけて、砂地に産卵するキビナゴを海底に立てた網の目に突っ込ませてとる漁法である。この漁法のためには、キビナゴが産卵できるきれいな砂地の海が必要となる。沖の島弘瀬では戦前から刺し網漁が盛んであった。捕れればいくらでも売れる時代が続き、九州からも買い付けに来ていた。しかし、鮮度や形などにかまわず、質より量を続けた結果、販路が限られ、過疎や資本の乏しさなどからまき網にも方向転換できず、刺し網漁は廃れていった。漁場も昭和60年以前は、宿毛湾内に何か所もあったが、昭和60年代以降、宿毛湾や沖の島鵜来島の限られた場所でしかできない。

弘瀬の漁場は、港から沖合800ｍほどの水深20ｍあまりの場所である。キビナゴ漁は平成に入ると巻き網漁が主流となり、手作業が多く重労働でもある刺し網は行われなくなっていった。

刺し網漁をするときには、午前3時半に港を出発し、漁場につくと、その日の潮の流れを見て網を入れる。網の長さは100ｍから150ｍ、幅は5ｍほどであり、網が海底に立っていなければキビナゴは網に刺さらない。そのため、網を入れる場所は、長年の経験とロープについた卵などから、慎重に判断する。網を入れてから約1時間後には網を上げる。網上げは動力ではなく、人力で行うため、重労働となる。網を上げたら、すぐに港へ戻る。捕れたキビナゴは港で待ち受ける婦人たちの手で、網を振って網からふるい落として、外される。首が切れてしまうと商品価値が下がるので、慎重に行う（高知新聞　昭和60年6月13日、平成3年6月12日より）。

#### 沖の島の漁港と漁協

以下、高知県・高知県漁港協会編集の港湾記録および高知新聞アーカイブスに基づき記述する。

母島漁港は、昭和27年4月7日に高知県管理の第1種漁港になった。昭和45年の農林業センサスによると母島漁協の年間水揚げは2,100万円、弘瀬漁協では600万円であった。昭和51年には、陸揚げ量が54トン、金額で1,500万円あった。漁業別でみると刺網が24トン（45%）、一本釣りが19トン（35%）、その他が11トン（20%）であり、魚種別でみるとイワシが23トン（43%）、マグロが12トン（22%）、その他が19トン（35%）であった。利用漁船は、合計891隻あり、3トン未満が232隻、3トン以上5トン未満が398隻、5トン以上20トン未満が232隻、20トン以上50トン未満が16隻、50トン以上100トン未満が5隻、100トン以上が2隻、無動力船が6隻あった。沖の島弘瀬や鵜来島の漁港は市町村管理の第1種であった。

平成5年、母島、弘瀬、鵜来島の3漁港を統合し、高知県初の第4種漁港へ指定されることとなった。第4種漁港は、離島やへき地で漁場の開発や漁船の避難上、特に必要なものを国が指定し、県が管理する漁港である。低気圧や季節風の影響を受けやすく、漁船は20㎞以上離れた宿毛湾などに避難しなければならなかったが、第4種漁港に指定されると、避難地として年間15億円以上の整備が地元負担なしで可能になり、事業の大半を占める防波堤工事の国庫補助率がアップする。母島、鵜来島に比べ水深が浅い弘瀬港の開発が進むことになる。

平成5年の沖の島漁港（母島地区）の陸揚げ量が37トン、漁業別でみると釣りが25トン（68%）、定置網が12トン（32%）であり、魚種別でみるとイサギが13トン（43%）、カツオ4トン（11%）、ソウダガツオ4トン（11%）、その他が16トン（43%）であった。利用漁船は、合計28隻あり、3トン未満が18隻、3トン以上5トン未満が7隻、5トン以上20トン未満が3隻あった。

同じく沖の島漁港（弘瀬地区）の陸揚げ量が13トン、漁業別でみると定置網が5トン（38%）、釣りが4トン（3１%）、その他が4トン（31%）であり、魚種別でみるといさぎが3トン（23%）、その他が10トン（77%）であった。利用漁船は、合計41隻あり、3トン未満が29隻、3トン以上5トン未満が9隻、5トン以上20トン未満が3隻あった。

平成6年、沖の島の母島、弘瀬、鵜来島の3漁協は対等合併した。２月に仮契約、３月に各総会での承認を経て、7月に県の認可を受けて、8月から合併した。3漁協の組合員は、母島89人、弘瀬106人、鵜来島53人で、合併後の貯金額は約7億3000万円となった。

### 渡船業

以下、高知新聞アーカイブスおよび聞き取り調査の結果より、渡船業について記述する。

沖の島・鵜来島地区の磯釣り渡船業は、昭和34年、沖の島母島の澤近渡船が一番最初に始めたと言われている。 昭和40年頃から宿毛市と幡多郡大月町の「宿毛湾開発は磯釣りから」と大いにPRした結果、急激に盛んになって、全国から釣りファンが集まってくるようになった。沖の島弘瀬では金子渡船、鵜来島では田中渡船（その後、事故で廃業）が最初の事業者であったと考えられる。

渡船業が始まったばかりの頃は、漁船をにわか渡船に仕立てたり、モグリ業者が横行したり、といった状況であり、安全を無視したものだった。しかし、昭和45年ごろには5トン以下で定員が13人以下、船長は小型船舶操縦士以上の免状を有するという条件を満たして、四国海運局高知支局の許可を受けた磯渡し船が現れた。ところが業者同士のまとまりはなく、それぞれの市町単位に任意組合が作られているだけであった。この任意組合は安全対策や船の設備充実を推進するというよりも、お互いが監視し合ってモグリ業者を閉め出そうという狙いのものであった。そのため、お互いの行動はバラバラであった。

昭和45年12月、宿毛市と大月町あわせて24の磯渡し渡船があったが、業者間の利害関係がからんで大月町の業者は沖の島周辺への航行はできないという取り決めになっていた。そのため、沖の島周辺への磯渡しは宿毛市内の7業者が一手に引き受けていた。平常なら十分客を捌けているわけだが、連休などの場合、数百人もやってくる客をさばくために、定員オーバーとかピストン輸送とか無理が生じてくる。それに船の老朽化もひどいという。「船のバランスを保つためにかなりの量の石を積んでいる。少しの浸水でも沈没だ」という噂もあるほどであった。このような状況下で、昭和45年11月22日に鵜来島の磯渡し船の沈没事故が発生し、船頭を含め、死者1名、行方不明者6名がでた。

　急速に発展する磯釣り渡船業に、既存の漁業者や関係漁協組は危機感を持っていた。昭和45年頃、沖の島周辺はバラエティに富んだハエが無数にあり、魚類も豊富なことから、年間3万人以上の釣りファンが殺到していた。そのため、市観光課としても、磯釣りを最大の観光資源として大々的な宣伝を続けてきた。撒き餌が常識になり、だんだん増える一方で、多い者は1日に10kg以上を使い、魚をおびき寄せて引っ掛けるギャング釣りも横行した。さらに、空きびん、カンなどの投棄もあり、磯は荒らされて、漁業に悪影響が出るようになった。

そこで、昭和46年、宿毛市と渡船組合では漁業と観光磯釣りの調整を図るため、母島、弘瀬、鵜来島の3漁協に対し、年間45万円（市30万円、渡船組合15万円）の補助金を出す協定を結んでいた。しかし、漁民の不満は高まる一方で、昭和47年2月、沖の島周辺の3漁協は、「釣り客に漁場が荒らされる」として、磯釣りの撒き餌に同意しないことを決定した。これは、補助金ではなく生活を保障できる漁場を守ることを明確に打ち出したものだった。漁民でない者の撒き餌釣りは、県漁業調整規則で漁業権者の同意が必要なことから、沖の島周辺で撒き餌が禁止となった。渡船組合は緩和を要望し、撒き餌規制や漁場汚染防止を約束することで、協定を更新していった。

昭和49年ごろの渡船では、潮の具合によるが朝5時頃には沖の島を出航し、沖の島周辺の小島や碆に客を下ろすと、再び昼食を積んで巡回し、夕方6時ごろ客を拾って帰ってきていた。渡船代は一人2,000円、旅館は一泊二食付きで2,000円であった。エサ代も高いが、獲物がないと延泊する客が多かった。シケで定期船が止まっても、釣り客は片島港から沖の島までチャーター船を利用する。料金は6名までは一人一万円かかるが、定期船の欠航が多い冬の季節も旅館で釣り客の姿を見ない日はほとんどなかったという。

昭和49年度に結ばれた協約書によると、3漁協は資源保護海域を除く、沖の島海域での遊漁に同意し、渡船組合（協約に従って、母島2、弘瀬4、鵜来島2の8業者が営業）は、磯釣り客1人1日当り120円の歩金を3漁協に納付することとなっていた。この他、協約書の第4条では、①遊漁者が使う撒き餌は、1日1人湖産エビ（アミエビを除く）十枚（8kg）以内、②空びん、空き缶、不用品を海中へ投棄しない、③釣り場、周辺魚場海域の浄化に務める、などを規定し、渡船業者が釣り客を指導することが定められていた。しかし、罰則規定がないこともあって、違反が後を絶たえなかった。

そのため、昭和50年4月、沖の島海域の3漁協と宿毛市渡磯船組合（沢近敏男組合長）が毎年4月に結んでいる「磯釣り渡船事業の推進に関する協約書」の更新について、市当局を含む5者での話し合いが開かれた。漁協側は、撒き餌規制や漁場汚染防止など協約内容がほとんど守られなかったとして反発、会では協約の更新に至らず、調印を持ち越した。漁協側は、「魚に悪影響のあるアミエビを使うのを始め、撒き餌は協約をはるかにオーバーし、1日数十kgをまいている。またジュースの空きびんや弁当箱など何でも海に捨てる」「ぬかまで持ってきてまく者までいる」と違反ぶりを指摘した。３漁協側も一枚岩ではなく、母島・弘瀬は、協約を手直しし、断固守ってくれることを条件に3漁協でそろって締結を希望していたが、鵜来島は、3漁協合同では困難が多いとし、より厳しい内容で個別に協約を結ぶことを主張していた。

昭和51年、沖の島海域は、西日本屈指の磯釣り場となっていた。中国四国はもとより、九州関西からも釣り客が来ており、正月には宿泊施設は満員の盛況となっていた。しかし、知名度が上がるとともに３漁協が撒き餌の使用を許可していない愛媛県や大月町からの区域外渡船が横行し、地元3漁業組8渡船業者との間で、トラブルが起こるようになった。同年1月に関係者が集まり協議した結果、今後は、撒き餌使用を認めた地元渡船利用の釣り客に同意書を交付、腕章などで明示して、区域外渡船利用の釣り客を排除することを決めた。

愛媛県や大月町から、沖の島付近の磯に釣り客を運ぶことについては法的に規制はなく、これまでは道義上の問題として処理されていた。沖の島では各渡船業者が日によって釣り場の割当を決め、磯の奪い合いを防止しているが、他地区からルールを無視した渡船の往来が増えたため、結果的には好釣り場の争奪戦が激化した。割り当てられている磯にお客さんを確実に下ろすため、午前2時3時と行った磯渡しに危険な時間帯に客を乗せて出航するケースが目立ってきた。地元漁協では区域外渡船を利用した釣り客については撒き餌の使用を認めていないため、今後は、見つけ次第、漁業調整規則違反で摘発することになった。

このような状況の中で、協約に参加していない宿毛市外からの海賊船や市内業者同士の競争の結果、渡船組合は自然消滅してしまった。このため、いい磯をとるための競争は危険を承知で深夜の1時2時までエスカレートし、宿毛海上保安署が注意を呼びかけていた他、都会の釣りクラブから苦情が寄せられていた。

磯とり競争を自粛し、安全確保を進めるため、昭和56年10月末に渡船組合を結成、出航時刻と磯の場所割の厳守を進めることになった。今回の組合発足は、市の商工観光課、海上保安署の指導のもと、業者の間からもこのままではいけないという声が出たことで実現した。沖の島の9業者のうち8業者が出席、渡船組合の会長に金子五郎氏（弘瀬）、副会長に沢近敏男氏（母島）を選出した。発足時に鵜来島の5業者は、渡礁時刻を決めても愛媛県の海賊船に先に取られてしまうなどの理由から未加入であった。

　昭和61年には、沖の島渡船組合（金子誠組合長）も10業者に増え、鵜来島渡船組合（家中照繁組合長）も発足し、5業者が加わっていた。かつては、グレやヒラマサの好漁場として素晴らしい釣果を上げていた沖の島・鵜来島だったが、最近は釣り客、釣果ともに徐々に減少傾向となってきた。このため、渡船料金を引き下げて多くのの釣り客に来てもらおうということで、片島から沖の島が6500円（従来8000円）、沖の島から磯場が3500円（従来4000円）、柏島から沖の島が5000円（従来6000円）へと渡船料金を値下げした。

顧客サービスのため渡船組合内で決められた出航時間より早く船を出したり、輪番制で割り当てられた磯以外の磯に船をつけるなど、互いに取り決めた磯渡しのルールを守らない組合員が相次いだ結果、昭和62年2月の臨時総会で「ルールが守られていない現状では、組合の意味がない」として事実上解散した。業者がばらばらに営業すると、気象情報や津波高波警報など遊漁者の安全を守る各種の情報が迅速に伝わらないなどの恐れがあることから、宿毛海上保安署では、再三にわたって再設立を促してきた。同年7月、沖の島渡船組合の所属業者らが会合を開き、遊漁者の安全確保を最優先課題とし、8月から組合を再出発することを申し合わせた。同年9月に実施された総会には、沖の島の11業者のうち、組合方式に賛成する8業者が出席し、11業者分の磯割をくじ引きで8業者分に割り振りなおした。料金についても見直し、新しい料金は片島から沖の島が昼7000円、夜8000円、沖の島から磯場が昼4000円、夜5000円、柏島沖の島が昼5000円、夜6000円。昼夜通し釣りの場合は、昼の料金に+4000円となった。

　昭和63年、渡船組合の総会にて、生オキアミの撒き餌の全面禁止を決めた。以前から、生オキアミは、脂肪分が多いため、食べた魚は肥満魚となって産卵状態が悪くなるだけでなく、底にたまると磯焼けして海藻が枯れる原因となると言われていた。使用禁止の要望が漁業関係者からは出されており、それに応える形となった。

同年10月、安全に磯釣りを楽しんでもらおうと渡船組合では、沖の島周辺の磯渡しする、ハエや岩に穴をあけて、直径2，3㎝長さ40㎝の支柱や1.2mのパイプなどを120本の鉄柱や支柱を設置した。

平成元年の総会でも渡礁時間の徹底など決議され、平成2年には渡礁時間を30分繰り下げることを決め、6，7月で5時、10－12月は7時、納竿時間は通年で15時となった。

平成7年5月、沖の島と鵜来島で別々に存在していた渡船組合（合わせて14渡船業者）を一本化して、「沖の島渡船組合連合会」が結成された。平成6年8月に３漁協が合併したことから、渡船組合の統合についても、話し合いがもたれていた。初の連合会の総会では、安喜初夫氏が組合長に選出された。また、片島港の船着き場周辺の整備を進めることや、撒き餌にまぜる集魚剤の使用を禁止することを決めた。

### ダイビング業

パシフィックマリン川田さんや金子渡船岡崎さんのお話をもとに、以下を記述する。

宿毛のダイビングは、1975年10月に創業したパシフィックマリンが最も古くから営業をしている。

沖の島では昔から渡船業者があって、磯釣りの渡船だけでなく潜りたいというお客さんがいるとダイビングの渡船も兼ねていた。創業当時は、レジャーダイビングはまだまだ少なく、銛や空気銃を持った魚突きを目的にしたダイビングのお客さんが多かった。ダイビングのお客さんだけでは、少なすぎて食べて行くのに足らないので、水中土木の仕事や養殖網の手入れなどの仕事をとって収入を得ていた。業者側の知識や経験も少なく、勝手なところにアンカリングされてしまうと、海底の珊瑚が壊されたりすることが、問題になっていた。

約20年前に魚突きは追いやられ、レジャーダイビングのみになった。柏島は20年位前にダイビングムーブになってNHKの番組で海の中の写真が取り上げられたりもして、知られたスポットになっていた。柏島から沖の島・鵜来島は近いため、柏島から沖の島・鵜来島にきて勝手にダイビングなどをしている業者もいた。自分の海は自分で守らなければならないという気風が強まり、平成11年に沖の島海洋レジャー事業組合が発足した。レジャー組合では、合計17か所を正規のポイントとして設置している。このポイントには、ケーソンを打ってあり、アンカリングしないでいいように係留用のブイもある。毎年レジャー組合にてメンテナンスをして、ロープをチェックして老朽化していれば替えたりもしている。そのため、沖の島・鵜来島の海は、外洋ではあるが、ダイビングをするために比較的安全であるといえる。

### その他の産業

沖の島の中で最も広い平地がある長浜では、昭和36年ごろまで60戸ほどの農家がまとまり米作りが盛んであった。一時は穀倉地帯とも呼ばれたが、昭和49年ごろには30戸ほどに減少した。昭和43年ごろ久保浦には8戸ほどの農家があり、ミカン栽培をしていたが、昭和49年ごろには4戸に減り、ミカン畑も荒れていた。昭和44年には、妹背山の山頂にて、宿毛市の補助で素牛生産のための小規模地改良事業が行われ、5戸の開拓農家がいた。2年間で10ヘクタールの牧草地を開き、50頭の和牛を買う計画であった。しかし、子牛の値が思わしくなく、資金難などで1年目からうまくいかず、山を降りたという（高知新聞　昭和49年3月18日より）。

## 沖の島の文化

### 弘瀬地区荒倉神社の祭り

以下、沖の島弘瀬地区の荒倉神社の祭りについて、市原商店の市原芳政さんへのヒアリングの結果および2016年の祭りへ参加したときの状況をもとに、記載する。

荒倉神社は、弘瀬地区の最も高いところに位置し、集落を見下ろす標高約100mの山の上、急な階段を約600段あがったところにある。荒倉神社では、春と秋に祭りを行う。春のお祭りでは、かつて大病が発生したときにお神輿を出して神頼みで大病を抑えてもらったという言い伝えから、神輿は必ず出す習わしになっている。秋祭りは、毎年旧暦8/28にお祭りをする。

祭りでは、ヤグラ、神輿、牛鬼が出ていた。しかし、ヤグラは昭和33年頃に祭りで担ぐことができず、維持できなくなって、祭りで出さなくなった。牛鬼は、戦前にはなかったが、ヤグラがなくなって以降は、神輿のみでは寂しいということで、新しく作った。沖の島は明治時代になるまで土佐と伊予に分かれており、弘瀬は土佐領側だったが、隣の集落である母島は伊予領側であった。そのため、牛鬼が伝わっていたこともあり、弘瀬でも牛鬼を取り入れることになった。

高度成長で子どもが外に出て行ってしまい、海の仕事ではなく陸上での仕事にシフトして行った。漁師も減った。当時、牛鬼は中学生くらいの子どもが担当していた。男子中学生だけで、50人近くはいた。牛鬼はいまよりか大きく、10人以上で担ぐようだった。いまの牛鬼は、6人いれば担げるように小さく作りなおしたものである。

神輿の担ぎ手は弘瀬ではエリートの16人が選抜されていた。担ぎ手は氏子の長老が決めていた。家柄や勢いのある家から、品行方正な人が選ばれた。ヤグラの担ぎ手は神輿に担ぎ手対してやっかみをもっていて、神輿の担ぎ手に嫌がらせしたりとかもあった。昭和32、33年頃には、青年団で祭りをまわしていた。昭和35年頃には、漁業から会社勤めの人が増える中で、青年団も維持できなくなって、中学生であっても、卒業して外に出てしまうような子には神輿を担がせたりもしていた。

祭り前日の宵宮では、神輿の渡御の準備と神事を行う。普段、神輿は解体された状態で神社に収められている。それを拝殿に出して組み立てて、鈴や榊、色紙で作った紙垂（しで）を上から飾り付ける。飾り付け後に、神事を行い、拝殿で直会となる。漁師がとってきた魚の刺身や婦人部の田舎天ぷら、姿寿司、稲荷、のり巻きなどを作った。いまは仕出しを頼んでいる。神輿が拝殿に出されているので、その夜はお守り役として神官と氏子が拝殿に寝泊まりする習わしである。



図 荒倉神社の神輿（境内にて）

本宮の日は朝、10時頃に御神体を神輿に移す神事を行う。神事が終わると、神輿を拝殿から出し、お下がりが始まる。お下がりとは、神輿が階段を下りて御旅所にお渡りすることで、神輿の後に牛鬼が続く。



図 　三浦家広場でのお練り

担ぎ手はお下がりの間、「ヨーサンヤ」「ヨーサンヤ」という独特の掛け声をかけあう。神輿の担ぎ手は最低18人必要。担ぎ棒が10人以上、神輿を引っ張ったり、ブレーキをかけたりする前綱と後綱という綱がついており、各4名ずつがその綱を握る。

最近は人手を集めるのが難しくなっている。幡多信用金庫の人たちが2010年代前後から応援に入ってくれて助かっている。弘瀬地区には、昭和20年代後半には1500名以上住んでいたが、いまでは100人を切っている。

神社から御旅所までの石段には途中に踊り場が3ヵ所ある。踊り場に着くと神輿は5分程度休憩する。このとき神輿の下をくぐると願い事がかなうといわれており、地区の人たちは踊り場に神輿がいるあいだにお賽銭をあげて、神輿の下をくぐる。担ぎ手はこの間、古くから地区に伝わる祭りの唄を歌う。地元住民を含め、祭りに参加する人の多くが、神輿の下をくぐる。

唄はねり唄、あげ唄、舟唄の3種類があり、メインの唄い手が唄い、周りがかけ声をかけて盛り上げて行く。ねり唄には、沖の島界隈の無人島も含めた地名が順番にでてくる。あげ唄は人が神輿の下をくぐるとき、舟唄は神輿が出発する前に歌われる。

階段を下る途中、弘瀬地区を開いたと言われている三浦家の旧屋敷の広場にてお練りをする。広場をかけ声をかけながら、神輿が勢いよくまわる。

御旅所に着くと、神輿は安置されて神官により神事が行われる。お初穂料をもってきた方には、荒倉神社の御札を授ける。



図 　御旅所での神事

元々の御旅所は三浦家旧屋敷の庭であった。浜までおろして神事をしてから、三浦家の敷地まで上げて御旅所としていた。いまは、港まで下ろした後、港の広場を御旅所としている。

神輿がお帰りで御旅所を出発するのは午後5時30分ごろ。途中、三浦家旧屋敷の広場で再び練りを披露してから神社への石段を上がります。石段を上がるころには日が暮れかかり、宵宮の日に準備しておいた御神灯が灯される。お帰りのときも各踊り場で祭り唄を歌い、神輿くぐりが行われる。

神社拝殿に神輿が到着するころには、日はすっかり沈んでいる。神官が神輿の中の御神体を奥の院にお戻しする儀式を行う。そのとき氏子のひとりがラッパを吹き鳴らし、神輿の担ぎ手たちは神輿についている鈴をリンリンと鳴らす。それが神様移動の合図になり、境内に訪れた参拝の人たちも頭を垂れ、両手を併せて一心に拝む。

### 弘瀬地区白皇神社の祭り

弘瀬でのヒアリングおよび文献調査の結果より、記す。

白皇神社（しらおうじんじゃ）は、漁師の神。旧暦の5/18にお祭りをする。神社は叙任近世であり、男たちは伝馬船（いまは、エンジン付きの船）で神社までいき、神事をする。その後、網元さん（船や網の所有者）のお宅で振る舞いがある。子どもたちはお小遣いをもらう。



図 　白皇神社の遠景（画像中央の小島の左側の鳥居のあたり）

小川(1998) や宿毛市（年代不詳）によれば、下記のような伝説がある。

元弘の乱で後醍醐天皇が隠岐に配流されたとき、一の宮尊良親王と尊澄法親王も土佐の国・沖の島に流され、児島高徳の弟、児島五郎徳光というものが、警護役であった。南予から土居二郎、沖の島から三浦義輝が案内役となって出迎えた。親王は風光明媚な小さな島に御館を営まれ、久しく安住された。その後、親王が讃岐に移ることになり、お供の武士は農夫や漁夫に身をやつして忍んでついていくことになったが、警護の児島五郎徳光だけは病のため、むなしく残らなければならなかった。そこで、親王は出発にあたり、御館の後の島を児島と名付け、御所持の鏡を白皇大明神として安置された。また、備中長船の長刀を授け、成宮勤王派という号をお許しになった。徳光は、朝夕白皇大明神に祈念して、親王のご安泰とご成功を願っていたが、病のため亡くなった。いまも、徳光を、徳光の子孫であるという沢近氏が成宮神社として祀っているという。

ただし、尊良親王が幡多に流されたことは史実だが、いまの大方に流されたと考える方が信頼に足ると思われる。

### 弘瀬地区鴨姫神社のお祭り

鴨姫神社（かもひめじんじゃ）は漁の神でもあり、女の神でもある。旧暦5/28にお祭りをする。腰から下の健康に効くと言われており、安産の神として、効用がある。もともと小川家が祭主をしており、30年ほど前までは、神主さんを呼んでお祭りをしていた。お祭りの日にはテキ屋が7〜8軒、島外から来てお店を出していた。沖の島出身の方はもとより、宇和島から乗合の船が出たりして、島の外からの信仰も厚かった。神社などでのお祭りの日や農繁期には、弘瀬小学校が午前で休みになり、子どもたちも祭りや農業に参加した。いまでいう社会勉強、身体で文化体験をしてきたし、子どもたちは貴重な労働力でもあった。

小川(1998) や宿毛市（年代不詳）によれば、下記のような伝説がある。



図 鴨姫神社

ある時、弘瀬の浦に見慣れぬ丸木舟が漂着した。見れば、美しく着飾った少女が船底に打ち伏せていた。聞けば、貴い方の姫だが、悪い病に侵され、流されたという。浦の人々の心は動いたが、後難を恐れ、助けることはせず、再び沖合に流してしまった。どこからか、一羽の鴨が飛んできて、慰めるかのように船の上を舞っていた。数日たって、少女の遺骸が網にかかった。人々はさすがにあわれに思い、浦の南の丘の上に葬った。ところが、それから不漁が続き、飢えるばかりになった。占ってもらうと、無残な死を遂げた少女の霊が、北の方にお祭りされている白皇神社は恐れ多くも天子の皇子であり、その上に当たる位置に葬られるのは恐れ多いので、地を変えてほしいとのことだった。その通りに御堂を建立すると、それから漁があるようになった。これを鴨姫神社として祀られるようになったという。

### 弘瀬地区傘鉾

以下、高知新聞アーカイブスおよびヒアリング結果より記述する。

傘鉾は、沖の島弘瀬地区に伝わる盆（8/16）の行事だ。この行事は、鎌倉時代に鎌倉を追われ弘瀬の開祖となったとされる、三浦一族が沖の島に流れ着くまでの苦難を再現し、先祖の霊を慰めたのが始まりとされる。傘鉾と言われるのは、武士が家から出る時に傘をさしていた風習からではないかと言われている。かつては、三浦家のみでの実施であったが、その後弘瀬地区全体で行う習俗となり、２年に一度の新仏供養として受け継がれている。平成21年の記録によると、神仏供養のほかに、地区の戦没者の霊を慰める1本が作られていた。

傘鉾の本体は、番傘に竹の柄をつけて２mほどの長さにしたもので、広げた傘の中に装飾が施されている。中心に遺影と戒名をかざり、傘の外周にはモールやレースの幕をつけ、その内側には鈴や造花などを散りばめる。さらに、懐中電灯やバッテリーを使用したランプを取り付けて、光る仕掛けになっている。この飾り付けの豪華さを競い、昭和60年ごろの記録では、高価なものは１０万円ほどになったという。

夕暮れが近づくと、神仏供養する家の人々は三浦家の広い庭に傘鉾をもって集まる。日が暮れると供養が始まり、大勢の地元住民や観光客が集まる中、傘鉾１本１本に読経をあげる。稚児や武士に扮した子供たちを先頭に、白装束の女性が男性に支えられながら傘鉾を持ち、家族が続き、最後尾には、抹香炊きなどの姿もあった。その後、庭の中央に立てられたやぐらの上に、音頭取りがのぼり、「オミドーンボー」と声をかける。すると場内から「ナムアミドンボ～」の声が上がる。音頭取りが「エイトーエイトー」と続けると、家族や親類が声を揃えて「エイトーエイトー」と応える。同時に、傘鉾をぐるぐる回す。「エイトーエイトー」の度に、全ての傘鉾が一斉に激しく回りだす。

傘鉾の明かりで場内が色とりどりにきらめく。再び口説きが始まると、死者を弔うようにゆっくりゆっくり回りだす。１周約２０分。踊りを挟み、また１周。そして、また１周と計３周まわる。そして、読経から２時間ほどで幕を閉じる。

### 弘瀬地区正月行事

高知新聞アーカイブスより、以下2つの行事について記述する。

#### 掛けの魚

木に魚や大根などを吊るす正月飾り「掛けの魚（いお）」。沖の島弘瀬地区で受け継がれている。

鎌倉時代の三浦一族は1205年に北条氏に追われ、九州に落ち延びる途中、沖の島に漂着した。漁を知らなかった一行が磯を松明で照らすとその明かりにアカムロが群がったので、狂喜して手づかみしたという。これをきっかけに、独自の漁法を考案し、タブノキを切り、くりぬいて丸木舟を作った。さらにカズラで魚網を編み、たいまつのいさり火でアカムロをとるようになった。これが、弘瀬地区の漁の発祥となった。一方で山を開拓して芋を作り、半農半漁の暮らしを営んだという。このような由来から、タブノキ、カズラ、たいまつ、アカムロなどはいずれも先祖が血をにじませた、開拓の象徴であるため、これらの素材にこだわった正月飾りが作られるようになった。

豊漁などを祈り、腕木と呼ばれる木に魚やしめ縄を飾り付けるこの風習は、四国や九州の漁村を中心に各地に残っている。腕木は松が一般的だが、同地区では上記のような理由からタブノキである。

横木には一年を表す十二節の釣り手をつけるが、弘瀬は十二節に藁縄ではなくかずらを使う。タブノキの元には一対の大根、先にはたいまつを一束をつけ、タブノキから垂らした１２本のかずらには魚をつける。魚はアカムロを一対や「むつまじい」と掛けてムロアジ（アオムロ）、「励ましあう」と掛けてハゲ（サンノジ）、キンメダイ、メダイなどのえらと内臓をとり、塩漬けして数日天日干しにしたものを使う。横木の両端に松と竹を茂らせ、しめ縄を張り、ゆずり葉、穂長、橙を取り付ける。完成した掛けの魚は、玄関正面の天井に近い壁につける。腕木の根元は外側に、先は家の内側に向け、根元を低く、先を高くして固定する。腕木の向きは、伸びて繁栄していくようになど、一つ一つに意味がある。タブの横木は不幸でもない限りは取り換えず、古いほど家の誇りとされている。

正月2日漁師は乗り初めをする。年の夜に洗い清めてしめ飾りをし、高々と大漁旗に松をかけた船にお神酒を供えて乗り出し、漁の守り神白皇神社にお参りした後に漁に出る。乗り初めのあとは、一年の縁起を祝う酒盛りである船祝いをする。祝い初めの肴に掛けの魚が使われる。掛けの魚は、その後、正月の間の保存食となる。島を離れて暮らす嫁いだ娘や身内に掛けの魚を贈ることもある。正月20日を骨だたきと言い、掛けの魚はこの日までに食べつくし、正月仕舞いとする習わしである。

#### 門明け

沖の島では、元旦の朝、初日の出よりも早く門明け（かどあけ）が行われる。これは、小学生くらいの男の子が元気に家々を回り、祝詞を述べることで、新年の初めての来客が未来ある男の子であり、その男子によって初戸が明けられ、新年の祝詞が述べられることは、一年の幸運がひらけることとして、元旦の習俗となっている。

家々では、明かりをつけ、おみきを支度して訪れを待つ。門明けを受けた家では、2日以後の初めて会ったときにお礼として「ほうびきぜに」を渡す。ほおびきぜには、お年玉程度のご祝儀で白紙に折り包む。

もし門明けが訪れてくれなければ、一年の縁起にかかわる一大事となるため、年末が近づくと親戚や近くの男の子のある家に頼んで門明けを確保する。本来は、午前零時を回り、旧年から新年へ変わるとすぐ、集落中のどの家の戸も明けるものであったが、昭和57年ごろには頼まれた家のみを訪ねるようになっていった。

### 母島地区日吉神社の秋祭り

高知新聞アーカイブスより、以下記述する。

母島の氏神様である日吉神社の秋祭りは、ヤグラ、神輿のほか、伊予の祭りの特徴である牛鬼、五ツ鹿踊りも実施される。五ツ鹿踊りは子ども、ヤグラは青年団、神輿は壮年、と役割分担が決まっていて、全世代が祭りに参加する。祭りの日は、旧暦の9月10日であり、毎年日付が変わり　毎年、祭りのために島に帰ってくる人たちも多かった。

午前10時過ぎ、母島漁港から険しい石段を約300m登った神社の本殿で、御霊移しの神事が行われた。狭い境内には大勢の島民が詰めかけ、子どもたちは五ツ鹿踊りを奉納する。雄シカ4頭、雌シカ1頭のシカ頭を被り、赤い布の顔隠しの下に付けた締め太鼓を打ち鳴らし、はやして歌う。神事が済むと、悪魔祓いとして体長6mの竹わくに布をかぶせ中に入った十数人が担ぐ牛鬼、独身の若衆や30歳代までの妻帯者の担ぐヤグラ、年配連中の神輿の順で石段を練り下がる。「千秋万盛　ごとかのうた　末は鶴亀　五葉の松　とろりとろりと吹いたよ南風が　様ものらりょか　瀬戸の海　めでためでたの若松様よ　枝も栄える　葉も繁る」古くから伝わる櫓唄に合わせて、急な石段を下っていく。

船揚げ場前の広場にて二度、三度とお練りを行い、休憩となり、夕方までは宴会である。この間、五ツ鹿踊りは、家内安全、悪魔払いの祈りを込めて、家ごとを回る。一番最初に庄屋の直系である沢近家にて5頭での五ツ鹿踊りが披露される。その後各家々の門口には、3頭と2頭の2組に分かれて回る。

夕方までは各家々で宴会がおこなわれる。お祭りに向けて、島外に出ている子や孫、兄弟らが帰ってくる。年に一度祭りの日に顔を合わせる若者も多く、夕方からの練り合いに向けて、大いに盛り上がる。平成22年頃には本土から運ばれた皿鉢料理が家々に並び、島のみんなが自由に行き来していた。一つの家にとどまる時間は30分程度、島唄の合唱が移動の合図で、歌い終わると次の家と向かう。

午後５時過ぎ、神輿が港内の船を１隻１隻まわり、大漁と航海安全を祈ってこし歌を歌い、お清めする。この後、広場では、様々なくどきやはやしに合わせ、300kg以上ある神輿とヤグラが駆け回るお練りを4時間近く全力で続ける。このお練りは、若衆が担ぐヤグラが日吉神社に帰る意思を示さねば、神輿は単独でお帰りできないのが慣例となっている。大正時代に肩の痛みに耐えかねた壮年たちが、ヤグラを残して引き上げたため、ヤグラは3、4日も浜辺にほったらかしとなり、地区を二分して反目が続いた。最後は、地区の長老が羽織袴で青年代表に詫びを入れて一件落着となったこともあったという。

頃合いが熟すと、神輿とヤグラは綱をかけて、住民総出で引いて、お帰りを助ける。再び神社へ戻り、境内にて、神輿とヤグラを激しくぶつけた後、全員が本殿に入ると、一斉に扉が閉められ、灯が消える。女人禁制となった本殿からは、「エイヤ、エイヤ」のかけ声と担ぎ手が床を踏み鳴らす音が約１分間続く。神事を終え、神が神輿から抜け出ると、扉が開け放たれ、担ぎ手が境内に降りて、祭りが終わる。

平成9年頃にはヤグラを維持できなくなり、牛鬼と神輿のみになる。しかし、若手世代が担ぐ牛鬼と父親世代が担ぐ神輿が競争する形で延々と練りが続くのは当時と変わらない。早く神社に帰りたい神輿を牛鬼が先回りして通せんぼする。「帰りたければ、早く走ってみろ」とばかりに神輿が道をふさぐ。神輿側が「もう次で帰るぞ！」と怒鳴れば、「帰れるやったら帰ってみや！」とやり返す。

### 沖の島の食

　沖の島弘瀬の市原芳政さん（昭和23年生）によれば、島の1960年代はじめまで、主食は芋と麦であった。市原さんは、実家が商店をやっていて、現金収入があったため、父親と息子である市原さんはある程度白ご飯を食べることができたが、母親と姉妹は芋と麦であった。

当時弘瀬では普通、祭りや法事でないと白ごはんは食べられなかったため、白ごはんが一番のご馳走だった。先祖を祀るのは重要なことなので、法事でも姿ずしや稲荷ずしなどごちそうがでた。

地豆は島で古くから作られているが、実は贅沢品だ。芋麦は主食だし、現金収入になるが、地豆は現金化できないので、つくっている家は土地に余裕があるということになる。芋は干して売っていた。ねぎ、だいこんなどおかず用の野菜のみ限られた畑で自給していた。土地がやせているため、畑でよいものはなかなか作れなかった。

下記、高知新聞アーカイブスより、特徴的な島の食材と食べ方を記載する。

・グジマ：ヒザラガイのこと。身が固いため、まず一昼夜とろ火で煮て柔らかくする。そして8枚の殻などを取り、料理する。こりこりしているため、炒め物や酢の物がいい。作るのに手間がかかるため島でも珍味。

・コクショ：仏事の時に食べる精進料理。カボチャ、小芋、こんにゃく、厚揚げ、大根などを角切りにしたものを、砂糖と醤油を加えて煮るもので、出汁はすりつぶした落花生。見た目はこってりしているようだが、口に入れると落花生の味がほんのりと広がりあっさりしている。

・ソーメン：落花生をすりつぶしたものに、酢などを合わせてタレを作る。薄茶色で粘り気がある独特なもの。

・モーブリ：お祝いの席などで出されるご飯もの。自家製の干し大根を中心に、磯の貝やごぼう、にんじん、しいたけ、等を煮たものをご飯に混ぜ、仕上げに煎った落花生をかける。酢は使わない。

・冷や汁：落花生をすり鉢で油が十分出てくるくらい長い時間すり続ける。これに味噌と黒砂糖と水を加えてとろみを出す。出来上がったものをご飯にたっぷりかけて食べる。

・ツボガキ：フジツボのこと。海水か塩水で煮て、熱いうちに金槌で殻を割って食べる。島では大きいものは直径・高さともに5cmほどになる。

・炊き込み：肉類は使わず、魚介類を豊富に入れるのが特徴。ナガレコ、ニナのほかに、きびなごをすり身にして自家製かまぼこを作り入れる家もある。ほかに、ごぼう、しいたけ、厚揚げ、などを適当に入れる。

# 鵜来島について

## 鵜来島の概要

鵜来島は、片島港より23.3㎞、島の周囲6㎞、面積は132ヘクタールの離島である。島の中央には、標高252mの龍頭山がある。この山頂にはかつて、3つの神社があり、第二次世界大戦中には日本海軍の諸施設があった。車の走る道はなく、集落は島の東側の港に固まって存在している。鵜来島、姫島、その他の島々は水成岩からなり、約１億年前の中生代白亜紀の地層である。

## 鵜来島の歴史

以下、わが母校「鵜来島」編集小委員会（1989）より、鵜来島の歴史の概略を記述する。

#### 明治時代までの鵜来島

鵜来島にいつ頃から、どのような人たちが定住していたのか、はっきりと示す文献資料は存在していない。そのため、文献が存在する室町時代以前は推測となっている。

平安時代939年純友の乱で知られる藤原純友は海賊を討伐した後も帰任せず、宇和島港外の日振島に本拠地を置き、現在の高知県と愛媛県の県境にある松尾峠にも純友の出城が存在していることを考えると、鵜来島も戦略上の要塞地として領有していたかもしれない。1185年に平氏は壇ノ浦にて敗れ、各地に落人伝説が生まれた。鵜来島にも伊予からそうした落人が渡ってきていたかもしれない。

史実に基づけば、室町時代、伊予の御荘勧修寺氏は、鵜来島を領有し、鵜来島を経て、その勢力を沖の島北西部まで拡大、母島にその中心を置いていた。

安土・桃山時代には1575（天正15）年、鵜来島は伊予の戸田民部氏が領有するところとなった。そのころ、戸田三郎四郎氏が、従者を連れて島に移住し、島の庄屋を務めたとされている。

江戸時代には、鵜来島は卯来島と表記されていた。1614（慶長19）年、領主の圧政に耐えかねて、島民の離散が起こっている。1616（元和2）年、幕藩体制が確立する中で、伊達秀宗を藩主とする宇和島藩の領地となった。この年、沖の島を含めて、大規模な「島一揆」が起こっている。宇和島藩は、島を流刑の地と定め、日振島、戸島を近流の地、鵜来島と沖の島を遠流の地とした。そのため、鵜来島には「流人伝説」が残っている。

1706（宝永3）年、鵜来島には人口男107人、女93人、戸数41軒があり、鰘網1帖、鰘船7艘、鰹釣船1艘、小舟9艘を有していた。

1729（享保14）年や1760（宝暦10）年には、島が困窮し、役務や年貢の免除がなされている。

1808（文化5）年には、全国地図を作製した伊能忠敬が従者7名を連れて鵜来島に測量のため、来島していた。

1874（明治7）年には沖の島母島と鵜来島は高知県に編入された。

#### 第二次世界大戦中の鵜来島

1945（昭和20）年5月、日本帝国第二総軍は、アメリカ連合国が南部九州と南部四国に上陸作戦を展開すると判断した。そのため、宿毛湾正面防備として、第三百四十四師団（剣山）が編成され、鵜来島もその最前線にある日本海軍の基地として、要塞の島となった。

軍事設備は次のようであった。

・鵜来島防備衛所（自力発電所、油庫、第一喞筒所、第二喞筒所）

・鵜来島海面砲台（兵舎、烹炊所及び浴場・洗面所、便所）

・鵜来島砲台（指揮所、弾薬庫、喞筒所、自力発電所、便所）

砲台には、宿毛湾で最大規模の15ミリ大砲3基が設置されていた。衛所には、電波探知期が設置され、重要な電波基地となっていた。

1945（昭和20）年6月29日、出航していた鵜来島漁船「勝鬨丸」は、宿毛湾ビロー島とムロバエのほぼ中間の海上において、アメリカ連合国戦闘機2機によって、計6回の機銃掃射を受けた。乗組員3名がなくなった。

1945（昭和20）年8月、県・宿毛警察署は鵜来島島民に対して「全島移転勧告」を出汁、移転先を橋上村と指定した。当時の沖の島村事務報告書によると、

「8月12日より同14日に至る3日間を以て予定総人員の転移を完了したるも、ポツダム宣言受諾により、復村となり、同月22日より26日に亘る5日間に転移総人員の復村をえたるも、此れに要した損益金は、五万八千二百円を費やせり」「移転先において、医療施設不備なるため、2名の小児を死亡せしは遺憾の次第なり」

と記録されている。

このとき、鵜来島島民は、海上は、銃撃を恐れて、夜中、貨物船に乗った。陸上でも、月の光をたよりに橋上村まで歩いて行った。橋上第一小学校にて1泊し、次の日から、全員坂本の民家に分宿した。この疎開は最長15日間以内であったが、どうしても先祖の墓のあるこの島で死ぬのだったら死にたいと行って、2人の老人が疎開を拒否して、鵜来島に残った。また、衛生環境の悪さにより乳幼児に死者が出た。

#### 第二次世界大戦後の鵜来島

##### 鵜来島の人口

昭和35年には81世帯440人が鵜来島に居住していたが、昭和40年には世帯数は変わらず、人口が343人と約100人減少した。その後、減少の一途をたどり、昭和50年には194人、昭和60年に133人、平成7年には100人を下回り60人、平成17年44人、平成27年23人と推移した。

　一方、「わが故郷鵜来島」によると、鵜来島小学校の児童数は、明治4年48人、大正5年70人、大正10年には43人と増減し、その後昭和10年まで児童数20人～30人、昭和11年から昭和18年まではおおむね40人台、昭和19年から28年まではおおむね50人台で推移する。昭和29年に60人台となり、昭和31年から昭和37年までは70人台、とりわけ昭和33年には83人となり過去最高の児童数となった。昭和40年代に60人台から20人台（昭和40年64人～昭和49年24人）まで急減、昭和50年代は20人台から10人台（昭和50年24人～昭和59年10人）まで減少し、閉校となった昭和63年には3名であった。

図 　鵜来島の人口と世帯数

※　平成7年～平成27年は国勢調査、平成2年は平成2年1月末日現在の人口調査票（沖の島集落センター提供）、昭和60年以前は国勢調査の結果を「わが母校　『鵜来島』」より使用

##### 離島振興法による開発

1952年（昭和27年）には離島航路整備法が制定され、離島航路の維持・改善のための国の助成が始まった。翌1953年（昭和28年）には離島振興法は10年間の時限立法として制定され、漁礁の設置、港湾の整備、生活インフラの整備などの事業が推進された。鵜来島漁場の島民の生活環境整備は急速に近代化した。

一例として、港湾の整備をみてみると、1950年代には自然港に近い漁村であり、岸壁も防波堤（桟橋）もなかった。1960年代には岸壁が完成したが、防波堤（桟橋）はまだなかった。1970年代には防波堤（桟橋）が徐々に伸びていった。具体的には下記の年次にて個々の事業が推進された。

・1973（昭和48）～1974（昭和49）年　漁港局部改修事業1（港岸壁70m）

・1977～78年　漁港局部改修事業2（港岸壁85m）

・1978年　アメリカ海軍演習場リマ海域対策事業（大型漁礁4m角×10）

・1979年～1980年　漁港局部改修事業3（港岸壁6m）

・1981年　沿岸漁業整備開発事業1（築磯漁礁1810m2）

・1982年～1983年　第七次漁港整備計画漁港改修事業（港防波堤5m）

・1983年　沿岸漁業整備開発事業2（並型漁礁2m角×51）

・1984年　第七次漁港整備計画漁港改修事業（港防波堤9m）

・1985年　第七次漁港整備計画漁港改修事業（港防波堤12m）

・1986年　第七次漁港整備計画漁港改修事業（港防波堤24m）

・1983年　沿岸漁業整備開発事業3（並型漁礁2m角×57）

・1987年　第七次漁港整備計画漁港改修事業（港・消波ブロック設置）

##### 鵜来島の電気の変遷

鵜来島に初めて発電機を持ち込んだのは、第二次世界大戦中の日本海軍であった。龍頭山の砲台と衛所にあわせて53坪の発電所を建設し、90馬力2機の発電機が設置された。しかし、これは戦後アメリカ軍によって爆破された。

1948（昭和23）年頃、地区の有力者の家にはじめて、8ボルト直流二次電池が導入され、電気が灯った。これは、充電の不便さと有力者の家庭だけの使用という問題があった。1958（昭和33）年、学校より校内放送設備などに伴って、自家発電機設置の要望が出され、それが契機となって鵜来島電気利用組合が生まれた。離島振興法の適用も受けて、35馬力の火力発電所を設置した。この発電所には、二人の職員を雇用し、電気料は初めは1戸につき13kwまで950円となった。電気の使用時間は、特別の場合を除いて、日没から午後11時までであった。

1967（昭和42）年、65馬力の発電機に取り替えられ、1973（昭和48）年、沖の島より、四国電力の海底ケーブルが敷設され、送電が開始された。これ以降、電気が一般家庭にも普及していった。

##### 鵜来島の水道の変遷

島内2か所の井戸を掘り、共同で使用していた時代が長かった。

1941（昭和16）年、日本海軍は龍頭山の西下谷とサガリ松100メートル下とに水源水槽を建設した。貯水タンクをサガリ松と学校校舎脇と龍頭山に設置し、6坪の喞筒所を建設した。終戦後も、この施設設備を活用した。しかし、島内雑木の伐採によって、3町5反の開墾をしたことなどから、飲料水不足に陥った。

1956（昭和31）年、水源槽の増改修がおこなわれ、1964（昭和39）年には簡易水道施設が、離島振興法の適用を受けて完成した。しかし、時間給水制で、水量水圧が低かったため、各家庭では自家貯水槽を作り、井戸を掘り、雨樋を水槽に引き込んだりしていた。自家貯水槽が作れない家庭は、バケツで水運びをした。このころの水道料金は、1家庭225円、風呂のある家庭は345円であった。

1981（昭和56）年、水源地水槽の新建造、旧校庭跡に電動モーターポンプ、大貯水タンク、浄化設備などが建造設置された。これ以降、鵜来島は近代的な水道施設を持つ島となった。

#### 現在の鵜来島

現在の鵜来島の戦時中の遺跡について、現地調査および田中辰徳区長へのヒアリングの結果を記述する。

龍頭山への道は、3ルートあるが、現在使えるのは灯台に行く途中の左側の案内板（「山頂まで50分」）に沿って上がっていく1ルートのみである。他に、春日神社の手前にある墓地の奥からあがるルートと、砲台の材料の鉄などを引っ張り上げるために使用したまっすぐショートカットして中腹まであがるルートがあった。山頂に至る道の上下には、ずっと畑がついていて、石積みの段々畑が山頂まで続いていたことがわかる。2000年代初頭までは、年に2回草刈りをしていたが、2002年に龍頭山の山頂にあった神社2つを春日神社のほうに下ろして以降は草刈りも日常的にはやっておらず、道は荒れている。いまは山頂へ続く道の段々畑は全く耕していない。

図 龍頭山山頂への山道

道の途中を右後方にあがっていく道があり、そこに貯水タンクがある。かつては、運動場になっていた場所である。そのさらに先の分岐があり、右に行くと水源地、左に行くと山頂に続いている。田中区長が子どもの頃は、この辺りから下に降りる時には、段々畑をぴょんぴょん飛んで下の道まで降りていたという。



図 鵜来島の砲台跡（手前が砲台の据え付け後の穴、奥が衝撃吸収の構造物）

砲台跡は山頂付近に砲台跡は3つある。砲台が据え付けられていた直径3mくらいの穴と、砲台の衝撃を吸収するような四角い横穴が8つ空いた構造物がある。その構造物の隣に弾薬庫がある。入り口が5m×5m、奥行きが2~3mくらいのコンクリートの構造物である。弾薬庫の中には竪穴があるものもある。竪穴の先は横穴になっているが、どこまで続いているのか不明である。現在は狭くなってしまっていて、調べることは難しい。

## **鵜来島の漁業**

以下、わが母校「鵜来島」編集小委員会（1989）、高知新聞アーカイブスおよび中山達男さん、宮本五さんなどのヒアリング結果より、鵜来島の漁業の概略を記述する。

#### 戦前の漁業

鵜来島の基礎は、黒潮本流と豊後水道海流の合流点に位置する水域に位置し、好漁場であることによる。そのため、鵜来島の基幹産業は漁業であり、特にカツオ漁であった。

1878（明治9）年、鵜来島漁民は、それまでのカツオ漁から珊瑚採取漁に切り替えた。明治13年ころは、1船200円～400円（現在の価値では数千万円にあたる）の豊漁であった。

1894（明治27）年、鵜来島の船団は、17船あり、戸数は59戸であった。1904（明治42）年、宿毛湾は大暴風雨に見舞われ、珊瑚量は壊滅的な打撃を受けた。それ以後、カツオ漁にもどり、市場の変化の中で様々な漁種の変遷をたどっていった。

#### カツオ漁

昭和30年代（1950年代中頃）、鵜来島には鰹節の工場があった。現在の小学校の建物の前の海に対してスロープになっている部分はもともとは浜になっており、そこに船をつけて、獲ってきたカツオをぽんぽん投げていた。

昭和45年頃、遠洋の50トン級のカツオ船が鵜来島にあった。乗組員20人程度、春は沖縄、その後だんだんと北上し、三陸沖までカツオを追いかけていた。冬になり、カツオが終わる1～2か月はサンマも獲っていた。

同じころ、鵜来島には6隻（1隻あたり15～18人乗り）の19トン級のカツオ船があって、深浦漁港に水揚げしていた。当時、深浦は全国的にカツオの産地として名を馳せており、一日中カツオの入札がなされていた。伊予の船は14～15隻（1隻あたり20～23人乗り）、高知県宇佐や久礼の船12～13隻（1隻あたり10～12人乗り）も深浦にカツオを水揚げしていた。昭和35年頃（1960年代）には母島にもカツオ船が2隻あったが、昭和45年頃（1970年代）にはなくなっていた。豊後水道はものすごい量のカツオが水揚げされていた。漁はほぼ日帰りで、悪くても1日4～5トン、よいときには20トンを水揚げした。深浦の市場では単位が貫目だった。60kgくらい入るざるみたいなキャリーが何百も並び、天秤ばかりで量っていた。そのため、船が2隻も入港したら、いっぱいいっぱいだった。

カツオ漁では5月頃がカツオの活性が最も高く、食いがよく、姫島近くまでカツオが入ってくると、一日に2回水揚げすることもあった。夜明けから釣りはじめ、昼まで7～8トン獲って深浦に水揚げしてから、また漁に出て夜まで釣って深浦に水揚げした。

餌は伊予からとっていた。その日に獲れたてのイワシは、網に慣れていないため、船のいけすでパニックを起こして、いきが悪かった。昭和45年頃（1970年代）になって、網で3～5日ならしたイワシを餌にするようになって、格段にいきがよくなった。この頃、カツオが豊漁続きだった。

昭和50年代には、カツオ船が4隻はあった。島だけでは人手が足らず、外からも人を頼んでいた。この時も船の水揚げは全て深浦漁港にしていた。深浦では、24時まで市場が開いており、水揚げしたそばから入札をしてくれた。片島漁港などから、たまには宿毛でも水揚げしてや、といわれるので水揚げしたこともあるが、買い手がつかなかったりすることもあり、やはり深浦漁港に水揚げしていた。

昭和55年頃（1980年代）になると、思うように釣れなくなり、漁場も広くなった。深浦のカツオ船の数も約半分に減っていた。一方で、いままでは大型船を主に操業していた土佐佐賀で大型船がだめになってしまい、19トンのカツオ船に鞍替えする船主があらわれはじめた。この頃、佐賀船籍の19トン級のカツオ船10隻程度深浦にもカツオを水揚げするようになった。

昭和58、9年頃、鵜来島の最後のカツオ船が廃業したが、その後、平成元年、2年ごろ一時復活した時期もあった。

カツオ船では、船主は船のオーナー、漁労長は船頭のことで、出漁してからは漁労長がすべて取り仕切る役割であった。他に、機関長や無線長など役割があった。中学を卒業してすぐの新人でもベテランの年配でも同じ一人前として扱われた。

配当について、同じ鵜来島でも船によって考え方が異なっていたようである。中山達男さんへのヒアリングでは、売上から経費（主に燃料代と生餌代）を引いたのち、半分を船主がとり、残りの半分を乗組員数＋１で割った金額を分配していた。＋１分の配当は、役職者などへの手当となった。水揚げが良かった時などは、配当とは別に船主から給金をもらうこともあったという。

一方、宮本五さんへのヒアリングでは、船の稼ぎは、７：３で、船主と乗組員で分けていた。餌や燃料などの必要経費については全て船主持ちで７割のもちだった。他所では割合が６：４だったりすることもあったし、経費の考え方も異なっていた。乗組員側に餌と燃料の負担がないので、その点は乗組員側にはよい取り決めであったという。配当となる3割のうち、乗組員が10人だったら、＋2人して12人で3割分を山分けし、＋2のうち1人前は漁労長、残りの＋1は機関長と2番船頭（副漁労長）で0.5人前ずつ取った。船主の稼ぎのなかから、1人前に当たる分を漁労長につけたりしていたので、漁労長は3人前分稼ぎがあった。

#### イサギ漁

平成2年（1990年）前後の10年くらいはイサギ漁が流行った。平成29年の現在では600～800円／kgで安いと500円を割り込むこともあるが、当時は今の3倍の2000～2300円／kgで、2000円を割り込むことはなかった。2000年（平成12年）代初頭まで高値で推移していた。

イサギ漁は、夜明け前に出船して、夜明けから正午まで釣って、80～100kg／日を獲っていた。いけすで生かしたまま、14時頃に深浦へ入港し、〆たり水揚げの準備をして、15時には水揚げ、15時20分には入札が始まっていた。イサギは250～300g／尾が主なサイズだった。

## 鵜来島の文化

### 春日神社の縁日

毎月1日と18日は春日神社の縁日であり、お参りする。以前は、島の人全員でお参りしていたが、いまは都合がつく人だけになっている。故人の写真をもってきて、ロウソクを立てて、お賽銭をして、太鼓を叩いて、手を合わせる。

春日神社を背にして左手の階段を上って上にある天照皇大神宮をお祀りしているお伊勢様、突き当りにある金比羅様、金毘羅様の裏にはかつては龍頭山の山頂にお祀りしていたが1990年代に下ろして移した剣（つるぎ）様と権現様、それぞれにお参りする。その後、本殿に戻ってきてお参りした人全員で、お神酒を頂く。「一献じゃいかん」といって、2杯以上飲む。理由は不明。かつては、春日神社は今よりももっと奥まったところにあったが、文化15年に今の位置に移してきたと考えられている。宝物として真剣があったが、いつの時代かに盗まれてしまい、今はない。



図 春日神社境内の上にある金比羅様の裏にある剣様（中央）と権現様（左）



図 春日神社の縁日に寄り合って御神酒を頂く

### 春日神社の春祭り

3月にはお春祭りをする。釣り漁師も渡船業者もみんな戻ってくる。大月町から、たいさん（神職）がきて、金の御幣をもらう。

### 2017年の春日神社の大祭

以下、2017年に実施された春日神社大祭について、現地調査の結果を記述する。

2015年以前は、前日に準備と宵宮、当日、翌日に片付けと3日間で完了していたが、いまは人手も少なくなって、1週間前にも集まって準備をしている。2017年の秋祭りに向けて、1週間前には、牛鬼の準備と御旅所の設置をした。

牛鬼は、木や竹をしならせて枠を作っており、3cmほどに切った生竹で枠を補強し、布を巻き付ける。牛鬼の頭の部分からからお尻にかけて、木の枠に沿って竹をしならせて、据え付ける。頭側は竹が密集するため、竹の先を刃物で鋭利にして、枠に突き刺し、お尻側では長さを調整して枠に差し込む。

御旅所は、旧小中学校の建物に格納してある、枯れ竹を組み合わせて、校庭の入り口側の端に設置する。

祭りの前日には、参道ののぼりを設置し、神輿とヤグラ、牛鬼を組み立てて飾り付けする。ヤグラと神輿は拝殿と倉庫にばらばらにされて格納されている。主なものでは、ヤグラの土台と神輿の飾りは拝殿の中、神輿の本体とヤグラの部品は倉庫に収められている。それぞれ取り出して、組み立てる。牛鬼は拝殿の外側面につり下げて格納している。取り出して、頭をすげつけて、衣を被せ、飾りをつける。ヤグラと牛鬼は拝殿内には収まらないので、外に台を置き、その上に据えられて、夜露でぬれることがないようにブルーシートを被せる。一方で、春日神社周辺の神様へもお餅をお供えする。



図 　鵜来島春日神社　牛鬼の準備

夜、宵宮では島民と関係者のお賽銭が集まり、拝殿で神事が行われ、そのまま直会となる。直会には、男性のみが参加していた。

祭り当日、1.5mほどのマグロを3尾解体し、ふるまいの準備を進める。朝、7時片島発の定期船だけでなく、9時と15時片島発のチャーター船が出船し、約350人を来客を集めた。島の入り口に、受付が設けられ、参加費が集められた。2015年から復活して、会費3,000円となっている。

10時30分頃より、春日神社での神事を開始し、神輿に神様を移す。神輿と神輿の担ぎ手、地区や祭りの役員も拝殿の中で神事に参加する。11時過ぎ、神事のあと、牛鬼、神輿、やぐらの順で、御旅所が設けられている旧小中学校の校庭までお下がりする。ヤグラには、おしろいと口紅でお化粧した5歳前後の男の子（童子）が4人乗って、ヤグラの上で太鼓をたたく。童子は「あらよーい、やっせ」と声をかけ、担ぎ手はそれに応じて「よりせー、はりせっ」と掛け声をかける。

傾斜が急であり、道幅も狭いため、特に神輿とヤグラには、祭りの役員が前後で進行管理をして、参道の住宅にぶつかったり、担ぎ手が住宅の壁とヤグラの間に挟まれたりしないように、注意をしながら降りていく。

下に降りるとヤグラには、担ぎ棒が取り付けられる。ヤグラを取り囲むようにして横に4本、縦に2本の丸太を括り付ける。ヤグラの前後の2本づつの担ぎ棒だけでは担ぐことができる人数が最大でも20名程度だが、丸太を括り付けることによって40人程度まで担ぎ手として参加することができるようになる。



図 　春日神社からのお下がり

11時30分頃からお練りを開始。お練りでは、まず牛鬼が校庭を反時計回りに回り始める。牛鬼が3周程度まわると、練り唄が歌われ、ヤグラについている祭り役員の合図で、ヤグラを大きく上下に揺らし、「せいやー！せいやー！」と気合を入れるかのように掛け声を挙げる。神輿も同様に上下に揺らす。3周程度したところで、ヤグラが校庭の中央に出て、その場で反時計回りに回り始める。その後、神輿も加わって牛鬼を追いかけるようにして回る。ある程度回ると、神輿が御旅所に帰り、牛鬼も校庭の反対側の元居た場所に帰り、ヤグラも元の位置に帰る。ヤグラはお練りを終えるときに「せいやー！せいやー！」と掛け声を挙げてならが、上下に揺らす。これを何度も繰り返す。お練りの最中には、小学生くらいの子どもがチャンパを叩きながら牛鬼の外側を走り回る。



図 春日神社秋祭りでのお練り

神輿、ヤグラ、牛鬼にはそれぞれ、かじ取りという役割があり、お練りをするときに引っ張ったり、方向を先導したりする。ヤグラのかじ取りと牛鬼のかじ取りが手をつなぐと、牛鬼に加速がつき、神輿に追いつくようになる。ヤグラのかじ取りと神輿のかじ取りが手をつなぐと、神輿に加速がつく。ヤグラのかじ取りが、牛鬼・神輿それぞれと手をつないだり、離したりすることで、お練りにダイナミックさが生まれる。

お練りが終わると、御旅所にて神輿の前で神事が行われる。島民や祭りの役員が前に座り、その後ろに神輿の担ぎ手が座る。お練りの後には、紙垂をつけた榊をもった天狗が、集まってきている人たちの間を回り、一人ひとりの頭の上で榊を振って、お払いしてまわる。

その後、もち投げをして、午前中は解散となり、参加者全員にお弁当、お刺身、ほうちょう汁（大量の生キビナゴで出汁をとり、小麦粉を練った「ほうちょう」がはいっている）が振る舞われる。

午後は、自由時間となり、16時30分頃より夕食として島のお母さんたちのおにぎりなどが振る舞われ、17時30分からは夜のお練りが始まる。途中、神輿が校庭の中央に出て、神輿の下を参加者が次々にくぐる時間が取られた。神輿の下をくぐり、反対側に出て、反対側から神輿をくぐり、最初に入った側から出る。すると、願いが叶うと言われている。また、神輿の下をくぐり、元の側にくぐって戻らないとよくないことが起こると考えられており、そのような参加者には祭りの役員がくぐって戻るように指導していた。その後、お練りに戻る。かけ声をかけながら、牛鬼まで走って勢いよく担ぎ手が加わったり、何度も繰り返し競り合いやぶつかり合いが行われ、会場は熱気に包まれる。18時30分頃に中休みとなり、花火が打ち上げられる。花火が終わると、春日神社へのおかえりとなる。おかえりは、牛鬼、ヤグラ、神輿の順で春日神社へ戻る。境内に3者が揃うと、最後のお練りとなる。神輿は拝殿に入り、神事が行われる。

祭りの全行程を終えて、21時30分には350名の参加者は、チャーター船と臨時の宿毛市定期船に乗り込み、帰路につく。

### 昭和40年代の春日神社のお祭り

高知新聞アーカイブスには、鵜来島中学校教諭であった荻田次男氏による昭和42年の祭りの様子が、昭和42年10月20日付の記事としてある。詳細に当時の祭りの様子をいまに伝える貴重な資料であると考えられるので、長くなるが下記に、転載する。

‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐

高知県のさいはての孤島鵜来島では、秋祭りが近づくころになると、麦つきや石臼での粉ひきという労作業のなかで、麦つき唄や粉ひき唄がうたわれた。麦つき唄は、7人が輪になってやるのが一番調子がよかった。粉ひき唄は、暗い板の間で一人石臼をひく時の唄だ。

昭和42年の秋祭りは、9月21日であった。都会からは主に娘たちが、カツオ船からは男たちが帰ってきて、島に30人ほどの青年たちが集まった。島の青年団員は60名ほどで、祭りの主な行事は、ほとんどこの青年団が受け持つことになっていた。今年も、青年団の執行部がカツオ船から降りるとすぐに、青年たちは祭りの準備に取り掛かった。

氏神の春日神社は、谷の南斜面の一番上の丘の中にあった。その狭い境内に、旧軍隊式のラッパと法螺貝の合図で、青年たちは集まるのである。青年たちはまず、3mほどもあるヤグラを出してきて、きれいに掃除し、修理や飾りつけをする。次に、この島の特徴である牛鬼を出してきて同じような作業をする。牛鬼は、この祭りが伊予の儀式であることの証拠の一つとなるもので、竹で編んだ3mほどの胴体の頭部に牛鬼の面をつけたものである。中に10人ほどの青年たちが入って、「獅子舞」のように牛鬼の面を動かしながら担いでいく。地獄にいる牛鬼のこのような様式は、闘牛の本場伊予から伝わってきたものである。それは、鵜来島が、伊達公支配下の伊予藩宇和島の外海村に属した1590年代から、有名な「ササヤマ論争」をへて、1874年高知県に属するまで、母島に「御番所」を置く伊予の＜植民地＞であった歴史を物語るものなのである。

青年たちの準備が済み、夜になると「宵宮」が行われる。「神主」が船でやってきて祝詞をあげる。島に神の降臨を祈るのである。その場に「ヨイノモウシ」も座っている。ヨイノモウシは、氏子総代と島の有力な年寄り組（船頭、区長、役員）で構成されている。ここには青年団のだれも入れてくれない。青年団はおよびでないというわけだ。中学生の男の子3人が三番叟を演じてから、夜明けまでの間、長い「お籠り」に入る。この島では、男たちがカツオ船で海に出かけた後、大漁と安全と病気平癒を女たちだけでお宮にこもり、酒宴をひらく「オコモリ」として日常的に実施されている。オコモリは、夫のいない寂しさを紛らすとか、井戸端会議の場にするとか、親睦と連帯感を増すためにとか、島の単調な日常生活からの逃避とか、そういった機能の比重が重くなっているようである。

一夜明けると、島は長い、長いお籠りから解放されて、感謝と歓喜の祭りとなる。これから鵜来島の海の祭式の本番が始まる。

神主が御幣を高く振って、集まった島の人たちにおはらいをすると、青年たちは、牛鬼とヤグラを担いで、谷の底の浜の御旅所に向かって、鵜来島特有の石段を、勢いよく降りていくのである。しかし、ヤグラは相当重く、石垣に何度もぶつかりながら、上に乗っている4人の男の子の太鼓と「アラヨイヤセー」という音頭に合わせて、「アラセーハリセー」という合唱で答えながら、15人ほどで担いで降りていくのである。浜につくと、「ネリ」をやる。ヤグラに横棒をつけ加えて、今度は2、30人ほどで狭い浜をいっぱいに担ぎまわるのである。ミコシは最後に、「クドキ」の謡に合わしてゆっくりと降りてくる。このミコシを担ぐのは、さきのヨイノモウシを構成した年寄り組で、コシツキといっている。青年たちには一指も触らせない。ここでも、青年たちはおよびでないのだ。

二、三度ネリをやると、ヤグラは夜まで地面の上に降ろして休ませる。その間、牛鬼を担いだ青年たちは、牛鬼の面をもって港の三艘のカツオ船にあばれこむのである。船頭たちは急いで酒とサカナを牛鬼に供える。

夜になると、青年たちもいっぱい飲んでいるので、馬力がかかっている。波の寄せる狭い浜いっぱいに、汗まみれになって、ネリを繰り返すのである。牛鬼とヤグラはミコシにつきかかっていく。それを見ていると、牛鬼とヤグラは島の庶民たちの姿で、ミコシは神の権威をまとった島の年寄り組の象徴に見えてくるのは不思議なことだ。

青年たちは、グロッキーになると、ヤグラを地面に降ろして休憩する。そんなとき、ヤグラにもたれて誰かが「船唄」を歌いはじめるのである。娘たちは、振り袖を着、美しく化粧して、そんな様子を楽しそうにながめているのである。しかし、彼女たちは、ものの一時間も着たら、すぐまた普段着にきかえる。まるで、誰かさんにちょっとだけ見せるための「顔見せ」のようだ。この頃が祭りのクライマックスである。頭上には、裸の色電球がぶら下がり、波打ち際の小船の上には祈りを込めた、数メートルの御幣の棒・「オハケ」が、島の夜空に向かって立っているのである。祭りがすむと、青年たちはすぐに都会に帰ったり、カツオ船に乗ったりして、海に消えていく。青年たちが消えた島は何事もなかったようにまたもとの無邪気で単調な生活を始める。

それでは、青年たちの祭りの中で見せた若いエネルギーは、いったい何だったのだろうか。じつは、青年たちは、表面はいちばんはでに活躍したのだけれど、ほんとは年寄りの指示通りに踊ったにすぎないのである。

‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐‐

### 昭和50年代の春日神社のお祭り

以下、宮本五さんのヒアリング結果より、昭和50年ごろの祭りの後の様子を記述する。

夜のお練りとお帰り、境内での最後のお練りと神事を終えて、祭りが終了したあと、春日神社の向かい側、いまの公衆トイレになっているところには青年会館があり、宿毛から芝居を呼んできて祭りの後には、みんなで青年会館で芝居を鑑賞していたという。大体、22時とか23時とかから開始して1時間以上はあった。

祭りの翌日は、ウラツケが行われる。朝6時くらいから片づけをして、9時くらいには終わる。片付け後には、集会所で祭りの神輿、ヤグラ、牛鬼の担ぎ手が集まり、祭りの終了と成功を乾杯する。その後、適当に仲の良い者同士で複数人のグループに分かれて島の各戸を訪問して回る。島の各戸では、おもてなしの食事と酒が用意されており、朝9時過ぎから日付が変わるまで全ての家を回る。各家ごとに、食事もお酒も大量に用意する。自分の家では、ビールを7ケースと清酒を1斗用意して、全てなくなっていた。自分はお酒は飲めないので、集会所で乾杯をして、三々五々各家々を訪ねていくときに、しれっと集会所に戻り、そこから外に出ず、寝て過ごしていた。腹が減ると頃合いを見計らって家に帰って食べたが、仲間に見つかると何している！と怒られ連れていかれてしまうのでハラハラしていた。

大体、ウラツケの翌日が、島の運動会だった。カツオ船に乗っている人たちはまとまった休みがとりにくかったので、みんなが帰ってきている祭りの後に運動会を実施していた。

### 鵜来島流人伝説

以下、わが母校「鵜来島」編集小委員会（1989）の記述を記載する。

#### 鵜来島流人伝説「栄玄祭」

宇摩島藩の下級武士　栄玄は、身分の高い息女　了因と恋に落ち、鵜来島に逃避する。御法度破りの二人に宇和島藩は討ってを島に差し向ける。討ってに囲まれた二人は、宮の鼻の断崖の森にて心中自刃する。島の人は悲恋に思い、盆の施餓鬼供養に先んじて「えんげん様」祭りを行っていた。

#### 鵜来島流人伝説「七人屋敷」

伊達家の流罪地であった頃のこと、春日神社の下に小屋のような屋敷あった。伊達家の流人たちが住んでいたので、流人屋敷と呼んでおった。ある年、七人の流人がこの屋敷に住んだ。みな、濡れ衣の罪だったそうな。七人は哀れにも怨念を抱きつつ、死んだそうな。七人の怨霊のたたりであろうか、この後、この流人屋敷に家を建てたものには災いが続いたという。

### 鵜来島の食

下記、鵜来島の方々へのヒアリングの結果および高知新聞アーカイブスにより、記述する。

#### 戦後の食糧確保

昭和31年当時、鵜来島には田んぼはなく、畑が4反のみであった。しかし、75戸492人が暮らしていたため、食料の中でも特に野菜が不足していた。不足する野菜は、外部から調達するほかなかった。戦時中から鵜来島にはヤミ船と呼ばれる伊予の商人が、5日に一度の割合で島を訪れていた。ヤミ船は、かまぼこ型のテントを張った5トンばかりの発動機船で、戦時中の統制時代であっても、夜間に来るということはなく、昼間であったという。船着き場に続いた石畳の斜面で市が立った。鵜来島の男たちは、当時島外の漁船に半年契約で雇われ、給料を手にするのは、正月とお盆の年二回であった。そのため、鵜来島の人たちは現金をほとんど持っておらず、取引はもっぱら物々交換であった。

#### 鵜来島の食

島の主食は、芋と麦。龍頭山の山頂付近まで段々畑を作り、芋と麦を育てていた。しかし、近年になってイノシシが数多く鵜来島まで泳いで渡ってくるようになり、芋がイノシシに食べられてしまうようになってしまった。そのため、2000年代に入ってから芋類を作らなくなった。

3月頃になると、ツワブキという山菜を山に取りに行く。夏は冷や汁。鰹節やいりこで出汁を取って、じまめ（落花生）とネギ、キュウリ、ツワブキなどを入れて、ご飯にかけて食べる。秋から冬にかけて、メアカイモを収穫する。芋の部分はもちろん、茎は皮をはいで、乾燥して保存食にして、お寿司などにして食べる。島で昔から食べている。

冬は、ほうちょううどん汁。キビナゴで出汁を取って、小麦粉をこねて包丁で切ったふとめのうどんと玉ねぎ、人参など野菜を入れる。春と秋の漁期で、キビナゴがたくさん獲れたら干したり、煮干しにしたりする。2017年現在、島で育てている野菜には、春菊、小松菜、ネギ、大根、ほうれん草、たかな、ニンニク、などがある。秋の季節に台風がくると、潮で植えたばかりの野菜が全滅してしまったりもする。種は、集落活動センターにお願いしてまとめて買ってもらっている。昔はしていたが、いまは島で種とりはしていない。

# 宿毛湾沿岸部について

## 小筑紫町栄喜地区について

### 栄喜地区の歴史・文化について

#### 栄喜地区の人口と世帯数の推移

　橋田庫欣(1996)によれば、長宗我部地検帳をはじめ江戸時代の多くの本には榊浦と書かれている。榊は神様にそなえる木である。不漁や災害が起こるのは、榊の字を使うからだと考え縁起のよい字、すなわち栄え喜ぶとして栄喜の字を使うようになったと考えられている。1743（寛保3）年には、13戸、93人、船10、1891（明治24）年には56戸、船43、1960（昭和35）年には154世帯、1985（昭和60）年には、184世帯、658人、と推移した。平成7年以降、20年間で人口は200人以上減少したが、世帯数は20戸程度の減少に留まり、世帯平均人数でみると3.0人から2.1人への減少となっている。

図 　栄喜地区の人口と世帯数

**※昭和35年、60年は橋田(1996)、平成7年以降は国勢調査より使用**

高知新聞アーカイブス（昭和57年3月23日土佐の冠婚葬祭82）によれば、「榊千軒、寺三つ」の言い伝えが残っている。「唐連（とうれん）谷」、「寺の谷」、「竜王院寺」という地名は、その寺跡といわれ、昔、三寺を擁し千軒を誇る栄えた村であったと言われている。

#### 恵比須祭り・網代祓い

高知新聞アーカイブス（昭和57年3月23日土佐の冠婚葬祭82）をもとに記述する。

網代祓い（あじろばらい）は、小筑紫町栄喜に古くから伝わる漁場清めで、春、本格的な漁期の訪れを前に、恵比須様を祀ることで行われる。網代とは、晩秋から冬の川瀬に、竹や柴などを網の代わりに編んで立て、アユの稚魚を取る仕掛けのことだが、ここでは養殖や釣り、網などの漁場のことを指す。この祭りは、集落をあげ、栄喜漁協を主体として執り行われていた。

（昭和57年の）宵宮は3月10日、漁協の屋上から岸壁にロープが張られ、大漁旗が翻る。普段、岸壁の祠に入り江に向いて鎮座の恵比須様は、この一夜、氏神である八坂神社に迎えられる。漁協、集落代表、宮総代、頭人などが、身を清めてかしずき、神事が行われ、神職、総代は夜ごもりする。

夜明けの神事の後、恵比須様は若い漁師二人に抱きかかえられて、ご座船に移り、その舳先に鎮座する。その後ろに、神職が座り、太鼓を打つ。船には、漁協組合長をはじめ各代表が乗り込んでいる。船の上から、集落の沖にある住吉神社、入り江口に突き出た「恵比須が鼻」の小さな祠らに祀られている恵比須様、神々に祈念をささげて漁場に向かう。

龍ヶ迫沖、白ハエ、七日島を臨む網代にて、神職は太鼓を打ち、長老が船歌をうたう。一升瓶のおみきを漁協の組合長が、三方台のしらげ（米）を頭人が、網代に向けて海中に捧げる。魚供養と豊漁を願い、一同手を合わせてお祈りする。

海での神事を終えると、岸壁の祠に4人の少女が「浦安の舞い」を奉納する。恵比須様に次いで未来を担う幼神、保育園児にも奉納する。

### 栄喜地区の漁業について

宿毛湾沿岸部南端の栄喜地区は、宿毛湾の最も入り込んだ漁村であり、集落や漁協において、様々な取り組みが行われてきた。戦後の栄喜地区の取り組みについて、高知新聞アーカイブスおよびヒアリングをもとにして記載する。

1956（昭和31）年、栄喜漁協組が結成される。栄喜漁協組では、新しい養殖魚種の開発といった漁業に関する取り組みだけでなく、栄喜地区の発展に向けた事業も展開していた。

1958（昭和33）年、漁船漁業（当時栄喜地区では三艘張漁法が主だった）が不振に陥っており、倒産する業者が相次ぎ、作る漁業への転換を図る必要に迫られた。そのため、様々な種類の浅海養殖事業に乗り出していくことになる。

1964（昭和39）年、小学校、保育園、婦人会、青年団。地区長会、母の会など同地区にある12の各種団体が集まって漁村振興審議会を結成、毎月1回栄喜漁協に集まって、問題点や企画を出し合って検討、実行に移してきた。「地区民は何をすべきか、どうすれば地区が繁栄するか」を真剣に検討している。漁民が企業意識を持ち、共同精神を発揮できる組織を作るべきとの想いから始まった。1967（昭和42）年には、上記取り組みの結果として、漁民の教育研究の場である、漁民センターの設立、漁民の生活を改善させるための給食センターが完成した。

#### 真珠の養殖

1958（昭和33）年、栄喜漁協青年部が中心となって、20万円を投資して、稚貝4万4000個（約300貫）の飼育を開始した。翌1959年10月には、栄喜湾周辺で稚貝約50万個を採捕して、養殖を開始した。その後、1961年には、採捕した稚貝が立派な母貝（あこや貝）に成長したため、普通真珠養殖用の母貝として15万個（約5625kg）を高島真珠の須崎市田ノ浦養殖場へ、3.75kgあたり1000円で販売された。同年11月、真珠養殖用筏を利用して試験的に青のりの養殖を開始した。11月から3月まで遊んでいる真珠養殖用筏を有効に使うことができるとし、南与の御荘漁協組から購入した青のりの種付け網を、常に網が水中にある浮き流し式という手法で、敷き込んだ。この方法は、日本海沿岸ではすでに取り入れられているが、真珠養殖用筏の活用は全国的にも珍しく、県下では初めてであった。

1966（昭和41）年には3.75kgあたり2000円にて30万個の真珠貝を出荷し、宿毛湾の真珠養殖は順調に推移しているようであったが、1967（昭和42）年には真珠母貝生産過剰で100万個を海中に投棄した。この年は全国的な真珠不況で、生産を3割減にしている事情もあって、生産過剰となり、価格も昨年の1/20となった。従来、三重県や長崎県に出荷し、玉を入れるばかりに成長した3年母貝100万個が売れ残ったため、大月町安満地沖の大型魚礁付近に投棄した。宿毛湾の母貝養殖は2000万個という生産規制を受けているが、実際には4000万個近くが生産されていると言われ、無計画な生産が招いた結果といえる。この後、真珠養殖はハマチ養殖にとってかわられ、衰退していく。

一方、1960（昭和35）年9月から宿毛市と栄喜漁協組は、クロチョウ貝の越冬養殖とそれを母貝とした黒真珠の試験養殖をはじめた。翌1961年、越冬試験については、生存率70％以上であり、増殖の可能性があるとの調査結果がまとまった。しかし、1963年、養殖試験中に異常寒波があり、黒真珠全滅の状態になった。

#### マダイ養殖

宿毛湾でハマチ養殖が始まったのは、昭和35年頃だった（詳細は別章で詳述）。真珠養殖が、密殖ー品質低下ー漁場荒廃、という流れで衰退した経験から、ハマチだけに頼っていてはいけない、という考えもあり、1969（昭和44）年頃には全国的にまだ珍しかったマダイ養殖に取り組んでいた。先進地の長崎県から3-5cmの稚魚を一尾43円で購入、餌はアジ、サバ、イカナゴ、雑魚などをミンチにかけて1日1回与えていた。マダイは水揚げが少なく需要が多いので、2年生育で1尾1kg前後で1200円から2000円の高値で売れていた。ハマチの500円前後に比べ格段に高かった。

1978（昭和53）年大月町古満目実験所でマダイの人工ふ化に成功し、量産できる見通しがついた。

#### その他の養殖

1959（昭和34）年、栄喜漁協組と大海漁協組はそれぞれ250連（1連約60個）ずつの種牡蠣をしき込み、浅海養殖の振興に本腰を入れることになった。

1961（昭和36）年3月、宿毛市と栄喜漁協組では、これまで他の小魚と同様にじゃこに加工していたアユの稚魚を海中のいけすにて試験栽培を始めた。県沿岸漁業改良普及宿毛駐在員の指導のもとで、アユ試験養殖を実施し、1ヶ月で2倍に成長した。同年 5月、試験飼育開始から50日で体長4cmから15cmへ成長し、アユの海産養殖に成功した。海のアユ漁は、川漁での解禁とは関係ないため、6月1日の解禁日に先立ち、約3000尾、120kgを氷詰めにして、土佐宿毛海産アユと銘打って東京市場向けに初出荷した。翌1962（昭和37）年にも海産アユを解禁日より40日早く4月に出荷し、味つや共に優れているとして好評であった。

また、同年5月には、ハマチ養殖用の稚魚5万5000尾（約562kg）を香川県に向けて、それぞれ出荷した。ハマチは、4月下旬に宿毛湾と沖の島周辺で採捕、栄喜湾内のいけすで飼育し、3.75kgあたり2000円で販売された。

#### きんちゃく網漁

河原海産 河原優さんへのヒアリングの結果より、下記記述する。

昭和40年代のハマチブームのあと、生産過剰で養殖がだめになった漁業者が、きんちゃく網漁に移った。マイワシの子（コベラ）が押し寄せて、網で儲かった。毎日、何船も入ってきた。

いさり火を３～４ｍにおろして、母船の網で魚を囲んで、きんちゃく（網）の下を閉じる。きんちゃく網は母船で落としていって、小さい船外機でまきとる。漁場までの距離は岸から見えるところで漁をする。日没から日の出までが漁の許可されている時間である。

主な漁は、15人くらい規模の中型まき網と夫婦二人くらいの規模の小型巻き網。小型は年金もらいながらほそぼそと続けているような漁業者がほとんどで、宿毛湾で現在20頭の船が残っている。小型のまき網でとると、いろいろな魚が混ざって水揚げされる。キビナゴ、カタクチイワシ、ウルメイワシ、コイカ、など。

きんちゃく網での稼ぎは完全配当制。乗組員3人でやっているが、燃料代と氷代を売上から経費として引いて、残りの40％を出資者である船主がとる。残りを乗組員の3人で等分する。だから、船主でかつ乗組員もすると、経費を引いた残りの60％をとれることになる。2017年現在、ここ数年は売り上げが多い時で100万円を超えることが年に2～3回で、乗組員の配当は月に10～15万円で、月20万円を超えることもある。

#### じゃこ製造業

　河原海産河原優さんのお話をもとに記述する。

じゃこ製造は、昭和50年代に、父が始めた。栄喜には2、3軒はあったし、宿毛市全体でも10件以上あったが、いまは栄喜では河原海産だけとなり、宿毛市全体でみても、浜田海産、中野海産、加賀城海産など数えるほどしかない。

煮干しを作るためには、魚を炊く必要があるが、海水でから炊く方法と水に塩を入れて炊く方法とある。河原海産では、水に真塩を加えたもので炊いている。水には特にこだわって、軟水を使っている。水の中にもミネラル分は含まれており、それが水の硬さになる。軟水を使用することで、余分なもので魚本来の味を邪魔されずに魚のうまみを最大限引き出すことができると考えている。

多くのちりめんじゃこには酸化防止剤や着色料、漂白などが一般的に使用されている。河原海産では、昔ながらの方法で塩以外の添加物を一切使用していない。漂白されているちりめんじゃこは色がきれいな白。河原海産のちりめんは、少し黄色っぽく見えるが、これは素材そのものの色がでている。自分自身がたべて納得できないものは作りたくないし、子どもさんや妊婦さん、お年よりまで安心して食べてもらえるものを作ることを一番大切にしている。

茹で上がった魚は、乾燥作業もこだわって、天日干しをしているものもある。太陽と潮風により、おいしくなる。このとき、出来上がりの食感を考えて、乾燥時間を調整する。

## 片島・大島地区について

### 片島・大島の歴史

以下、橋田(1996)、宿毛市教育委員会(2001)、橋本(2013)、宿毛市史および高知新聞アーカイブスをもとに記述する。

#### 片島・大島の概要

片島は、現在では宿毛のまちと陸続きになっているが、江戸時代には伊賀家の直轄地であり、立ち入りが制限された無人島であった。明治7年、この島に初めて入植したのは、愛媛県北宇和郡津島の庄屋であった清家忠次郎である。清家は漁業をしながら田畑を増やし、徐々に入植者も増えていった。明治20年に林有造が宿毛と片島をつなぐ道と防波堤を造り、大正9年ごろから海軍の基地として使用された(橋田,1996,p.91-92）。

　大島は、江戸時代初期に貝塚の浜田久兵衛が宿毛領主の許可を得て開発に着手し、14戸が移住、宇須々木から鷣神社（はいたかじんじゃ）を勧請し、曹洞宗のお寺もできた。江戸時代には、大島だけでなく周辺の片島・池島・一島（いちしま）・丸島もすべて大島村に属していた(橋田,1996,p.89-90）。

　大島の西端には、咸陽島がある。徳弘(1976)によれば、南路志に「咸陽島名所なり。近江国僧海量よめる『海の上に亀そ遊へるいつしかた蓮が島にそ我そきにきり』」と記述があり、落日の美しい絶景を見て中国の塩商人が陝西省中部の渭水の北岸の咸陽を思い出し命名したと言われている。

あ

#### 片島の開発史

片島の開発は、林有造の方策から始まった。

西郷隆盛による西南戦争に呼応して、明治政府の転覆を企てた土佐挙兵計画の首謀者として林有造と大江卓は、裁判の結果、岩手の監獄にて、禁獄十年を言い渡された。監獄で、林と大江は岩手県知事島惟精の厚遇を受け、ある程度自由な獄中生活を送っていた（宿毛市教育委員会,2001,p.66,p.70）。

一方、明治初期の宿毛の農民たちは、税金を払うのに困窮した者が多かった。この状況を何とかするため、宿毛発展の方策を有志で相談した結果、明治13年頃、林有造に手紙で相談することとなった。林有造は獄中にて大江卓と相談し、次のような方策を立てた。

１．鷺州（宿毛と片島の間の海だった部分のうち宿毛側、現在の高砂よりも東の地区で、字鷺洲）に新田を造成し、片島と連絡させる。

２．片島に宿毛の外港を造り、海上運輸の弁をよくする。

３．市山峠を掘り下げ、有岡駅まで馬車道を開通させ、陸上交通の便をよくする。

林有造は、上記の方策を宿毛の有志に知らせ、出獄後にこれらの方策の実現のために努めることを約束した（宿毛市教育委員会,2001,p.71）。

明治17年に仮出獄、明治18年に放免された林有造は、宿毛と片島、小深浦堤と片島間に堤防を造り、その内側を干拓させ、そこに鷺洲新田を作ることを実行した。東京で新田開発のための潮止工事を願い出て、明治19年に許可が下り、直ちに着工した。この工事の総経費1万5,000円のうち、5,000円は高知県知事田辺良顕の計らいで県が世話をして勧業金を借り、残りの1万円は東京に出ている宿毛出身者と宿毛の同志で負担した。

工事の石工は、岡山県から専門家を雇い、片島―宿毛、片島―小深浦口の2か所の堤防で海をせき、水門を設け、内面の海水は自然に外に出るようにした。堤防が完成し、潮止めが行われたのは明治20年だった。中新田の旧お台場に祝賀会場が設けられ、四斗樽を割って祝宴をし、相撲大会も催された。3か所に設けられた水門によって、引潮の時に自然に内面の海水は外に出られ、差し潮になれば自然と水門が閉じて、海水が入らないようにし、干潮の差を利用して動力なしで干拓を行った（橋田,1998,p.44-45）。

この結果、後に林新田と呼ばれる鷺洲新田40町歩が完成した（橋田,1996,p.140-141）。明治35年に堤防の北側に道路が完成し、港を中心とした発展が進んだ（橋本,2013,p.13-14）。この宿毛から片島までの道は、昭和8年には、軍用道路として整備され、昭和16年には高知県下最初のコンクリート舗装路となった（橋田,1996,p.141）。

片島港が本格的に利用されだしたのは、上記の林有造による開発がなされた頃からであった。明治32年に阪神‐高知‐片島および片島‐大分の定期航路が開設されると、片島港は幡西地区からの木材、木炭、海産物などの物資を集める産業港として、そして、日本三大漁場とも称される宿毛湾を控えた豊かな漁港として、急速に発展した。

一方で、大正3年から昭和13年までの間に、岸壁後背地約3万平方メートルが埋め立てられ、港の形を整えた。この間、昭和6年には連合艦隊の寄港地となり、海軍基地としても栄えた。片島、宿毛のまちには太平洋戦争末期まで"海軍さん"の町として賑わった。

戦後の片島港はヤミ船でにぎわった。警備の難しい県境の港という条件も手伝って、阪神方面へは木炭や海産物がどんどん積みだされ、沖縄、北九州からは砂糖、米軍物資、ガラスなどのヤミ物資が流れ込んだ。このヤミ商売で、地元はかなりにぎわったらしい。

昭和30年代までは、磯帆船や漁船、宿毛別府航路の定期船、巡視船などが並び、軍港から商業港として、県西部地域の産業文化の発展に大きな役割を果たしてきた。しかし、昭和30年代末には主な商品であった林産資源と水産資源が枯渇気味になり、港の活気は見られなくなった。

昭和38年10月26日　一年半ぶり工事再開へ片島港改修の漁業補償妥結　県が九百万円を出す

片島港の改修は、市の総合開発事業の一つとして36年度から総事業費約一億八千万円、五か年計画で着工した。改修の主な狙いは、県西部地方の木材搬出基地として十分な施設を作ると同時に、船の混雑緩和を測ろうとするものであった。初年度は1,500万円の予算で物揚げ場の基礎工事に着工したところ、37年1月に地元宿毛市漁協組がこんご十か年分の漁業補償として9,000万円を県に要求した。漁協組側はその後、5,000万円に減額、県側の補償額1,500万円と大きく食い違っており、交渉は難航し、折り合いがつかず予算の残額800万円を昭和37年度へ繰り越して、工事はストップしてしまった。37年度も交渉がまとまらず、前年からの繰り越しも併せて、2,300万円の予算のうち、約1,000万円で資材を購入しただけで工事は一切できず、さらに昭和38年度へ繰り越した。

昭和38年に、ようやく県と漁協組の間で交渉が妥結、工事が再開されることとなった。

妥結した内容によると、県は900万円を補償する、漁協組側は片島港改修・丸島地区埋め立ておよび松田川改修にかかる公共事業について一切の異議をいわない、松田川下流の導流提内の埋め立て一万九千八百平方メートルを県の指示する計画に基づいて漁協組側が行う、ということで合意、調印した。

結局補償額は、丸島地区に埋め立てる土地の売却価格の関係で900万円とする代わりに、地元漁協組は松田川下流の導流堤内を埋め立て、これを同漁協組の所有とすることで折り合いをつけた。

交渉の妥結を受けて、宿毛土木出張所は昭和38年11月に工事を再開し、昭和38年度中に片島と丸島を結ぶ長さ180メートル、幅6mの公共物揚げ場のうち、半分に当たる、約90メートルを構築した。

昭和39年度からは、新しい五か年計画に切り替わり、公共事業で約一億円を投じ、物揚げ場を完成、これから600メートル幅10メートルの臨港道路をつけたほか、物揚げ場に至る航路を水深4メートルまで掘り下げ300トン級の機帆船が接岸できるようにした。

さらに、県道事業として物揚げ場背後に約四十万円で二万二千平方メートルの埋め立て地を造成、木材工業に利用できるようにする計画であった。

昭和45年、伊藤忠商事が宿毛湾一帯の調査に乗り出し、宿毛市議会に宿毛湾臨海工業化調査特別委員会が設置されてから。その後、原油基地、大型修理ドッグ、鉄鉱石備蓄基地の進出構想が打ち出された。

こうした中で、宿毛湾を生活の場とする漁民たちは、「生活権を守る」ため、工業化反対漁民会議を結成、宿毛市での大集会、県庁への陳情など積極的な運動を展開してきた。

具体的には、昭和46年7月の宿毛湾工業化反対漁民会議（貝崎加造代表）による海上デモがある。宿毛市議会で宿毛湾臨海工業化調査特別委員会が大型ドッグと鉄鉱石備蓄基地の誘致を決議したことを明らかにし、田中市長が漁業補償など100億円を企業側に要求したと答弁したことに端を発し、工業化への流れを断ち切って、工業化反対を住民に訴え、運動を盛り上げようと、宿毛湾工業化反対漁民会議の声掛けで、海上デモが行われたのだった。宿毛湾沿岸から約250隻の漁船が集まり、片島港から大月町竜ヶ迫までで、大漁旗を翻した大船団が行進し、洋上から工業化反対へ気勢を上げた。

宿毛湾港は昭和61年に国の重要港湾に指定され、平成元年から運輸省と県が宿毛市と幡多郡大月町で工事を進めている。中でも四万トン、五千トン、二千トン、七百トンの各ふ頭が整備される宿毛市池島地区が開発の中心となる。

計画によると、後背地は工業、流通産業の新規立地と地場産業の活性化を図るため、工業用地32.8ヘクタールを確保、湾口と後背地の連携のため、臨港道路も整備される。ふ頭用地は12ヘクタールあり、総事業費は500億円にのぼると見込まれる。

当初、平成7年度の完成予定だったが、土地買収が難航し、計画は遅れてている。平成2年度に着手した買収率は対象面積の82％にとどまっていた。関係者からは「県は山を削った土で、埋め立て分を賄うつもりだっただろう。もっと海面にせり出す形で港湾開発を計画していれば、買収の手間もかからずにスムーズに事は運んだはず」と不満の声も出ている。

県は、平成8年9月の定例県議会で平成11年をめどに供用開始を目指すように方向転換を発表した。計画全体では、最大一万トン級ふ頭など三種類のふ頭を整備するが、ふ頭用地、工業用地は計画のほぼ半分の面積で供用を開始する予定だ。平成8年10月からスタートした後背地の埋め立ては、首都圏から出る良質な公共残土利用のめども立ち、コストはかなり軽減された。

#### 片島の神社史

　橋本（2013）に基づいて、以下、片島の神社について記述する。

　片島にある一宮鹽竈（いっくしおがま）神社は、林有造が宮城県から勧請した鹽竈神社に宿毛の産土神である一宮神社を合祭したものである。

鹽竈神社は明治23年、林有造によって建立鎮座された。宮城県塩竃市にある鹽竈神社本宮より、御祭神である志波彦神（しわひこかみ）、塩土老翁神（しおつちのおじのかみ）、武甕槌神（たけみかつちかみ）、経津主神（ふつぬしかみ）を勧請したものである。

これらの神々の勧請は、宿毛丸の沈没と会社の倒産後であるため、航海の安全祈願も一因と考えられるが、橋本（2013, p.17）では、武甕槌神は、イザナギが火神カグツチを切り殺したとき、剣に付いた血から生まれた神、経津主神は刀剣の神、塩土老翁神は両神を先導して奥州諸国を平定する手助けをした後、そのまま塩竈の地に残り人々に漁業や煮塩の製造方法を伝えた神と言われていることから、林有造の政治にかける不退転の決意をこの神々の勧請にかけたものであるという。

一方、一宮神社は、勧請年月縁起沿革など定かではないが、味耜高彦根命（あぢしきたかひこねのみこと）を祭神とし、応永25（1418）年には一宮大明神と呼ばれていた。和田村神内（現松田川小学校下の八坂神社のところと思われる（橋本,2013,p.22））に鎮座し、歴代の領主が祭主となって祭ってきた。明治維新の際に、土佐郡一宮村（現在の高知市一宮）の土佐神社に合祭の令があったが、古来より統治に鎮座の神を遠隔の地に合祭することに承服できず、各村人たちが協議して、この神を各村の総鎮守として、宿毛市土居下東本城山（宿毛城）に祭ることを願い出て許可され、明治4（1871）年に移転し、一宮神社と改称し、翌年新たに社格を定められ、郷社となった（橋本,2013,p.26）。その後、旧領主12代伊賀氏廣と中央政界の重鎮林有造が引退後、ともに宿毛で過ごす中、鹽竈神社への合祭を申し出て許可され、大正6（1917）年、片島の鹽竈神社に鎮座することとなった（橋本,2013,p.45）。

合祭された大正6（1917）年、社殿を新たに建立し、一宮鹽竈神社として奉記されることとなった。宗教法人法施行により、昭和28（1953）年宗教法人一宮神社と登記した。10月12日が秋大祭であるが、現在は10月の第4日曜日に執り行われている（橋本,2013,p.46）。

神社の敷地については、勧請された際に、林有造により寄進されたものであった。大正3（1914）年、第12代宿毛領主となる伊賀氏廣の手によって、神社前の林有造所有の山林に銅像建立の造成工事を行い、大正4（1915）年、宿毛出身の彫刻家本山白雲作によって銅像が設置された。しかし、昭和18（1943）年、軍に供用された。その後、昭和43（1968）年、明治百年祭記念行事として再建され、現在に至っている（橋本,2013,p.29）。

銅像は神社前の山の上にあり、この山は林公園と呼ばれ、箱庭のような美しい銅像山であった。この山を林家より片島地区へ寄付を受け、昭和51（1976）年に市の事業として塩浜（現在の片島公民館前の信号から大島橋に至る中間の周辺）の公有水面埋め立てが許可された。銅像山の掘削による土量で、昭和52（1977）年、3,818立法メートルの埋め立てが完了した。このため、大正3年に林公園として整備され62年間にわたって市民に親しまれていた通称銅像山が、無くなってしまったのであった。跡には、500坪の用地が造成され、片島公民館の建設に着手し、昭和52（1977）年に落成した。この埋め立て工事に伴い、神社の山林も掘削400坪の用地を造成した（橋本,2013,p.31）。

造成された400坪のうち、神社に向かって東側の山林部分を撤去、造成した。当初、神社の敷地の三段目に新しく神社を立てる計画であったが、不適切であるという意見が出たため、昭和59（1884）年に造成し、現況のような境内地として造成し、建て替えを行った（橋本,2013,p.56）。昭和61（1986）年、社殿の老朽化に伴い、氏子、崇敬者の寄付並びに寄進により、地区を上げて新規建立した（橋本,2013,p.46）。

#### 片島・大島の人口と世帯数

橋田(1998)によれば、片島は、明治20年に6戸、明治25年に10戸、明治30年に15戸、明治35年に70戸と増加した。

宿毛市史によれば、昭和6年には185戸あり、その職業別の内訳は、商業53、工業14、農業9、水産業11、交通業11、公務自由業5、その他有職59、無職15であった。このうち、商業53戸の内訳は、料理店6軒、海産物店5軒、木炭店4軒、売薬店・酒店・果物店・旅館・学用品店・雑貨店　各3軒、金物店・化粧品店・履物店・理髪店・米穀店・菓子店・裁縫店・珊瑚店　各2軒、呉服店・材木店・醤油店・錻力細工店　各1軒となっていた。

昭和29年に人口の増加に伴って大字大島字片島から大字片島として独立した。

片島の人口と世帯数は、昭和30年に539世帯2362人を記録して以降、ゆるやかに減少し、平成12年頃に微増したが、その後は再び減少している。世帯数は、平成元年頃までは増加傾向であったが、この頃をピークに減少に転じている。平成27年には、538世帯数、人口1151人であった。

図 片島地区の人口と戸数

**※昭和30年は宿毛市史、昭和55年は橋田(1986)、平成元年は高知新聞アーカイブス、平成7年以降は国勢調査より引用**

　一方、大島には、宝永頃に70戸を数えたが、宝永4（1707）年の大津波で、全ての家が流出した。その後、寛保3（1743）年には戸数73、人口337人であった。その後の人口の推移は不明だが、昭和29年に片島が、昭和44年には池島が、それぞれ人口の増加に伴って大字大島の字から独立した大字となっていることから、大島の人口を超えていたと考えられる。

国勢調査によれば、平成7年には819人300世帯、平成17年には679人、272世帯、平成27年には、488人、227世帯が居住していた。

### 片島・大島の文化

#### 片島の祭礼

以下、橋本邦彦さん他へのヒアリング結果および高知新聞アーカイブスに基づいて記述する。

一宮鹽竈神社では、2月3日に厄除け、輪くぐりをする。秋祭りでは獅子舞と巫女舞が披露され、牛鬼も繰り出す。大みそかの12月31日に23:30頃から獅子舞が舞われ、ちょうど日付が変わったところで巫女さんの踊りが奉納される。昔からそういう風習になっていて、片島の人たちは、日付が変わる頃に一宮鹽竈神社を参拝する。

片島区の獅子舞の由来については、昭和50年代の高知新聞アーカイブスによると、当時の古老に聞いても定かではなかったようだが、伊予から幡多郡大月町竜ケ迫に渡った獅子舞の分家ではないかといわれている。昭和40年代に一度途絶えたが、片島青年団が中心となって復活させ、一宮鹽竈神社の祭礼にて演じている。平成12年4月に片島獅子舞保存会が設立され、片島の伝統芸能である獅子舞の継承に力を注いでいる。

昭和50年代の獅子はシュロで作った古いものであったが、平成17年には大小の獅子頭を新調している。獅子舞は、鐘と太鼓がはやすリズムに合わせて、1つの獅子を前脚に1人と後ろ脚に1人の計2人で協力して舞う。かつては、片島地区内の600世帯を全て一戸一戸踊ってまわって住民の健康と繁栄を祈願していた。

#### 片島区みなと祭り

　以下、高知新聞アーカイブスをもとに記述する。

宿毛市片島では、あるときから「みなと祭り（港まつり）」を実施していた。これは、昭和30年に片島港岸壁落成記念に行われた「宿毛祭」に始まり、昭和32年8月には宿毛市商工会議所と同市片島区の主催の「みなと祭り（原文ママ）」として実施された。昭和32年には特に片島港の開設に大きな役割を果たした故林有造翁の顕彰記念を兼ねて盛大に繰りひろげられ、地区民総出で獅子舞や相撲大会、夜は経費50万円という多彩な花火大会も行われた。

昭和34年、35年には宿毛開港記念祭として実施され、昭和36年には開港記念祭に加えて、咸陽島の浜開きがあわせて実施され、2万人の人出があった。

　昭和38年、恒例の宿毛市「港まつり（原文ママ）」は、海の記念日の20日、宿毛商工会議所と片島区の主催で、片島港を中心に華やかに繰り広げられた。当日はまず、林公園で片島開港の父、故林有造翁をたたえる記念式典、続いて恵比須神社で海上安全と大漁祈願のあと、町内の踊り子による市中パレードが行われ、そろいの衣装に身ぶり手ぶりも鮮やかに宿毛音頭や鳴子踊りで練り歩いた。夜の花火大会では、岸壁だけでなく、湾内に大小の船が数十隻浮かび、約一万五千人の人出でにぎわった。

昭和38年以降にて、確認できた限り高知新聞アーカイブス上で片島みなと祭りについての記事は、昭和50年になる。昭和50年には、片島地区・宿毛商工会議所・宿毛市観光協会の主催で、3年ぶりに「みなと祭り（原文ママ）」が開催された。1500発を超える花火大会には、2万人を超える観衆が集まった。観衆は、陸上だけでなく、片島港から106隻の観覧船が出船した。

　昭和51年にも「港まつり」が実施され、復活以来、2回目、2万人ほどが集まった。会場の片島岸壁には、まだ日も暮れないうちから市民が繰り出し、花火大会の始まる頃には岸壁一帯と港内120隻の観覧船から大勢の観衆が1500発の花火を見物した。

　昭和51年以降、みなと祭りはしばらく途切れ、昭和57年7月、6年ぶりに花火大会が開催された。昭和58年、昭和59年と開催されているが、昭和59年には、宿毛市長を会長とする「宿毛市の海の記念日実行委員会」の手によって実施されていた。

#### 大島の文化

以下、山口しずかさんへのヒアリング結果をもとに記述する。

春と秋には鷣神社（はいたかじんじゃ）のお祭りがあった。もともとのお祭りは、旧暦の10月17日だったが、いまは普通の10月の第3日曜日とかにやっている。

　昭和30年代頃には、神輿を船に乗せるだけでなく、落しあいこをしていた。神輿を担ぐ人と、獅子舞の人は落とされないし、水に濡れてはいけないが、それ以外の人は落としたり落されたりするものだった。特に、落とす役割の人がいるわけではないが、神輿や獅子ではない人は落ちる覚悟で、着替えを用意していた。神輿を乗せた船には、女は乗せてもらえなかった。お祭りの時にはそこそこの大きさの船を2杯つなげて、それを引っ張る船も出ていた。

大島の神輿はこのあたりでは一番大きいと言われており、20人くらいで担いでいた。船から戻ったら大島公民館の前に、神輿を据える台座を準備してあって、そこに置いた。お神輿にお賽銭をして、お神輿の下をくぐると、健康に良いと言われていて、みんなでくぐった。

当時、大島の祭りでは巫女の役割は、衣装を着てお神輿の後をついて歩いて、お宮に上がって役者（担ぎ手のこと）さんにお酌して回ることだった。巫女になれるのは、生理が来る前の女の子だけだった。

　獅子舞は、大島の各戸を1件1件まわっていた。神輿の担ぎ手は、若手というわけではなく、40代から60代くらいで、担ぐことを希望した人が担いでいた。家柄とか、担ぐための条件が決まっていたわけではなかったと思う。「親も担いだけん、おらもやろうかにゃ」というような人が担いでいた。もちろん、男しか担げなかった。

### 片島・大島の産業について

#### 真珠養殖について

　中央政界をやめ、宿毛に帰ってきていた林有造は、大正3（1914）年、伊賀氏廣男爵の紹介で、藤田昌世に会った。藤田は、真珠養殖研究家であった西川藤吉の弟子であり、西川の死後、伊予岩松の平城湾で半円真珠を成功させていた小西左金吾を頼って、真円真珠の研究を進めていた。しかし、資金面で困ったため、伊賀男爵に相談したところ、林有造を紹介された(橋本,1998,p.49)。

　こうして、林有造が社長、藤田昌世が技師長となり、予土水産株式会社が資本金12万円にて設立された。宿毛湾の池島と片島の間にある、丸島を拠点として、その周辺の海域で真円真珠養殖を企業化した。藤田の指導を伊賀氏廣、大井田正経ら宿毛の人物も受け、養殖の実際に当たり、技術を習得した。この方法は、人工の核を真珠層を分泌する外套膜の上皮組織の一部とともに貝体内に挿入し、真珠を形成させるもので、当時は厳重な秘密事項であった。

　大正5（1916）年、204個の真円真珠が生産され、171個の良質真珠が大阪の真珠商である式田吟次郎によって1匁あたり216円にて引き取られた。大正6年には1,403個、大正7年には1万166個が生産され、大正8年には1万6,100個から496匁の真円真珠を大阪の入札会で1万2,500円にて公売された(橋本,1998,p.51)。

　真珠といえば、三重県の御木本幸吉が知られているが、宿毛の丸島では御木本が真円真珠を成功させるより3年早く成功させており、世界で一番最初に成功したのであった。

　宿毛での真珠養殖は、その後が期待されており、大正9（1920）年には、予土真珠株式会社と改め、銀行から多額の借金をして事業の拡張を行った。この年の8月大洪水に見舞われ、松田川の堤防を越えて宿毛のまちは濁流が渦巻き、宿毛より上流で民家46軒が流出、それらが真珠養殖場に流れ込み、筏は全て流出してしまった。淡水に流されてしまった結果、拾い上げた貝はほとんど死んでいた。生きている貝も真珠をまく力はすでになく、養殖場には土砂が流れ込み、海底は泥海となって養殖不能の状態となってしまった。そのため、宿毛の技術員たちは、各地に分散していった(橋本,1998,p.55)。

#### 製塩業

宿毛市史の記載では、天正検地帳によると、宿毛の塩浜は、藻津　九浜半、宇須々木　三十六浜、田ノ浦三浜、伊与野　九浜と記されている。

潮止め工事が完了した明治20（1887）年当時、片島では3戸が粗末なムシロ掛けの小屋で製塩を行っていた。この塩浜は、現在の片島公民館前の信号から大島橋に至る中間の周辺であった。林有造は、徳島の秋本常太郎と組合企業を設立し、従業員30名ほどを雇い、従業員の住居も立てていたといわれており、相当に規模が大きかったものと思われる。しかし、明治40（1907）年頃閉鎖された。片島の塩浜は河口に近く、塩分濃度が低く、効率が悪かったためであると考えられる。その後、昭和25（1950）年頃、当時から近くに住んでいた木下正男親子が釜炊で製塩をしていた。そのため、いまでも現在の片島公民館前の信号から大島橋に至る中間の周辺を塩浜と呼ぶことがある（橋本,2013,p.14-15）。

#### 片島港航路

以下、宿毛市史【近代、現代編-交通土木-海上交通】をもとに編集するとともに、橋本（2013）や高知新聞アーカイブスに基づいて記述する。

宿毛は片島港、小筑紫港の良港を控え、宿毛の物資の交流はほとんどが船によって行われていた。特に愛媛県との交流は、陸上交通が不便であったので、それにかわるものとして利用された。

片島は林有造が明治20年堤防をつくり、片島、宿毛間を連絡したことから本格的な開発が始まった。大正3年桟僑付近の埋立が行われ、港の形が整ってくると急激に船の出入が多くなった。大正から昭和にかけて大いににぎわったが、日中戦争、太平洋戦争と戦争が激しくなるにつれて、聯合艦隊の出入が多くなり、海上輸送が圧迫された。

終戦後は又海上交通が盛になってきたが、道路改良がなされ、自動車が普及してくるとだんだん陸上交通が盛となり、それと反比例して海上交通は衰えていった。

しかし、昭和55年ごろには観光でもカーフェリーの利用が多くなり、宿毛観光汽船が宿毛、佐伯間にフェリーを就航させたことによって活況をとりもどしている。

宿毛市史では大内町史や橋田庫欣資料を引用元として、明治24年林有造は大阪商船株式会社に依頼して国千代丸(250トン)を買い入れ、宿毛汽船株式会社を設立、片島高知間に就航させたが、幡多郡佐賀港で暴風雨のため破損沈没し、そのため宿毛汽船株式会社は解散となったという。一方、橋本（2013）によると、明治20年に、大阪商船株式会社から50トンの機先を購入し、宿毛丸と名付け、宿毛汽船株式会社を設立し、宿毛―高知間を運航するも、まもなく沈没し、会社は倒産したとあり、記載内容が異なっている。

その後、明治25年頃東宇和郡宇野廉太郎と沖の島の神山亀太郎が合資により南洋丸(50トン)を宇和島宿毛柏島間に就航させたが1年位で廃止した（宿毛市史では大内町史より）とあり、また明治32年幡多郡西部有志により幡多汽船会社を設立し日高川丸を高知‐宿毛間に就航させ、同年土佐商船株式会社も従来運航していた高知‐下田間を延長して宿毛迄就航することとなり、第2浦戸丸、土佐丸が交代で寄航した。明治39年8月、高津丸が一時就航したがすぐ中止となった。

幡多汽船株式会社はやがて廃止となり、土佐商船株式会社も明治40年に大阪商船株式会社に合併されたので、大阪商船株式会社の船がくるようになった。

宇和島方面は明治29年南予運輸株式会社が設立され、第1御荘丸が南予の航路を開き、やがて第2御荘丸が建造され、片島へも航路を延長したと、『城辺町誌』にあるから、明治30年代には来ていたものと思われる。また『城辺町誌』によれば明治39年深浦に大阪商船株式会社の義州丸、明治40年3月宇和島運輸株式会社の宇和島丸が入港したとあるので、片島へもその頃から寄港していたものと思われる。

土佐沿岸航路はその後大正9年4月に野村茂久馬が大阪商船株式会社からこの航路を譲り受け、土佐沿岸汽船株式会社を設立し、これと対抗して大正10年12月に伊野の中内久太郎が土佐同盟汽船株式会社を設立し、高知、片島間の航路を開いた。しかしこの会社は経営難に陥り、大正12年には大阪商船株式会社の管理下におかれ、昭和4年8月土佐沿岸汽船と合併し、土佐同盟汽船となって加茂川丸、湊川丸などを、高知、片島、宮崎県の細島間に就航させた。当時早くも九州との航路が開かれていたのであり、昭和6年の運賃は片島、細島間1円80銭、片島高知間は2円80銭であった。

宇和島方面は、福山磯太郎経営の大和丸が大正3年頃より就航したので、御荘丸、宇和島丸、義州丸と多くの船が運航していたが、間口七太郎、間口藤七などが大正の半ばころ、大和丸と対抗して大栄丸を就航させたので激烈な競争となったが、大栄丸は2年半程で経営不振のため取やめとなり、御荘丸も大正13年頃廃業し、大阪商船も大正13年にこの航路を打ち切った。

そこでしばらく大和丸、宇和島丸の時代が続いたが、やがて、昭和に入ると青木運輸株式会杜の繁久丸が寄港を初め、山口直行も大正15年片島小筑紫間に寿久茂丸を運航し、深浦まで延長していき大和丸と競合するようになり、そのうえ一時的ではあるが久良の三浦杉松の三浦丸も加わったので、海運史上まれに見る盛況となった。しかし第3大和丸は昭和8年に由良半島で遭難したので、福山は精神的にも経済的にも大打撃をうけ、昭和9年に亡くなってから経営が思わしくなく昭和12年に平田徳太郎他2名の手にわたり、その後又持主がかわるようなことがあって、第二次大戦中に関西汽船に併合された。

昭和15年には、宇和島盛運社の天長丸、天光丸も姿を見せた。

宇和島汽船の宇和島丸は第二次大戦中徴用されて姿を見せなくなり、盛況を見せた旅客輸送も第二次大戦中は衰退した。

一方高知行及び沖の島航路は、土佐同盟汽船の加茂川丸、湊川丸などを高知片島細島間に運航させたが、その後土佐商船株式会社となり、昭和16年まで続き、同年関西汽船株式会社に統合され、新高知丸、第2新高知丸などが就航した。

山口廻漕店は別府まで昭和14年頃より運航し終戦後も継続しており、沖の島や小筑紫に土予汽船会社、柏島片島間に岡崎商会の郵便託送船などが運航し、又宇和島、片島、小筑紫間を宇和島盛運汽船会社が運航していたが宇和島盛運汽船会社は昭和33年に廃止となった。

高知、片島間も戦後関西汽船より土佐商船がまた分離して高知片島間の航路を開いていたが、バスに客を奪われ昭和26年には完全に廃止となった。

昭和30年4月、高知県と宮崎県を結ぶ宿毛汽船の定期航路は再開、すくも丸を3日ごとに就航する。片島港から大分県蒲江、宮崎県上土呂、細島の順で寄稿する。片島ー細島間が等級無しの650円であったが、利用客が少なく、就航１便ごとに1万円の赤字を出していた。宮崎県から補助金の交付を得たが、高知県からは得られず、1月に航路を放棄した。天候の関係もあり、就航から十数回航海したのみであった（高知新聞アーカイブス　昭和29年9月25日、昭和30年4月10日18日、昭和30年11月6日）。

昭和39年7月、あしずり汽船の株主総会にて、宿毛汽船との合併を承認した。あしずり汽船は、310万円で宿毛汽船の宿毛丸、航路権などを買収、宿毛汽船から役員を迎え入れた。（高知新聞アーカイブス　昭和39年7月13日）

山口廻漕店は片島、別府間を運航していたのを、41年頃足摺汽船株式会社と合併して宿毛汽船株式会社となり、足摺丸を借上げ足摺丸と第3足摺丸で宿毛別府間を運航していたが、宿毛汽船株式会社より昭和43年分離して宿毛観光汽船会社を創立し、航路変更をし、今まで片島、深浦、船越、佐賀の関、大分、別府と寄港していたのを(途中大分、佐賀の関は除く)片島別府の直通便とした。

昭和46年9月、宿毛観光汽船会社は航路を変更して、宿毛、佐伯間にフェリーを就航させることとなり、九四高速フェリー「あしずり」(1,000トン)が、就航した。あしずりは、宿毛観光汽船と船舶警備公団が半額ずつ出資した共有船で、約４億円で建造した。九州航路コバルトラインと称し、上下各６便を就航させ、宿毛ー佐伯間をわずか３時間で結んだ（高知新聞アーカイブス　昭和46年9月5日）。

47年国道９４フェリーより、第２豊予丸(1,000トン)をチャーターし１日３便の運航をはじめた。４９年４月より宿毛観光汽船と船舶整備公団が半額ずつ出資し、6億円で建造した、さいき(1,500トン)を就航させた。さいきは、片島ー佐伯間を2時間50分で航行した。これに伴った、第2豊予丸を解約した。（高知新聞アーカイブス　昭和49年4月2日）

昭和６０年、あしずりが老朽化したため、宿毛観光汽船では、新船ニューあしずり（９９９トン）を建造、６月より宿毛ー佐伯間を就航した。（高知新聞アーカイブス　昭和60年6月15日）

平成3年には、しまんと（1500トン）を就航、平成7年には、片島―佐伯間を1日7便運航し、年間20万人、車両4～5万台を運んでいた。

平成14年1月、長引く不況による利用者減少や高知県須崎市から愛媛県八幡浜を結ぶ国道の整備等から利便性の優れた八幡浜起点の航路への利用者移転が止まらず、宿毛観光汽船が破産、片島―佐伯間航路が休止した。北九州市の海運会社「洞海マリンシステムズ」が再開に名乗りを上げたが、資金繰りがつかず断念した。運送会社「ケイシーライナー東京」（東京都港区、安福隆社長）など4企業の役員5人が1000万円を共同出資し、9月中に宿毛市で運航会社「宿毛フェリー」を設立し、12月から運航を再開する。県と市などは4億円を限度に財政支援する（2004年9月21日四国新聞http://www.shikoku-np.co.jp/national/economy/20040921000363）。

休止前、フェリーは2隻で運航していたが、再開後は1隻1日3往復にて平成29年まで運航を続けている。

佐伯市政発表資料（http://www.city.saiki.oita.jp/03shisei/03\_12kisha-happyou/05.7.12/05.7.12ferii-siryou1.pdf）によれば、平成13年度実績で旅客数153,003人、トラック18,264台、バス1,109台、乗用車34,145台、平成14年度実績で、旅客数144,921人トラック16,095台、バス1,040台、乗用車33,716台と年々減少傾向にあった。また、平 成 1９ 年 第 １ 回宿毛市議会定例会会議録によれば、1隻に減るも、旧フェリー２隻運航時の６割程度の実績を上げていたという。

#### 養殖について

高知新聞アーカイブスより、特に昭和58年11月8日連載開始の「幡多あすの設計一次産業カルテ　宿毛のハマチ養殖１〜１０」に基づいてハマチ養殖について記述する。

宿毛湾でハマチ養殖が始まったのは、昭和３５年頃だった。香川県からハマチの稚魚であるモジャコを取りにきていた人に教えてもらったのが最初であると言われている。当時は、真珠の母貝養殖全盛期であり、真珠いかだの片隅で始まった。しかし、昭和42年頃、真珠輸出業界の不況、供給過剰、病気の発生、価格の暴落など、負の要因が重なり、真珠養殖は壊滅、真珠養殖に取って代わる形でハマチ養殖が一気に宿毛湾全体へ広がった。

昭和46年、台風の影響で4万匹、湾内の酸素不足のため20万匹以上のハマチが、宿毛湾奥の栄喜を中心に大量死した。昭和49年には、赤潮の発生により、ハマチのえらにプランクトンが詰まり20万匹以上に影響が出た。

そのような環境悪化の中、昭和49年には出荷量が1万トンを超え、過去最高となった。40年代後半から50年頃にかけて、ハマチ養殖は最盛期を迎えた。

その後、52,3年頃にはかげりが出始めた。病気などのため死魚が増え、歩留まりが業者によっては5割まで悪化した。成長の早さが落ち、餌代、油代は値上がりした。

　昭和56年、宿毛湾のハマチは、県全体のハマチ養殖の6割を占め、年間12，800トン、約130億円の出荷であった。この金額は、宿毛湾の全漁獲高の8割にもなる。

　昭和50年代、宿毛湾の沿岸部では泳ぐことができないほど、汚れていた。海の色はは、茶色で夏には異臭も湧いてくる状況であった。昭和56年8月に実施された高知県水産試験場による海底質のCOD（化学的酸素要求量）調査によると、宿毛湾内4カ所で30mg／gを超え、大島南漁場の３９．７mg／gが最高値となった。水産生物にとって20mg／g以下が望ましいと言われており、汚染が進んでいた。海面はハマチの生餌で油膜に覆われ、海底はヘドロが堆積していた。ヘドロは、リンや窒素などの栄養塩を海中に溶かし出し、プランクトンの異常発生が起こり、赤潮の原因にもなる。これは、ハマチの過剰養殖が原因となっていた。魚類養殖計画では漁場ごと一小割あたり3,000匹となっているが、一小割あたり5,000匹、実態は死魚が出ることを見越して1万匹を入れているような漁場もあった。各漁協ごとに、一年魚、二年魚の匹数が定められているが、二年魚は体が大きいため、一小割あたりの適正魚数が一年魚に比べて少なく、多くの小割を使用する。さらに、二年魚になると病気などで死んでしまうリスクも高くなるため、実態は二年魚を飼うふりをして全ての小割で一年魚を飼っていた。このような過剰養殖の結果、環境が汚染され、類結節病や連鎖球菌病が蔓延した。そのため、きれいな海であれば生存率9割以上で育つと言われているハマチが、宿毛湾では仕入れてから出荷までの一年間で5割、よくても6〜7割しか生き残らない。経営の安定化を図るため、出荷時に5,000匹を確保したい漁民は、約半分が死んでしまうことを計算して、一小割に1万匹を飼うようになっていた。こうして、ますます海の汚染が進み、昭和58年には夏から秋にかけて連日数十トンの死魚が発生し、焼却処分も間に合わず、野積みされている状況であった。

昭和58年4月頃からハマチの値崩れが起こり、それまで1,100円／kg前後であった価格が、900円、800円と毎月値下がりし、9月には500円台にまで下がったが、昭和59年5月には800円台まで回復した。

悪化したハマチの養殖を改善しようと、昭和58年藻津漁協が500m沖合に養殖施設を設置し、沖出しした。海のきれいな沖の区域に養殖小割を移動させることで、成長をよくし、病気などを減らす狙いであったが、この取り組みは、成功し、魚の成長率が良くなり、収益も改善した。昭和61年には、宿毛湾奥の５漁協でも共同で沖出しを実施、宿毛市大島の沖1.5km、水深40m前後の海上に、長さ約1.4km、幅300mほどの長方形の漁場を2カ所に作り、宿毛市漁協分の小割約400と小筑紫4漁協分の約300を組み込んだ。

昭和62年には、沖出しの成果を確かめようと、宿毛市漁協荷捌き所で初めてのハマチ品評会が実施された。沖出しハマチ12匹、沿岸ハマチ10匹、昨年夏頃より沖出ししている藻津漁協より2匹が出品された。その結果、上位得点した14匹のうち、10匹が沖出しハマチだった。高得点の沿岸ハマチのうち3匹は新しく導入した配合飼料が与えられていた。

昭和62年、ハマチ養殖は年間水揚げ8,000トンに減少したが、宿毛湾の漁獲量の9割り近くを占めていた。

平成４年の宿毛湾の養殖業の年間生産額は130億円。マダイ、アジ、カンパチなどの生産額が増えたが、ハマチは69億円を占めていた。平成5年頃は、1,000円／kg前後であったが、平成6年秋頃から急落し、平成7年には500円／kgを割り込んだ。天然魚の豊漁、不況による景気低迷などが原因であった。さらに、稚魚の値段も例年の倍ほどの1匹200円と高騰し、イワシの不漁でえさ代も70円／kgと高騰したため、生産費が増加、経営は逼迫した。

このため、平成5年には139軒だった養殖事業者は、平成8年には78軒に減少した。平成9年に入って、品薄のため値が戻り、9月には1,200〜1,300円の高値で推移した。

平成13年、宿毛湾のブリ養殖でが、全体の1割から2割が連鎖球菌症で死んでいた。宿毛湾全体でブリの稚魚は220万匹から230万匹が仕入れられ、経口ワクチンの使用が80万匹で、注射でのワクチン投与は0だった。しかし、ワクチンを注射したブリは全く連鎖球菌症にならなかったという大分など先進県の実績が伝わり、平成14年には72万匹にワクチン注射が行われた。1匹ずつ注射するため、コストも手間もかかるが、個体数を正確に把握できるようになり、病気で死ぬ数が減ったことで、計画的な養殖ができるようになった。

#### 大島漁港について

大島漁港は、昭和27年4月7日に高知県管理の第2種漁港になった。昭和51年には、陸揚げ量が6,126トン、金額で16億4,800万円あった。漁業別でみるとあぐり網が2450トン（40%）、はえなわが1,224トン（20%）、その他が2,452トン（40%）であり、魚種別でみるといわしが1,969トン（32%）、たいが1,224トン（20%）、その他が2,933トン（48%）であった。利用漁船は、合計2,925隻あり、3トン未満が1,571隻、3トン以上5トン未満が549隻、5トン以上20トン未満が710隻、20トン以上50トン未満が55隻、50トン以上100トン未満が14隻、無動力船が26隻あった。他の漁港は全て市町村管理であり、藻津漁港だけが、第2種であった。

#### すくも湾漁協について

高知新聞アーカイブスにもとづいて、記述する。

平成7年2月、県と宿毛市、大月町、地元漁業関係者は宿毛湾水産業振興計画を取りまとめた。本計画は、「宿毛湾はひとつ、250億円産業への挑戦」という基本方針のもと、宿毛湾の小規模漁協を合併し、市場を統合することを目指していた。当時、宿毛、大月には6カ所の水産物市場があり、6市場合計の取扱高は、昭和63年の37億円から平成4年には21億円まで減少した。市場を統合し、大規模化することで、魚の量を増やし、魚価水準の向上と安定化を図る計画だった。県は、平成9年3月までの合併を求めていたが、足並みが揃わず難航し、11年3月まで期限が延長された。

平成9年、宿毛湾の漁協合併推進協議会が発足、宿毛湾内の、宿毛市と大月町の２０漁協で進められて宿毛市漁協と藻津漁協が不参加の意思表示をした後は、18漁協で合併する方針を固め、進めてきた。平成12年8月に、18漁協にて仮調印を行ったが、その後の各漁協の総会では、沖の島漁協と橘浦漁協が合併を否決したため、平成13年1月には上記2漁協を除く16漁協が合併したすくも湾漁協となった。6月に、沖の島漁協が合併を可決してすくも湾漁協に加わったが、橘浦漁協は否決した。

宿毛湾の市場は、すくも湾漁協所属では古満目、小才角など大月町南部の4漁協にあったが、宿毛市側にはなく、すくも湾漁協に合併していない片島の宿毛市漁協の市場か愛媛県の深浦漁協の市場などに水揚げをしていた。平成14年、すくも湾漁協が運営する栄喜市場が、栄喜漁港にオープンした。この市場は、漁港の一部を埋め立てた約350平方メートル、荷揚げ場や市場棟のほか海水を零度近くまで冷やす装置や製氷施設などを備えていた。いりこなどに加工する小魚を主に取り扱っていた。

平成15年、宿毛市小筑紫町田ノ浦の田ノ浦漁港で宿毛湾漁協の拠点釣るための大規模改修工事の起工式がおこなわれた。12月、すくも湾漁協と宿毛市漁協は合併仮契約書に調印し、平成16年1月にそれぞれ臨時総会を開き可決した。これにより、4月に年間取扱額が約14億円の県内最大規模の宿毛湾漁協が発足した。片島の宿毛市漁協では、「借金を抱えたすくも湾漁協とどうして合併するのか」「借入金の返済の見通しは立っているのか」など質問が出たが、賛成率75％にて合併が可決された。合併当初、すくも湾漁協の事務所は片島の宿毛市漁協の事務所を使っていた。

宿毛湾の沿岸では、1970年代から漁礁が沈められてきた。しかし、稚魚や小型魚の成長の場となる湾周辺の藻場が減少し、漁獲量は頭打ちとなっていた。沿岸の魚を増やし、遠くまで漁に行けない高齢の漁民の収入アップを目指すため、片島市場の水揚げ額がキビナゴに次いで多いく、値崩れがしにくいイサギの新型漁礁実験を、平成16年に実施することになった。漁礁はナイロン繊維を植毛した網目の鉄製フレームがついている餌料培養型漁礁で、プランクトンを毛に付着させて小魚や魚食性魚類を集める仕組みになっている。福井県や島根県などで実績があるものを導入し、鵜来島漁港前に沈めた。

## 宇須々木地区について

橋田(1994,1996)、宿毛の歴史を探る会編（2001）、宿毛市史などをもとに記述する。

### 宇須々木の概要

宇須々木は宿毛で最も早く人の住み着いたところの1つと考えられており、旧石器時代と思われるナイフ形石器が出土している。中世には宿毛西の村とも鴨ヶ浦とも呼ばれたが、九州臼杵から来た者が支配するようになってから、「ウスキ」が「ウススキ」になったという。宇須々木地区は、上谷、蔵ノ谷、はなまえの3組に分かれており、それぞれに産土神がある（竹村,1985, p.3）。宿毛市史によれば、15世紀初頭の戦国時代には、宇須々木城、西城、立城と山城があったことがわかっている。古くから港として利用されており、文明年間（1469年から1486年まで）には土佐一条氏が貿易港、昭和時代の戦時中には海軍基地であった。

　宇須々木の氏神である鷣神社（はいたかじんじゃ）には、後醍醐天皇の十六皇子を祀るとか、後醍醐天皇の文使の鷹が海に落ちて礁に上がったのを祀ったとか、楠正行が一族143人とここで連判状を作ったとか、南朝にまつわる多くの伝承が残されている（橋田, 1996, p.97）。

### 海軍基地としての宇須々木

宇須々木公民館前に設置されている「宇須々木の旧海軍基地」という案内板によると、大正10（1922）年に戦艦長門を旗艦とする艦隊が寄港して以降、昭和17（1942）年まで、次々と艦隊が姿を見せており、宇須々木が訓練、休養を支える基地として活用された。また、大正11年にはワシントン軍縮会議により廃艦となった戦艦土佐を、宿毛湾にて沈下させたことでも知られている。

宿毛歴史館矢木館長によると、呉海軍工廠で作った軍艦は、ほぼ全て宇須々木で検査し、宿毛湾・沖の島・鵜来島界隈で試験航海をしている。そのため、歴代の大将はほぼ宿毛湾を訪れており、戦艦大和も沖の島ー鵜来島鵜来島間において公式航行試験も行ったという。

宿毛湾はたびたび連合艦隊の寄港地となっていたが、昭和8年頃から、艦載機の訓練や補給、搭乗員の休養のために頻繁に利用されるようになった。初期の頃は、宇須々木尋常小学校や民家を間借りしていた(十菱・菊池, 2002, p.240)。昭和11年には小学校を含む周囲一帯を海軍用地として買収し、兵舎2棟やなど桟橋など本格的な基地整備が行われ、200名の軍人が常駐した。

水上偵察機の搭乗員練成のために、昭和18年4月に宿毛航空隊が開設された。しかし、宇須々木港の波の状態が悪かったので、同年8月には大分県の佐伯に移った。この頃に、兵舎群を中心にして駐機場や水上飛行艇揚陸の滑走台（地元ではスベリ）、射撃場などが東側に、弾薬庫とガソリン庫が西側に設置された (十菱・菊池, 2002, p.240)。

空き家になった宇須々木兵舎には、昭和19年に第一特別基地隊宿毛派遣隊（一特基）が入った。一特基は、瀬戸内海の倉橋島大橋にあって、真珠湾攻撃で活躍した特殊潜航艇甲標的（二人乗り）に改良を加えた甲標的丙型や自家充電装備を供えて充電し、航続距離を長くした甲標的T型（後に蛟竜と改称）の訓練が行われた（橋田, 1994, p.270）。

　昭和20年になって、一特基は、第二特攻戦隊の所属となり、宿毛派遣隊は第二十一突撃隊（二一突）と改められた（橋田, 1994, p.271）。二一突には、水上特攻兵器の震洋艇、水中特攻兵器の回天、海竜も配備され、宿毛湾並びに豊後水道防衛の第一線部隊として、整えられた（橋田, 1994, p.272）。二一突には、宿毛（宇須々木）以外にも、土佐清水市越、大月町古満目、泊浦、柏島、宇和島市日振島まで含み、編成されていた（橋田, 1994, p.279）。その後、昭和20年7月には第八特攻戦隊に改組され、二一突のほか、須崎の二三突、佐伯の二四突を含み、その司令部が宿毛に置かれた。この部隊は、土佐湾と豊後水道を守るのが任務であった（橋田, 1994, p.277）。

宇須々木の二一突の本部には、旧宿毛航空隊時代からの一般兵舎五棟、士官兵舎一棟、病院、弾薬庫、燃料庫のほかに、二一突時代からの魚雷調整壕、魚雷庫、無線壕、退避壕など多くの施設があった（橋田, 1994, p.290）。

現在は、弾薬庫、貯油庫、蛟竜引上場の滑走台、飛行艇の駐機場、誘導灯、防空壕などの遺構が残っており、現在の宇須々木公民館は兵舎跡に位置している。

特に、滑走台の残存状況は良好で、幅40.4m、長さ70mを測り、岸壁から5.5度で傾斜して、海面下に伸びている。駐機場には、水上機を固縛するための円孔を穿った花崗岩製のアンカーがあり、中には鉄製のリングがそのままついているものもある(十菱・菊池, 2002, p.241)。



図 太平洋戦争中の宇須々木（宇須々木公民館前に設置されている案内板を撮影）



図 現在の水上飛行艇揚陸滑走台（スベリ）の跡



図 現在の魚雷艇整備壕跡

## 池島地区について

橋田(1996)やヒアリングの結果より、記述する。

### 池島の歴史

　「土佐州郡志」によると、「池の浦島―島の南に池水有」と記されており、島の中に池があったので、池島と呼ばれるようになった。昭和43年までは完全な島であったが、その後、北側と西側は宅地造成や港湾開発に伴って埋め立てが進んだ（橋田,1996,p.93）。池島の北側は、埋め立てられて現在の西町2丁目、3丁目となっている。

　長宗我部検地帳には、池ノ浦と記され、水田が9反ほどあるが、家は一軒もなく、近隣の人が耕していた（橋田,1996,p.93）。

　江戸時代には、池島は宿毛領主伊賀家が管理しており、無人島であった。明治7年になって愛媛県大浜、北灘、下灘、下波などの農家の次男三男など29戸が入植した。土地代金は、入札の結果360円となり、支払い方法は6か年の割払いとなった。その時の約束で360円を30で割り1人前12円とするが１人でも不払いがあった場合は管理者であった広瀬氏の小作とする。払い済みの時その権利を渡すということで約定書を交わした。6年後、土地代を皆済したが、広瀬氏から加治子（小作米）を要求され、約束が違うので、支払わずにいたら裁判にまで発展した。当初、約定書が見つからず、裁判に負けて、加治子（小作米）の支払いを余儀なくされたが、明治13年に約定書が見つかり、裁判に勝つことができた（宿毛市史）。

入植初期は、半農半漁の島であったが、昭和60年代には農業よりも漁業の方が主で、打瀬漁やハマチ養殖が盛んになっていた。

　明治7年の29戸から、昭和6年には61戸、昭和35年には66戸、昭和60年には93世帯、343人と増加した。そのため、昭和44年に大字大島字池島から大字池島として独立した地区となった（橋田,1996,p.94）。昭和49年頃より池島の北部が西町団地として開発された。池島全体が、宿毛湾港予定地となっており、池島の西部には池島新港、宿毛湾港振興が開発されることになる。

### 宿毛湾港（池島）について

宿毛市ホームページや高知県港湾振興部ホームページに基づき、下記を記述する。

昭和61年6月宿毛湾港が重要港湾に指定され、同 10 月には地域産業開発港湾として、外内貿易埠頭の整備、新規産業立地のための工業用地の造成を基本とする新規の港湾計画が策定された。高知県港湾・海岸課ホームページ「宿毛湾港港湾計画の概要」（<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/175001/f-0.html>）によると、高知県宿毛港湾の主要計画は、以下の通りである。

(1) 四国と九州を結ぶ産業の支援港の形成

・池島地区：フェリー中継基地の形成、佐伯～宿毛間既存フェリーと宿毛～高知・大阪間

新規フェリーとの連携

・池島地区：生産流通拠点の形成、工業団地への養殖飼料や資源循環型産業の立地と物流

拠点の形成

(2) 観光レクリエーション・防災拠点の形成

・片島地区：再開発による交流拠点形成、観光や海洋レジャー基地機能の強化と防災拠点

の形成

・池島地区：大型旅客船寄港への対応

平成２年1月には 重要港湾宿毛湾港建設事業起工式が行われ、池島地区を中心に整備が進んだ。これは、水深13m・4万トン級バースをはじめとする岸壁及び工業用地も含む埋め立て事業であり、平成12年12月には重要港湾「宿毛湾港」の一部供用開始がなされた。平成 13 年度からは背後の工業用地の分譲を開始した。平成19 年 12 月には、造船会社 2 社（1 グループ）が進出し、両社で 12ha の用地を取得した。

平成21年には、池島地区第一防波堤が完成し、同年、池島地区第二防波堤の整備が開始された。さらに、同年10月には貨物や旅客を受け入れる多目的交流施設として「すくも８４マリンターミナル」が建設された。平成23年には国土交通省四国地方整備局により、宿毛湾港池島地区防波堤整備事業における起工式が実施された。

平成27年12月には、宿毛湾港池島地区第二防波堤築造工事に伴って、大型起重機船によるケーソン運搬・据え付け作業が実施された（宿毛市ホームページ「池島新港岸壁における立ち入り禁止のお知らせ」<http://www.city.sukumo.kochi.jp/info.php?eid=00287>より）。

### 豪華客船の来航について

宿毛市や各クルーズ運航会社のホームページ、個人のブログ、高知新聞アーカイブス、ヒアリングの結果などをもとに記述する。

宿毛湾港新港には、平成11（1999）年以降数多くの豪華客船が入港している。平成11年4月には、整備中の新港岸壁へ「ぱしふぃっくびぃなす」そして「ふじ丸」が初寄港した。翌平成12年3月には「飛鳥」、8月には「おりえんとびいなす」が初寄港した。12月には、正式に一部供用を開始し、平成13年3月には「SUPERSTAR　TAURUS」が初寄港し、寄港に合わせて宿毛湾港供用開始イベント「わくわくポートフェスタinすくも」が開催された。平成16年4月には「にっぽん丸」が初寄港した。平成18年3月のにっぽん丸の来航で、宿毛湾港新港岸壁供用開始後21回目の豪華客船の寄港となった（平成18年度宿毛市議会第1回定例会議事録より）。

　平成19年10月には「飛鳥Ⅱ」、12月には「いしかり」が初寄港した。平成23年3月には、「ぱしふぃっくびいなす」の寄港にあわせて、宿毛湾港新港開港10周年記念イベントを船内外で実施した。

　そして、来年平成30年10月には、「ぱしふぃっくびいなす」の寄港に合わせて、「ぱしふぃっくびいなす」宿毛寄港20回目、宿毛湾港新港への就航20周年記念イベントが実施される予定となっている。

　豪華客船の来航時には、港湾担当の宿毛市役所企画課や一般社団法人宿毛市観光協会が中心となって、宿毛市全体で歓迎ムードを演出している。宿毛湾港新港の８４マリンターミナルには、カツオのたたきのふるまいや地元の特産品を販売するブースが数多く出店するほか、歓迎や出航のセレモニーでは、地元片島中学校の吹奏楽部の演奏や宿毛幼稚園や沿岸域の保育園・小学校の幼児・児童などによるお遊戯など、心温まるおもてなしを準備している。

このような取り組みの結果、平成21年、一般社団法人日本外航客船協会主催による「クルーズ・オブ・ザ・イヤー2009」にて、高知県が特別賞を受賞した。「クルーズ・オブ・ザ・イヤー」は、旅行業界の健全な発展に寄与したクルーズ旅行商品を対象とし、特にオリジナリティーに溢れ、かつ、わが国のクルーズ・マーケット拡大に貢献した商品を企画造成、実施した旅行会社等を顕彰することによりモチベーションの向上を期するとともに、一般消費者に対し良質のクルーズ旅行商品・サービスの提供を図ることを目的としているものである（一般社団法人日本旅行業協会ホームページより）。この受賞には、防波堤がないなど設備面での不利がありながら、市民総出での工夫を凝らした歓迎・送迎が高く評価されたと考えられる。

　ただし、供用開始から10年間、宿毛湾港新港には防波堤がなく、海運関係者からは「岸壁をつくって防波堤がないのは『屋根がない家』」などと厳しい指摘を受けていた。

実際、平成16年と19年には下記のような影響があった。

平成16年5月に寄港した「にっぽん丸」は、台風２号の影響によるうねりで着岸が難航した。そのため、乗客約三百六十人が船上で約一時間待機することとなり、着岸後の観光スケジュールなどが変更となった（高知新聞　平成16年5月23日）。

また、平成19年１０月７日の「飛鳥Ⅱ」の初寄港に際して、台風９号のうねりの影響で、係留綱が切れ、着岸して１時間そこそこで船は離岸を余儀なくされ、沖合いに出ての停泊となった。宿毛市民向けの船内見学が予定されていたが、見学できなくなり、幡多観光に出ていたクルーズ客は、小船で「飛鳥Ⅱ」までピストン輸送にて船に戻ることになった（平成19年度宿毛市議会第4回定例会）。

　その後、平成21年には第一防波堤300メートル、平成27年には第二防波堤380メートルが設置された。



図 宿毛湾港新港への豪華客船の来航

　宿毛市振興計画基本計画によれば、宿毛湾港新港への寄港は、平成11年から平成20年までの10年間で33回、平成21年から平成30年までの10年間では14回（予定を含む）が来航している。



図 客船寄港数の推移

**※1 宿毛市(2016, p.89)の図に平成28年度以降を加筆**

**※2 平成21年度　台風によるクルーズのコース変更１件、悪天候による抜港１件、平成22年度　東日本大震災によるクルーズ中止１件を含む**

# 付録appendix(1) 宿毛の偉人について

高知県宿毛市は、幕末から明治・大正にかけて、国全体の社会・経済を動かした「偉人」と呼ばれる人物を多数輩出したことで知られている。宿毛市史や宿毛の歴史を探る会編（2001）、宿毛人物史、宿毛歴史館・宿毛人物略伝ホームページなどに基づいて、下記を記述する。

## 酒井南嶺（さかいなんれい）

　文政11（1828）年、宿毛生まれ。南嶺は号であり、名を三治といった。幼少期より学問に通じ、京都へ出て巌垣月州の遵古堂塾にて学んだ。宿毛に帰ってから第11代領主氏理の推薦で、文久3（1863）年から当時の藩校であった文館の助教役を命じられ、宿毛の子弟の教育にあたった。さらに、私塾である望美楼（ぼうびろう）を開塾して、塾生に対して一対一の教育により、学問を指導した。南嶺が残した書の軸には、全て「日本人　酒井三治」と署名されている(宿毛の歴史を探る会編, 2001,p.172-174）。

幕藩体制下の時代にありながら、土佐人や宿毛人という狭い単位ではなく、日本人というアイデンティティをもった人物であったことがうかがえる。この信念が、子弟の教育に反映されたことで、政治家・実業家・学者・教育者など多岐にわたる分野で日本の国全体の社会・経済を動かした偉人を輩出することにつながったと考えられる。

## 小野義真（おのぎしん）

天保10（1839）年、宿毛生まれ。緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、宿毛に帰ってきてから文館の教師となった。維新後は、新政府に出仕し、大阪築港などを手掛けたが、官職を辞して、実業界に転身した。明治10（1877）年、西郷隆盛による西南の役が起こると、義真は岩崎弥太郎を説いて、汽船を購入させ、軍用物資の輸送を一手に引き受けさせて、のちの三菱の基礎を築いた。明治14（1881）年、東京―青森間の鉄道建設を目的に日本鉄道株式会社が設立された。義真は、岩倉具視の依頼で設立当初から中心となって資金集め、東北本線の計画から開通まで尽力、明治24（1891）年には東北本線全線が開通し、同社の社長に就任した。東北本線の開通記念に大農場の創立を計画し、小岩井農場がつくられた。「小岩井」は東北本線開通に功績のあった小野義真、岩崎弥之助、井上勝の頭文字をとって名付けられた。宿毛の子弟が活躍するための必要な資金面での支援などを、惜しまなかった。明治38（1905）年没(宿毛の歴史を探る会編, 2001,p.178-179）。

## 竹内綱（たけうちつな）

天保10(1839)年、宿毛生まれ。慶応4(1869)年に伊賀陽太郎が京都に遊学する事になるとその補導役として、同伴した。その内、陽太郎はにわかに奥羽征討軍に加わることになり、綱はよくこれを輔佐して二個小隊を率いて越後から出羽、庄内に入って奮戦した。

明治2(1870)年には大阪府典事となり、ついで参事となった。明治8年に辞職して官界を去って後藤象二郎の経営する蓬萊社に入り、社長となって高島炭坑の経営に従事した。その後、明治14年(1881年) 自由党創立に参画し、明治23年(1890年) 第一回衆議院議員選挙当選、明治33年(1900年) 朝鮮京釜鉄道会社設立、常務理事となり、明治45年(1912年) 高知工業学校を設立した（宿毛人物略伝ホームページより）。

## 岩村通俊（いわむらみちとし）

天保11(1840)年、宿毛生まれ。慶応3(1867)年に倒幕運動に参加して、戊辰戦争には官軍の軍監として従軍し、明治2(1869)年には函館開拓判官、明治10(1877)年の西南の役の際には鹿児島県令を務めた。西南の役を鎮圧した際、反逆者の代表である西郷隆盛の亡骸をさらし者にすることなく、彼は官軍に請うてその屍を受け取り、これを懇ろに浄明寺の境内に葬った。丁重に葬ったため、鹿児島ではこれを徳として通俊を尊敬し、記念碑を建立している。明治19(1886)年には初代北海道庁長官となり、北海道開拓の父と言われるほど北海道全体の開発の基礎を築いた。とりわけ、札幌と旭川の開発に尽力したため、岩村通俊の北海道開発の偉業を称えて銅像が建てられている（宿毛人物略伝ホームページより）。

## 大江卓（おおえたく）

弘化4(1847)年、宿毛の在番役人の大江弘の子として柏島生まれ。維新の志士として活躍し、維新以後、明治4(1871)年、部落解放令を制定させて、被差別民の人権のために努力した。特に、神奈川権令のときに起きたマリア・ルーズ号事件では自ら裁判長となって不法に奴隷として扱われていた清国人を国際法にのっとって解放した。その後、明治10(1877)年、土佐出兵計画の首謀者の一人として岩手県にて林有造とともに獄中生活を送った。出獄後、明治23(1890)年、第一回衆議院議員選挙当選、予算委員長を務めた。その後、大正3年(1914)年、被差別民の救済を目指して帝国公道会を設立する一方、自らは出家して全国を行脚した（宿毛人物略伝ホームページより）。

## 林有造（はやしゆうぞう）

天保13(1842)年宿毛生まれ。林家の養子となった林有造は、明治元(1868)年戊辰の役にて北越にて戦い、維新後には板垣退助と密接に交流し、明治4(1871)年には初代高知県長官を務めた。明治7(1874)年には、西郷隆盛の西南の役に呼応して出兵を企てた土佐挙兵計画の首謀者として逮捕・岩手県にて入獄した。出獄後は、一時宿毛に帰り、片島港の開発に着手した。明治23(1890)年第一回衆議院議員当選、明治33(1900)年には伊藤内閣にて農商務大臣を務め、明治41(1908)年には政界を引退し帰郷した。大正3(1914)年に予土水産株式会社を設立、真円真珠の養殖を成功させ、宿毛の発展のために尽くした（宿毛人物略伝ホームページより）。

## 小野梓（おのあずさ）

嘉永5 (1852)年宿毛生まれ。維新後、明治元(1868)年、17才のとき宿毛機勢隊に加わり北越に転戦、明治2(1869)年には上京し昌平校に入学、明治4(1871)年には米国・英国へ留学して、経済、法律を学んだ。帰国後は大隈重信とともに明治15(1882)年に立憲改進党結成、あわせて東京専門学校（現在の早稲田大学）の創立に中心的な役割を果たした。明治16(1883)年)、東洋館書店（現在の冨山房インターナショナル）を開業し、良書の普及のために自らも執筆にもあたった。早稲田大学では、大隈重信を建学の父、小野梓を建学の母としていまでも尊敬されている（宿毛人物略伝ホームページより）。

## 竹内明太郎（たけうちめいたろう）

万延元(1860)年、竹内綱の長男として生まれる。

工業化こそが近代日本の発展に必要と考え、明治19(1886)年には佐賀県芳谷炭坑を経営、明治27(1894)年には銅山を経営をする竹内鉱業株式会社を設立した。

世界的な建機メーカーであるコマツは、大正10(1921)年、竹内鉱業が自家用機械生産のため、石川県小松町に設立した小松鉄工所を、竹内工業から分離、独立したことに創業の端を発している。さらに、明治41(1908)年の早稲田大学理工学部設立の時には多額の寄付をし、私費で育成した研究者すべてを教授として送りこむことで、支援した。大正4(1915)年には、衆議院議員当選(その後大正6年、9年と当選)し、政治家としても活躍した（宿毛人物略伝ホームページより）。

# 【参考文献】

伊藤桂一(1967): 「沖の島」よ　私の愛と献身を, 講談社, p.223

宇治拾遺物語　http://www.koten.net/uji/

小川光一(1998): 妹兄島, 飛鳥出版室, p.165

高知県・高知県漁港協会（1978）: 高知の漁港, 高知県・高知県漁港協会

高知県・高知県漁港協会（1996）: 黒潮との出会い　高知の漁港・漁村, 高知県・高知県漁港協会

郷土誌編集委員会(1982): わが故郷「土佐・沖の島」, 弘瀬小学校

今昔物語集　http://yatanavi.org/text/k\_konjaku/k\_konjaku26-10

十菱 駿武, 菊池 実(2002): しらべる戦争遺跡の事典, 柏書房,pp.421

杉本公男(1987): 宿毛市沖ノ島町母島の民俗, 土佐民俗48号, p.29-32

宿毛市（年代不詳）: 自然と伝説と歴史の島　沖の島めぐり, 不明, pp.12

宿毛市(2016): 宿毛市振興計画- 基本計画 –人が輝き、自然がほほえむ元気都市“すくも”, 宿毛市

宿毛の歴史を探る会編（2001）: とき連綿と～宿毛小史・宿毛の人々～, 宿毛市教育委員会, pp.228

宿毛市史編纂委員会編(1977): 宿毛市史, 宿毛市教育委員会, pp.1370

宿毛明治１００年史（人物篇）編集部(2004): 宿毛人物史,宿毛市

竹村照馬(1985): 宿毛市宇須々木の民俗, 土佐民俗45号, p.2-7

徳弘勝(1976): 土佐の地名, 土佐史談会, pp.299

橋田庫欣(1994): 宿毛市風雲録, 宿毛ロータリークラブ, pp.315

橋田庫欣(1996): 宿毛市集落の歴史と文化財, 宿毛市文化財愛護会, pp.276

橋田庫欣(1998):「郷土のために尽くした人びと」, 東京宿毛会事務局編, 土佐すくも人 第14号, 東京宿毛会事務局-

橋本邦彦(2013): 一宮　鹽竈　恵比須　神社史,一宮鹽竈神社 , pp.167

山下徳数, わが故郷「土佐・沖の島」郷土誌編集委員会(1982): わが故郷「土佐・沖の島」, 弘瀬小学校, pp.284

わが母校「鵜来島」編集小委員会（1989）: わが母校「鵜来島」, 宿毛市立鵜来島小学校創立百周年・中学校創立四十周年記念事業実行委員会, pp.223

# 【高知新聞アーカイブス】

## 沖の島・鵜来島定期船について

昭和25年5月26日　渡船縣丸　近く就航

昭和25年10月2日　縣丸に身売り話　航路権取れず3ヶ月も立ち往生

昭和25年10月7日　土予汽船に賃貸　沖の島渡船問題ケリ

昭和26年6月27日　赤字で動かせぬ　沖の島が補助金を陳情　海の県道"縣丸"

昭和30年4月24日　市役所へ四日かかる　宿毛市鵜来島定期航路開設を要望

昭和30年6月10日　鵜来島への市営渡船寄港はダメ　宿毛市議会総務委員会

昭和31年7月6日 　市役所へ三泊四日も　柏島ー鵜来島　航路の延長を申請

昭和31年7月21日　宿毛ー沖の島　市営渡船建造へ　頼田市長が帰庁報告

昭和31年11月20日 鵜来島（宿毛市）へ定期船　来月1日から待望の就航

昭和31年12月29日 鵜来島に渡船就航

昭和32年1月30日　建造は待った！四国海運局が横ヤリ　宿毛市営渡船"県丸"の代船

昭和32年11月16日 二航路の統合を研究　宿毛ー沖の島間巡航船　乗客減り赤字続き

昭和33年2月28日　夏までに統合実現か　片島ー沖の島市営と民間の渡船

昭和33年3月24日　片島ー鵜来島に定期便（記事内容は小筑紫を起点として新航路の紹介で見出しと異なる）

昭和33年6月16日　定期航路の続航を　鵜来島民市当局へ痛烈な訴え

昭和33年6月20日　合併には反対　鵜来島定期航路問題暗礁へ

昭和33年7月8日　鵜来島に待望の定期船　宿毛市　航路権の認可申請を出す

昭和33年7月29日 鵜来島航路一時中断か　岡崎商会赤字を理由に中止申し出る

昭和33年8月19日 県丸運行を開始　胸なでる鵜来島島民

昭和35年6月29日 航路の統合再燃　宿毛市片島ー沖の島　市当局、年内実現の意向

昭和36年4月28日 沖の島航路６月に新発足　市・民営を統合　３年ぶり話し合いつく

昭和38年4月10日 "すくも"就航へ　片島ー沖の島間に新船

昭和38年5月7日 海上交通に大きな役割　新造船と浮き桟橋完成

昭和41年7月28日 沖の島航路３０％値上げの答申　宿毛市県道編入を請願へ

昭和41年8月22日 "海上県道"強く運動　宿毛市片島ー沖の島間

昭和43年1月28日 新しい顔　渡船「おきのしま」 風で欠航は大幅解消（年間利用者数５万人）

昭和48年4月1日　沿岸航路は廃止　宿毛市営渡船きのう名残の航海

昭和48年4月9日　浅く狭い弘瀬港　風の日は小型の代船　接岸出来ぬ大型新船

昭和50年10月27日 アップアップの市営定期船　このままでは赤字沈没

昭和51年5月19日　４１％の値上げ申請　宿毛市の定期船料金

昭和55年1月29日　宿毛市営離島航路ピンチ　燃料高騰、利用客減で累積赤字2000万円

昭和58年4月10日　４８％値上げを認可　沖の島ー片島間離島航路

昭和59年2月10日　「おきのしま」引退　離島航路で１６年

昭和60年3月21日　宿毛市の離島航路新船「おきのしま」到着　起重機など新装備

昭和60年11月14日 起重機設置が大成功　定期船「おきのしま」予想外の増収に

平成14年2月26日　沖の島航路に新定期船　３０−４０分短縮も

平成15年4月17日　新船「すくも」就航　宿毛市の沖の島航路

## 沖の島・鵜来島の渡船業者について

昭和45年12月1日　いそ渡し船対策

昭和47年2月28日　高知新聞　撒き餌禁止　沖の島周辺も　三漁協が打ち出す　渡船組合は緩和を要望

昭和49年3月21日　島に生きる　続・自然ばんざい⑨　渡礁船　冬も絶えぬ釣りファン　船長は旅館の主人

昭和50年4月7日　いそ釣りメッカに赤信号　協約更新が難航

昭和51年1月16日　無許可撒き餌を排除へ

昭和56年10月14日　磯とり競争を自粛　月末に組合を結成　出航時刻場所割り厳守

昭和61年12月3日　渡船料金を値下げ

昭和62年7月15日　渡船組合が再出発　来月から新ルールで

昭和62年9月18日　安全確保へ最大努力

昭和63年8月7日　生オキアミ全面禁止　渡船組合資源保護で

昭和63年10月4日　沖の島に磯釣り用支柱

平成元年12月29日　渡礁時間の徹底など決議

平成2年9月15日　昼釣りの渡礁時間を30分繰り下げ

平成7年5月24日　渡船組合を一本化　沖の島と鵜来島「集魚剤」は禁止

## 沖の島の漁協

平成5年10月5日　沖の島３港昇格へ　漁港審が答申、避難港　レク機能整備（沖の島漁港は母島、弘瀬、鵜来島の3漁港を統合、整備するもので来年3月、本県で初めて第4種漁港へ指定される）

平成6年2月23日　沖の島３漁協合併へ　28日に仮契約書調印

平成6年3月1日　新たに「沖の島漁協」　３組合長が合併調印

平成6年8月2日　沖の島漁協が発足　３組合合併　県内２１年ぶり

## 沖の島の漁業・その他の産業

昭和34年4月13日　三漁協組が申請　母島、弘瀬、鵜来島　県下初の寄せ網漁

昭和34年6月18日　寄せ網で立上がる漁民　沖の島鵜来島　漁獲も予想以上

昭和34年8月17日　寄せ網漁に失敗　指導船引き上げ　不漁打開策むなし

昭和49年3月14日　島に生きる　続・自然ばんざい③　非売品　突然に来る解禁日　浜辺で老女メノリ刈り

昭和49年3月18日　島に生きる　続・自然ばんざい⑥　半減期　10年ごとに…人口　田植え姿消え　米・肉、本土から突然に来る解禁日　浜辺で老

昭和60年6月13日　キビナゴ刺し網漁　ただいまシーズン

平成3年6月12日　キビナゴで島の復興を　宿毛市沖の島弘瀬地区

## 沖の島の味

昭和61年7月10日　離島の夏　キラリ沖の島＜１＞エメラルドの海

昭和61年7月11日　離島の夏　キラリ沖の島＜２＞鴨姫神社

昭和61年7月12日　離島の夏　キラリ沖の島＜３＞干棚

昭和61年7月13日　離島の夏　キラリ沖の島＜４＞七ツ洞

昭和61年7月14日　離島の夏　キラリ沖の島＜５＞貝細工

昭和61年7月15日　離島の夏　キラリ沖の島＜６＞定置網

昭和61年7月16日　離島の夏　キラリ沖の島＜７＞沖の島灯台

## 沖の島の祭り・習俗

昭和47年11月6日　ふるさとの民俗（２１）　母島の秋祭り

昭和57年1月5日　土佐の冠婚葬祭　門明け　70

昭和57年2月2日　土佐の冠婚葬祭　掛けの魚　75

昭和60年8月18日　夜空に光り舞う「傘鉾」豪華で幻想的ムード

昭和61年10月17日　伊予の名残を今に　沖の島の秋祭りにぎわう

昭和62年10月13日　豪快に恒例の秋祭り　大漁と海の安全祈る

平成13年10月8日　「エイヤー」とお練り　宿毛市母島秋祭り

平成21年8月24日　土佐・民の営み　傘鉾（宿毛市沖の島）

平成22年1月11日　土佐・民の営み　掛けの魚（宿毛市沖の島）

平成22年10月25日　土佐・民の営み　沖の島母島（宿毛市）

## 鵜来島の産業

昭和21年10月25日　打瀬船で賑わう　エソの本場鵜来島

昭和31年8月10日　土佐のさいはて②　孤島のヤミ船

昭和33年5月30日　イワシ不漁の原因か　鵜来島沖　火薬廃物の捨て場に

平成元年4月18日　ふるさとの先人　鵜来島の三役　田中増之助　生活基盤整備に尽力

## 鵜来島の文化

昭和32年12月2日　鵜来島現地ルポ　衛生的になった生活

昭和42年10月20日　鵜来島の祭式　帰ってくる青年たち　ミコシとヤグラと牛鬼

## 宿毛湾の漁協

平成7年7月19日　挑戦２５０億円水産業　宿毛湾の課題５　10年後のための再編へ

平成9年9月29日　飛躍への挑戦　宿毛市あすへの課題４　２０漁協の合併目指す

平成12年10月7日　宿毛・大月の漁協合併　設立委員会立ち上げ

平成14年9月11日　栄喜市場オープン　すくも湾漁協　合併後初の新設

平成15年2月20日　田ノ浦漁港（宿毛市）改修工事が起工　市場に鮮度保持施設

平成15年12月11日　来年４月合併へ仮契約　すくも湾漁協　宿毛市漁協　県内最大組合員２３００人

平成16年1月28日　宿毛湾２漁協　４月合併　宿毛湾、市漁協が可決

平成16年5月28日　イサギの新型魚礁実験　プランクトン付着させ誘う

## 栄喜地区について

昭和33年8月26日　宿毛で真珠養殖　不漁対策　3年後に年間収入300万円へ

昭和34年2月1日　カキ養殖の本場めざし　「種」の敷き込みが終わる　小筑紫の漁協組

昭和36年3月9日　宿毛湾のクロチョウ貝　試験養殖結果まとまる　まず上々の条件　新円真珠の期待も

昭和36年3月19日　好調のアユ試験養殖　宿毛市栄喜漁協組　1ヶ月で2倍の成長　解禁前の出荷もできそう

昭和36年5月9日夕刊　アユの海産養殖に成功　宿毛市栄喜漁協組　3000匹を東京へ出荷　50日で体長50㎝へ

昭和36年5月26日 ハマチの稚魚出荷　宿毛市栄喜漁協組　５万余匹香川県へ

昭和36年11月10日 真珠用イカダを利用　宿毛栄喜漁協組が画期的試み　試験的に青のりを養殖　築磯利用で伊勢エビ養殖

昭和37年4月22日　宿毛市栄喜漁協組　好評受ける"海産アユ"　味つや共に優れる　解禁日より40日早く出荷

昭和38年2月12日　黒真珠全滅の恐れ　養殖試験中に異常寒波　宿毛市栄喜漁協

昭和38年4月9日　"海産アユ"出荷　宿毛市栄喜漁協組　まず別府へ2000尾

昭和41年12月31日　年30万個の真珠出荷　成長する栄喜漁民会社

昭和42年5月29日　■月曜経済　「地場産業の旗手」＜１６＞　高木重幸さん（３９）　宿毛市栄喜漁協組合長　地区ぐるみの発展を　漁民教育こそ必要

昭和42年8月5日　真珠母貝、生産過剰に　宿毛湾で100万個を海中に投棄　今後は計画生産の必要

昭和42年9月5日　漁村振興へ各種団体がスクラム　審議会で検討し実行　何をすべきかみんな真剣　宿毛市栄喜

昭和42年9月10日　漁民・給食センターが完成　漁業振興の原動力に　生活の指導や健康守る　宿毛市栄喜

昭和44年　■ローカル特集　マダイ養殖に取り組む宿毛市栄喜漁協組の高木さん　ハマチから脱皮へ

昭和46年11月26日　ハマチが大量死　十万匹越しそう　養殖場の酸素不足

昭和47年6月28日　ハマチ４漁協共同で　沖合い養殖　宿毛市　不振打開、品質向上へ

昭和49年4月14日　宿毛湾　べったり赤潮　養殖ハマチ大打撃　ひと晩で10万匹以上死ぬ　栄喜など不休で出荷　市況回復の矢先に　プランクトンで窒息死

昭和50年5月10日　お手上げハマチ養殖漁民　宿毛市栄喜　アベック襲撃　ササゴイ→モジャコ　カラス→解凍エサ

昭和53年1月1日　消費賄う生産へ再出発　漁業　古満目実験所で人工ふ化（宿毛市栄喜）

昭和55年3月7日　小野田セメント　進出やっと軌道に

昭和55年5月31日　赤潮予防へ県水試　ハマチ関係漁協に指導文書

昭和57年3月23日　土佐の冠婚葬祭82　あじろ祓い　集落あげて漁場を清める

昭和58年11月8日　幡多あすの設計一次産業カルテ　宿毛のハマチ養殖１〜１０

昭和60年12月11日　重要港湾指定　「宿毛湾」条件整う　地元１９漁協　県に同意書

昭和61年3月21日　「視点」　宿毛湾のハマチ養殖沖出しにかける　湾奥5漁協が決断　投資4億円

昭和61年10月1日　ハマチの沖出しへ　宿毛市　アンカー工事始まる

昭和62年4月9日　沖出しハマチ好評宿毛湾内5漁協　初の品評会で高得点

平成元年7月14日　3漁協も漁場減OK　宿毛湾港　漁業補償　17日に正式調印

平成2年3月26日　宿毛市　初の合同観光開き　「さんご娘」4人も紹介

平成7年7月18日　挑戦250億円水産業　宿毛湾の課題４

## 豪華客船関係

平成13年3月21日　宿毛湾港一部開港記念　２４日に多彩なイベント　　大型豪華客船　特別寄港も

平成14年3月24日　宿毛湾港に大型客船「ぱしふぃっくびいなす」　幡多路観光楽しむ

平成14年5月18日　大型豪華客船が再び宿毛湾港へ　２６０人がキビナゴ堪能

平成16年4月4日　宿毛湾港へ「にっぽん丸」　３００人が幡多観光満喫　　郷土芸能やキビナゴ料理　四国西南の玄関ＰＲ

平成16年5月23日　防波堤なく着岸難航　宿毛湾港の“弱点”露呈　　豪華客船　うねりで１時間待機

平成16年11月19日　花火で出港見送り　豪華客船「ぱしふぃっくびいなす」　　ブラスバンド演奏も　　宿毛湾港

平成17年5月31日　にっぽん丸　あす宿毛へ　　３５年ぶり闘牛も

平成17年8月27日　豪華客船　宿毛に寄港　　「ぱしふぃっくびぃなす」　市民ら地元の味で歓待

平成17年12月29日　■西南特集　　豪華客船ふじ丸　元日宿毛湾港へ　　岸壁で歓迎行事

平成18年3月31日　宿毛へ客船寄港定着　きょうは「にっぽん丸」　　地元の歓迎　好印象

平成18年8月23日　宿毛に豪華客船寄港　「ぱしふぃっくびいなす」　４６０人が幡多満喫

## 片島の歴史

平成元年11月21日　ふるさとの先人73　片島の開拓者　清家忠次郎

## 片島港航路

昭和29年9月25日　 日向宿毛定期航路実現へ　日向市長らが来宿して熱望

昭和30年4月10日 　18日に第一船　宿毛ー細島航路

昭和30年11月6日 　宿毛，細島航路を放棄　宿毛汽船　県の補助決まらず悲鳴

昭和39年7月13日　秋までに就航　あしずり汽船　まず合併を決定

昭和46年9月5日 　片島港に白い船体、市民ら豪華な船内に感嘆

昭和49年4月2日 　新船「さいき」就航　片島港岸壁、市民千人が祝う

昭和52年12月31日 歳末は上下便とも満席　活気づく深夜の片島港

昭和60年6月15日　「ニューあしずり」顔見せ　片島港17日から就航

平成9年6月22日　四国みなと紀行　片島港宿毛市　活況呼ぶフェリー

## 片島港開発

昭和28年1月29日　宿毛市片島港復興基礎工事完了

昭和30年2月1日　片島の大産業港化へ　宿毛市、重要幹線道路の整備急ぐ

昭和37年12月23日　三百トン級も横付け　片島港の浮桟橋　来年三月末には完成

昭和37年12月30日　宿毛市の自衛隊誘致運動　片島港に連絡所設置

昭和38年6月6日　中断した片島港改修　県営埋め立て地売却停滞

昭和38年10月26日　一年半ぶり工事再開へ片島港改修の漁業補償妥結　県が九百万円を出す

昭和39年8月25日　片島港　九州と結ぶ観光拠点　かつては”海軍さん”の町

昭和41年6月29日　片島港を観光港に　南九州含む観光圏　宿毛市が計画

昭和41年8月11日　片島に観光センター　観光圏完成へ足がかり

昭和46年7月21日　宿毛湾工業化反対漁民会議大海上デモ　整然と漁船二百五十隻　片島港から竜ヶ迫へ

昭和47年12月11日　粉じんが心配　片島港大方セメント貯蔵庫完成　付近に小魚化工場

昭和52年2月15日　土佐路へようこそ　片島港へ観光第一陣　九州経由で予定も続々

昭和59年3月16日　新浮桟橋が進水　7月には片島港に登場

平成9年9月30日　ふれあい高新　飛躍への挑戦５　宿毛湾港開発

## 片島の祭り

昭和30年4月30日　片島港岸壁落成記念に”宿毛祭”

昭和32年8月8日　花火や相撲大会　宿毛市十日にみなと祭り

昭和34年8月6日　夜は花火大会も　10日に宿毛開港記念祭

昭和34年8月13日　花火大会や踊りに　宿毛開港記念祭にぎわう

昭和35年6月30日　9日に宿毛開港記念祭り　片島港を中心に

昭和35年7月9日　宿毛開港記念祭り　きょうから　舞踊、花火など催しも

昭和36年7月27日　あす宿毛開港記念祭　舞踏パレードや花火大会　咸陽島の浜開きも

昭和36年7月30日　宿毛市の開港記念祭と咸陽島浜開き　踊りや花火など　2万人の人出でにぎわう

昭和38年7月16日　「海の記念日」行事　自衛艦公開や花火大会　須崎・中村・宿毛各市で趣向こらす

昭和38年7月22日　人出は一万五千人

昭和50年7月24日　3年ぶりに「みなと祭り」　二万人が繰り出す　豪華花火に観覧船も

昭和51年8月9日　夏祭りたけなわ　海陸から花火見物　片島「港まつり」に2万人

昭和51年10月19日　健康と繁栄を祈願　宿毛市片島　各戸へシシ舞

昭和57年7月29日　6年ぶり花火大会に1万人　800発の光の花　宿毛市片島港

昭和58年8月12日　あすも各地で夏祭り　片島港では820発の打ち上げ花火（宿毛市・海の記念日行事の花火大会。片島地区では午後7時から全面的に交通規制）

昭和58年8月14日　宿毛市・片島港の花火大会　20日に延期（13日に予定されていたが、悪天候のため1週間延期）

昭和58年8月22日　海と湖に光のショー　1000発の大輪に歓声上がる　片島港花火大会　宿毛市（海の記念日行事）

昭和59年7月27日　あす片島で花火大会　午後7時から交通規制（宿毛市の海の記念日実行委員会＝会長・林市長＝の主催）

昭和59年7月30日　夏祭り　宿毛市　夜空に大輪　片島港　沸く（海の記念日行事の花火大会。1万2000人が歓声を上げる）

# 【ヒアリングの記録】

## （鵜来島）20171001\_谷本徳光さんと佐々木保さんの話

1992年頃、谷本徳光さんが新しいやり方でやった。3年続いた。そのとき、徳光さんの兄が区長で、相談され、頼まれた。4年目には、岡山に転勤となっていたが、通ってやった。7年ほど休んで、達男さんがやって、これも手伝った。

鵜来島には、多くの神様が祭られている。昭和中期頃までは、各家ごとに1つの神様をお守りしていたという。

神輿は牛鬼が3周してから出る。神輿は牛鬼を追いかける。牛鬼が神輿に追いつかれてしまうと、盛り上がらない。牛鬼とヤグラが手を組んで、ヤグラが牛鬼を回す。すると、牛鬼が神輿に追いつくことができる。そうすると、今度はヤグラが神輿と手を組んで、牛鬼から逃げ、牛鬼を追いかけさせる。

この繰り返しをすることで、祭りのお練りが盛り上がって行く。ヤグラの舵取りが最も重要になる。それぞれと手を組んで、祭りを面白くする。

3日目はうらつけ。青年団が取り仕切り。21時で終わったら青年会館で芝居。お下がり済んで、神輿を据えて、もちまきしてから牛鬼のカツラをはがし、首をもって各家をまわる。神輿は鰹船に載せて、1隻ずつ神事をする。40年前には、達男さんのカツオ船のみになっていた。いまでも、柏島と大島の春日神社の秋のお祭りでは、お神輿を船に乗せて、鵜来島の春日神社が見える位置まで行って、鵜来島の方を拝む。鵜来島の春日神社が格式が高いため。

かつて、（たもつさんが小学5、6年の頃）田中商店というお店が鵜来島にあって、そこの息子が大阪から島に帰ってきて、渡船屋をはじめた。水島に渡船して、しけで田中商店の息子含め、7人がなくなって、船も沈んだ。そのため、一時、渡船屋はなくなった。カツオ船は3隻あった。（たもつさんが高校に行ったとき）カツオ船は1隻なくなって2隻になった、なくなった船に乗っていた人たちが独立した。ハマチ釣りが流行っていた。その頃に渡船業が再開した。漁をするにしても、氷も燃料も島では手に入らないので仕事にならなかった。

鵜来島の漁業権は、島周辺、水島、姫島の一部に設定されている。鵜来島と母島、弘瀬はそれぞれの別々の漁協があった。弘瀬には港がなくて、作りたくて強力な働きかけをして、2~30年前に沖の島漁協に合併した。鵜来島漁協に入っていた漁業権収入が入らなくなってしまった。

## （鵜来島）20171030\_田渕満博さんの話

鵜来島出身、宿毛ハイヤー代表の田渕さん。

お盆については、盆踊りをしたり、カラオケ大会をしたり、にぎわうように続けてきた。秋祭りについては、お神輿と神事は続けていたが、ヤグラと牛鬼を出して実施するのは、担ぎ手と資金が必要になる。

1980年代、田渕さんが高校生の頃、青年団は一応あって、10人程度いた。お祭りのイベント関係は青年団、お宮の神事は氏子という役割分担だった。そのあとの時代みたいに、島の外に声をかけて人手を集めてやるという発想はなく、限界になった。「祭りをやろう！」「誰が？」となり、中心になれる人がいなかった。祭りには、前日、当日、翌日と3日間は最低でもかかりきりになる。子あらい（子育て）が終わらないと、9月、10月はイベントも多く中心的な役割を担うのは難しい。

宮本渡船の宮本基さん（谷本徳光さんの義理の兄）が区長の時、谷本さんに相談して、祭りを再開した。いまのような300人以上呼んで実施するという形ではなく、島の教員であった田中先生が仲間を連れてきてくれて、担ぎ手だけ何とか集めて、3年ほど継続した。それから、10年ほど途絶えたように思う。祭りの日は、もともと旧暦の8月20日だが、このころには学校の先生の休みにあわせる必要もあって、土曜日曜で調整して実施していた。地区にも担ぎ手になれる若手がいたし、お宮自体にもお金があった。10月の第2週目は宿毛祭りとかぶるので、避けて実施をするようにしている。

もともと、神輿は島の人でも由緒ある家柄の人しか担げなかった。いまはもうそんなことは言っていられないが、できれば島に関係がある人で担いでほしいという思いはある。なかなか、島に関係がある人で担ぎ手が集められなくて、2017年は市役所の人に頼んだら引き受けてくれた。午前中だけのつもりだったが、午後もやってくれるような感触だったので、そのまま午後も引き続いてやってもらった。

2009年に復活したときには、渡船業者の中心的な存在の家中渡船の一人君をリーダーにして、中山達男さんが支援して実施した。しかし、1年で終わってしまった。

田中区長が区長になったころ、「このままでは無人島になってしまう」という危惧から、何とかしたいということで相談があった。その頃には、谷本徳光さんも宿毛に戻ってきていて、3人で相談をして、島出身者に声をかけて「鵜来島を守る会」を立ち上げることになった。その頃から、30人程度会員がいるが、動けるのは半分。

2011年に鵜来島を守る会の発足から、秋祭りの本格的な開催まで資金と人員の確保の関係で、4年くらいかかった。道の駅すくもの草刈りをしたり、いろいろとしながらお金を集めた。

2015年に鵜来島を守る会として、初めて祭りを実施。400人以上が集まってくれた。この時から、一人3,000円の会費をもらっている。祭りでは担ぎ手はもてなすようなところがあるが、お金払って辛いことに来てくれる人がいるのか不安だった。谷本さんはそのあたりは自信があったようで、最低5,000円といっていた。「もし集まらなかったらどうするが？」ということになり、3,000円に落ち着いて、継続できている。

2016年は片付けに協力してほしくて土曜日で開催したが、土曜日が保育園の運動会とかぶったりして、参加できなかった人も多かった。そのため、2017年は日曜日に開催したが、土曜日だったら参加できたのにという人の声もあった。

区長の子の野球部の高校生とその仲間が2016年も2017年も来てくれている。25~6年前、息子が3~4歳の時、見たことがある程度のかかわりだったが、2017年は息子が仲間を4人連れて帰ってきてくれた。力強く、頼もしい。

集落活動センターの予算を取ってこれないかを、相談している。伝統文化の維持の文脈でとってきたら、飲食には当てられないが、担ぎ手のチャーター船の費用は出せるかもしれない。渡船業者は、今も昔も祭りにはあまり協力的ではない。漁師の祭りで、自分たちには関係がないと思っているところがある。

渡船業については、昭和40年代から始まった新しい業態。当初は、片島から鵜来島へは巡行船を利用し、鵜来島から磯まで渡船をしていた。いまのような大きな船ではなかった。昭和40年代初頭には、1隻しかなく、その船も事故で沈んでしまい、やっていた人もなくなった。おそらく、定員オーバーまで乗せていたのだと思う。昔は朝早くからでなくとも1日中釣れてた。量が違った。

当時は、カツオ船がメインの仕事で、4~5隻は就業していた。カツオ船ではなく、タンカー船に乗った人もいた。この頃の人はほとんど高校にいっていない。カツオ船に乗っていた人が始めた。

## （鵜来島）20171101\_宮本定子さんの話

宮本渡船の民宿の宮本定子さん73歳。

父親の柴田定吉さんのカツオ船りゅうこう丸。旦那の宮本基さんはその船に乗って夏は鰹・冬はサンマを追いかけて20人乗組員もいて、三陸沖へ漁に出ていた。、が、51年ほど前に独立、宮本渡船を始めた。高見渡船も同じころに始めている。

現存している渡船だと、柴田渡船が一番最初で、家中・家本がその後くらいに営業を始めた。当時は、釣りの時間制限はなく、磯割もなく、早い者勝ちで事故や争いも多かった。基さんが初代で、孫の中尾巧さんに2代目として引き継いで10年程度になる。

最初は、ぼろのカツオ船を買ってきて渡船業をはじめた。現役の船は5代目。ぼろカツオ船、木船、プラの船、1995年11月頃に新調した船、いまの船。

島での暮らしは不自由に思うことはない。足らないものがあれば隣に借りに行く。区長の奥さんや孫に頼める。病院に宿毛に行くついでに帰るし、集落活動センターで宅配サービスもある。

出口しげおさんは、島から漁に出てる。島まわりのカツオ船は島では毎日出船していた。15～16人乗り。深浦に水揚げしていた。その後、小さな船になっていさぎ釣りとか。

最後のお店は、17，8年前になくなった高見商店。現在、鵜来島でネイチャーガイド兼アーティストをやっている西内さんのおうちはもともと柴田家。そこで、定子さんは20年位前まで宮本商店をやっていた。

島は祭りがなくなったら終わり。祭りの一日のために、準備も片付けも大変でも楽しい。4人でも5人でも島におばちゃんがいないとできない。島に人がいるからできる。今年は中山房子さんが全て采配して面倒を見てくれた。昨年までは全て定子さんが面倒を見ていた。

神輿の担ぎ手やヤグラの乗り手など、昔は仕来りや島のルールがあったが、いまはなくなってきてる。昔は神輿は限家柄の各のよい限られた人しか担ぐことができなかった。ヤグラに乗り込む男の子たちの背中には、寄付の金額などが書かれた半紙を貼りつけて、その数を競い合うような文化だったが、よい家柄、経済的に恵まれた家柄であれば半紙がたくさんついたが、そうでないとちょっとしかつかない。いまどき、子どもが不憫だということで、なくなった。

宿毛では人が亡くなると旗を作る。島で土葬をしなくなって、10年以上たつ。亡くなって3年たつと、竿にビラビラをつけた、トウロウを作り、1mくらいの小さな船を作って、海に流す。団子とかも載せる。いまはできる範囲でやる。初盆で流す人もいて家ごとに違う。

宿毛の息子や娘から島を出て、宿毛に来ないかと言われる。子のもとにいった島のおじいちゃんやおばあちゃんも多くいたけど、島を出たら毎日の学校前での雑談もできなくなって寂しくなってしまうから、出ていかない。島で楽しく、仲良く生活することだけを考えている。

島で育てている野菜は、春菊、こまつな、おねぎ、大根、ほうれん草、たかな、にんにく、など。台風の潮で野菜が、全てなってしまった。種は、集落活動センターにお願いしてまとめて買ってもらっている。

夏は冷や汁。鰹節やいりこで出汁を取って、じまめ（落花生）とねぎ、きゅうり、つわぶきなどを入れて、ご飯にかけて食べる。つわぶきは3月になると山に取りに行く山菜。

冬は、ほうちょううどん汁。きびなごで出汁を取って、小麦粉をこねて包丁で切ったふとめのうどんと玉ねぎ、人参など野菜を入れる。

島で昔から食べているものに、めあかいもがある。芋の部分はもちろん、茎は皮をはいで、乾燥して保存食にする。お寿司とかにして食べる。

きびなごはたくさん獲れたら干して煮干しにする。

いのししが渡ってきて、芋が食べられるようになってしまって、10年位前から芋類を作らなくなった。いまは、ねこといのししの島になっている。

## （鵜来島）20171101\_田中辰徳区長の話

龍頭山の上で、毎年草刈り。宮本区長の時に神社を二つ、春日神社の上に下げた。かつては、龍頭山の上まで畑が続いていた。守る会の人が上まで道を刈ったりしてくれた。昔は山頂に行く道が3か所あったがいま使える道は1か所のみ。

1996年に島に帰ってきた。2002年までは何とか地区でお祭りを維持することができていた。人口が60人はいた。外の人出を頼まなくてもやれていた。島の人の親戚や友人知人は、声をかけた島の人がの家でもてなしていた。

2002年、宮本基さんと地区で主催して実施。毎年持ち回りの区長で田中たけしさんが区長だった。この時はよそから大々的に手伝いを呼ばなくてもやれた。2/3は島の人と島出身の人、1/3は鵜来島に勤務したことある先生のほか、島関係者の友人知人など。定期船を使わず、鵜来島のチャーター船のみ。翌年から2009年に再開するまで6年間は、お宮（春日神社）の前にお神輿を出しただけだった。

2009年にかずくんと中山達男さんが中心になって、復活した。会費なしで、寄付を集めて実施した。やり方への反対や批判もあったが、何とかやり切った。この時、とても大変で、現実に金と人手が問題となって、翌年以降継続しようという声が上がらなかった。

2010年に区長になった。祭りを復活させたかったが、他の役員である島の先輩たちからは、「お前は甘い」「たいへんだからできない、無理だ」と言われて、反対され、実施できなかった。

2011年に、鵜来島を守る会が発足。目的は掃除をすること。発足した年にお盆を復活させて実施した。初盆となると供養だが、そこまではやらず、お坊さんも呼ばず、みんなで集まって昔の写真を出してきて見たり、カラオケ大会をしたり、みんなで集まるお盆を復活させた。

春日神社の大祭をやるには予算と担ぎ手が問題。守る会の発足から、祭りの復活までは数年かかった。

2015年に鵜来島を守る会として祭りを復活。会費制にして広く参加者を募った。300人以上が集まった。

2016年2017年と同様に継続している。

島だけではなく役所やロータリークラブや息子のつながりで宿毛高校野球部など、参加費をとって、定期船とチャーター船と利用して、3/4は外の人出を借りている。

来年は、担ぎ手の人と観光で写真とか取りにくるお客さんを分けて、参加料なども変えて行こうと思っている。

龍頭山への道は、3ルートあるが、現在使えるのは1ルートのみ。他に、春日神社の手前にある墓地の奥からあがるルートと、砲台の材料の鉄などを引っ張り上げるためのまっすぐショートカットしてあがってくるルートがあって、それが道になった。山頂に至る道の上下には、ずっと畑がついていた。2000年代初頭までは、年に2回草刈りをしていた。2002年に龍頭山の山頂にあった神社2つを春日神社のほうに下ろして以降は草刈りもやっていない。草刈りをしなくなってイノシシが出始めた。

道の途中を右後方にあがっていく道があり、そこに貯水タンクがある。かつては、運動場になっていた場所。そのさらに先の分岐があり、右に行くと水源地、左に行くと山頂に続いている。この辺りから下に降りる時には、段々畑をぴょんぴょん飛んで下の道まで降りていた。昔は、麦と芋と地豆。芋は外に売って外貨獲得していた。野菜は家の周りや集落の近くで栽培していた。

砲台跡は山頂にある。衛所は、水源地に行く途中にあり、探知部隊が詰めていた。砲台の部隊とはあまり交流がなくそれぞれが独立していた。兵隊さんがきて水源地ができたし、山への道もよくなった。石積みして土が流れないように道を固めている。昔はもっと土が肥えていたが、いまは雨で表面の土が流出してしまっている。

山頂の神社の鳥居の下には、詰所があった。島内には神社が多く、30～40ある。

砲台跡は3つある。15㎝砲が据え付けられていた直径3mくらいの穴と、砲台の衝撃を吸収するような四角い横穴が8つ空いた構造物がある。その構造物の隣に弾薬庫がある。入り口が5m×5m、奥行きが2~3mくらいのコンクリートの構造物。弾薬庫の中には竪穴がある者もある。竪穴の先は横穴になっているが、どこまで続いているのか不明。現在は狭くなってしまっていて、調べることは難しい。

からすここという、野生のイチジクの仲間があちこちに生えており、それを食べながら山道を運動場まで通っていた。アザミの根っこが美味しかった。

　戦後、燃料にする木材を巡って、山の争いがあった。畑は植えたときに既に分かっているので、争いは少なかった。

島の畑の税金を7万円/年を地区として支払っている。登記をしておらず、所有とか面積とか細かなことがなんとも不確かなので、区でまとめる形で対応をしている。以前は、耕している人から、徴収ができていたが、いまは滞っている。

医療などの環境は、緊急の時は不安があるが、実は僻地の方が行き届いている部分もある。月に2日程度県の保健師、月に1日市の保健師が薬をもって検診に来てくれる。

## （鵜来島）20171107\_中山達男さんの話

68歳。1949年ごろ生まれ。

1950年代中頃、鵜来島には鰹節の工場があった。現在の小学校の建物の前の海に対してスロープになっている部分はもともとは浜になっており、そこに船をつけて、獲ってきたカツオをぽんぽん投げていた。

1970年ごろ（22歳の時）、1年間だけ柴田さんの50トンのカツオ船に乗っていた。乗組員20人程度、春は沖縄、その後だんだんと北上し、三陸沖までカツオを追いかける。冬になると1～2か月はさんまも獲った。

1970年ごろ、鵜来島には6隻（1隻あたり15～18人乗り）の19トン級のカツオ船があって、深浦漁港に水揚げしていた。当時、深浦は全国的にカツオの産地として名を馳せており、一日中カツオの入札がなされていた。伊予の船は14～15隻（1隻あたり20～23人乗り）、高知県宇佐や久礼の船12～13隻（1隻あたり10～12人乗り）も深浦にカツオを水揚げしていた。1960年代には母島にもカツオ船が2隻あったが、1970年代にはなくなっていた。豊後水道はものすごい量のカツオが水揚げされていた。漁はほぼ日帰りで、悪くても1日4～5トン、よいときには20トンを水揚げした。深浦の市場では単位が貫目だった。60kgくらい入るざるみたいなキャリーが何百も並び、天秤ばかりで量っていた。そのため、船が2隻も入港したら、いっぱいいっぱいだった。

5月頃、カツオの活性が高く、食いがよく、姫島近くまでカツオが入ってくると、一日に2回水揚げすることもあった。夜明けから釣りはじめ、昼まで7，8トン獲って深浦に水揚げしてから、また漁に出て夜まで釣って深浦に水揚げした。

えさは伊予からとっていた。その日に獲れたてのいわしは、網に慣れていないため、船のいけすでパニックを起こして、いきが悪かった。1970年代になって、網で3～5日ならしたイワシをえさにするようになって、格段にいきがよくなった。

1970年代はカツオが豊漁続きだったが、1980年頃になると思うように釣れなくなり、漁場も広くなった。深浦のカツオ船の数も約半分に減っていた。一方で、いままでは大型船を主に操業していた土佐佐賀で大型船がだめになってしまい、19トンのカツオ船に蔵変えする船主があらわれはじめた。この頃、佐賀船籍の船が10隻程度深浦にもカツオを水揚げするようになった。

30代半ばの頃に鵜来島最後のカツオ船がなくなった。その後、カツオ船からスカウトされて、平成元年、2年の2年間だけやった。

1990年前後10年くらいはイサギ漁が流行った。いまでこそ600～800円／kgで安いと500円を割り込むこともあるが、当時は今の3倍の2000～2300円／kgで、2000円を割り込むことはなかった。2000年代初頭まで高値で推移していた。

夜明け前に出船して、夜明けから正午まで釣って、80～100kg／日を獲っていた。いけすで生かしたまま、14時頃に深浦へ入港し、〆たり水揚げの準備をして、15時には水揚げ、15時20分には入札が始まっていた。いさぎは250～300g／尾が主なサイズだった。

深浦漁港で、年ごとの水揚げ成績優秀者として、カツオ船でもいさぎ漁でも何度も表彰されて報奨金ももらった。

船主は船のオーナー、漁労長は船頭、出漁してからは漁労長がすべて取り仕切る。他に、機関長や無線長など役割があった。中学を卒業してすぐの新人でもベテランの年配でも同じ一人前として扱われた。配当は、売上から経費（主に燃料代と生餌代）を引いたのち、半分を船主がとり、残りの半分を乗組員数＋１で割った金額を分配していた。＋１分の配当は、役職者などへの手当となった。水揚げが良かった時などは、配当とは別に船主から給金をもらうこともあった。

## （鵜来島）20171121\_宮本五さんの話

1959年生まれ、60歳。

昭和50年、中学校を卒業。それから、約10年間、昭和58年頃24歳の時までカツオ船に乗っていた。近海漁業で、4月から9月まで、ほぼ毎日漁に出ていた。10月から12月までは、働き始めた年は何もしていなかったが、2年目以降は島でのこづかい稼ぎのため、大工とか左官とか水道屋とか様々な手伝いをしていた。その時の経験が、いまでも地域支援員として島で暮らしていくうえでのこまごまとしたことに役立ってる。最後のカツオ船がなくなって、大阪に出た。大阪の塗装店で30年近く働いていたが、だんだん仕事も少なくなり、職安に行くこともあった。そんなときに、地域おこし協力隊として島に帰ってきてくれと田中区長に言われ、平成24年4月に戻ってきた。

秋祭りの神輿やヤグラや牛鬼を上下に揺らすのは、気合を入れるため。

牛鬼が3周以上回った後、好きなタイミングで神輿は入れる。ヤグラが入って回り始めてから、神輿は入る。1回ごとの練りを何周で終えるか、そのタイミングは牛鬼が決められる。牛鬼が元の位置に戻ると神輿とヤグラも戻る。練りを始めるタイミングも牛鬼が決められる。お練りは何度も繰り返すが、お練りの全体を終えるタイミングは牛鬼と祭りの役員の目配せで決まる。

お練りの後、たいさんによって、神事がなされる。神事をやっている最中に、昭和年代は牛鬼の頭が船を回る。神事が終わると、神輿が船を回り、全ての船に乗り込んで神事をする。牛鬼の頭は、各戸を回る。

祭り当日は、担げなくなるけん、あまり飲むなと言われていた。

夕方の練りは、昔は18時以降に開始して、20時とか22時とかまでお練りを続けていた。お練りは途中休み休み、少なくとも10回以上は回っていた。お練り後に、春日神社まで上がり、神社の境内で最後のお練りをする。神社で神事をして祭りは終了となる。神社の向かい側、いまの公衆トイレになっているところには青年会館があり、宿毛から芝居を呼んできて祭りの後には、みんなで青年会館で芝居を鑑賞していた。大体、22時とか23時とかから開始して1時間以上はあった。

祭りの翌日は、ウラツケ。朝6時くらいから片づけをして、9時くらいには終わり。集会所で祭りの神輿、ヤグラ、牛鬼の担ぎ手が集まり、祭りの終了と成功を乾杯する。その後、適当に仲の良い者同士で複数人のグループに分かれて島の各戸を訪問して回る。島の各戸では、おもてなしの食事と酒が用意されており、9時過ぎから日付が変わるまで全ての家を回る。各家ごとに、食事もお酒も大量に用意する。自分の家では、ビールを7ケースと清酒を1斗用意して、全てなくなっていた。自分はお酒は飲めないので、集会所で乾杯をして、三々五々各家々を訪ねていくときに、しれっと集会所に戻り、そこから外に出ず、寝て過ごしていた。腹が減ると頃合いを見計らって家に帰って食べたが、仲間に見つかると何している！と怒られ連れていかれてしまうのでハラハラしていた。

大体、ウラツケの翌日が、島の運動会だった。カツオ船に乗っている人たちはまとまった休みがとりにくかったので、みんなが帰ってきている祭りの後に運動会を実施していた。

当時鵜来島にもカツオ船が4隻はあった。船は19tで、15～18名くらいは乗り込んでいた。それだけ人手が必要で、外からも人を頼んでいた。

船の水揚げは全て深浦漁港にしていた、深浦では、２４時まで市場が開いており、水揚げしたそばから入札をしてくれた。片島漁港などから、たまには宿毛でも水揚げしてや、といわれるので水揚げしても、買い手がつかなかったりするので、やはり深浦漁港に水揚げしていた。

船の稼ぎは、７：３で、船主と乗組員で分けていた。餌や燃料などの必要経費については全て船主持ちで７のもちだった。他所では割合が６：４だったり、乗組員側にも餌と燃料の負担はなく、乗組員側にはよい取り決めであった。

乗組員が10人だったら、＋2人して12人で3割分を山分けし、＋2のうち1人前は漁労長、残りの＋1は機関長と2番船頭（副漁労長）で0.5人前ずつ取った。船主の稼ぎのなかから、1人前に当たる分を漁労長につけたりしていた。漁労長は3人前分稼ぎがあった。

## （沖の島母島）20171101\_金子誠さんの話

沖の島渡船金誠丸代表67歳。

沖の島渡船金誠丸を始めたのは、44年前。その前は自動車メーカーに勤務していた。

母島には、澤近、高見。弘瀬には島一、金子、今はない三浦。鵜来には、柴田、家本。一番多い時期で、13業者15船あった。

昔からグレ釣り。渡船屋新参者だったので、昔からやっているから広い場所に客を降ろす権利がある、という考えの人もいた。30年以上前、30代の頃に組合長を10年務めた。縛られてやるのはいやだという昔からの渡船屋もいて、有名無実になって解散することになった。一度解散してから、また組合長として立ち上げた。鵜来島との対立もあった。

## （沖の島母島）20171214\_岡謙二さんの話

67歳。定年前は、宿毛市営定期船の仕事を30年、機関長まで務めた。定年して、沖の島母島でさんご漁師をしている。

さんご漁は日の出から日没までだが、夕方15時ころまでが多い。一日に最大7回網を変えて漁をする。波が高くなれば戻ってくるし、潮が動かなくても戻ってくる。潮が動かないと網を取り付けているチェーンが動かい。潮がないときには漁ができないわけではなくて、機械で引っ張ることもできるが、あまりやらない。

さんご漁の道具は、船からメインのロープである引き綱（250m）、その先端に横木（4，5m程度）をつけ、横木から７～９本のチェーンを取り付け、チェーンの先端には、古タイヤを切り取ったような50㎝くらいの板、板からは３～５m程度の網を４つ取り付けている。

海域につくと網を下ろし、水深100～130mくらいを狙って、引き綱を160mほど出す。1時間ほど潮に流して、ひっぱる。いまは、GPSで距離がわかるし、船が走った痕跡も残る。

親父もさんご漁をやっていた。当時はチェーンではなく大きな石を重りとしてつけて、重りから仕掛けをつけていた。

さんごの入札は年に３～４回ある。漁1回ごとに網を取り換える。一度使った網は、付着物を取り除き、網を広げてきれいにする。網を手入れする作業に時間がかかるので、人を頼むことが多い。

## （沖の島母島）20171216\_堀景さんの話

昭和36年、沖の島町母島生まれ。

母島中学卒業、宿毛高校、高校2年からずっと片島に住んでいる。卒業後、スポーツ店で15、6年で仕事をして、いまは外資系生保の営業まわりを10年やっている。片島区長。

同級生は12人、古い校舎に通っていた。卒業の翌年、母島小中学校になった。衰退しつつある時期だったように思う。父親は遠洋のカツオ船、2月に出て、10月に帰ってきていた。母とおばあさんは普段、畑仕事をしていた。芋、麦、じまめ（落花生）を段々畑で作っていた。売り物として現金収入のために作っている畑は上の方にあり、ということではなかったように思う。近くの親類やお世話になっている方に送ったり、もっぱら自家消費だった。うちの畑は段々畑の上の方にあり、たいへんだった。カルイ（背負子のこと）と鍬をもって、手伝ったりもしていた。芋などは、板の間がはぐれる（取り外せる）ようになっていて、その地下に保存していた。干し芋も作っていた。いまでいうところの、東山。甘くておいしい芋だった。主食は米を食べていた。麦を作っていたこともあって、小学校入学前までは麦を食べていた。魚は毎日のように食べていた。運動会の時のぼたもちがごちそうだった。大きいおにぎりにこしあんをたくさんつけてもらった。

中学生の頃の母島のお祭りでは、神輿、ヤグラ、牛鬼のほかに、子ども神輿と五ツ鹿踊りもあった。子どもの人数が少なかったので、中学生の頃、五ツ鹿踊りを踊ったことがある。1か月以上は練習をした。踊り手は男の好みで、昔は選ばれた子しか踊り手になれなかった。ヤグラに乗って太鼓をたたく男の子にはお札や熨斗をつけた。自分の親戚や仲のよい家の子につけた。その子を応援する意味や漁師が多かったので大漁、安全の祈願をしてもらう意味があった。

いただいた熨斗については、祭りの後青年団が熨斗を付けてくれた方のところを訪ねて、寄付をもらいに行っていた。1000円とか2000円とか家によって異なっていたようだった。シシ舞の5人は、午前中のお練りの後、まずは澤近家の前で5人で1番から5番まで通しで踊った。その後、母島の全戸を1戸1戸、回って踊っていた。川を挟んで北と南、2人と3人に分かれていた。1～5番すべてをやると長いので、1番3番5番とか適当に端折って踊った。端折り方にルールがあるわけではなく、自分たちのさじ加減でやっていた。

牛鬼は、中学生の役割だった。午前のお練りが終わると、牛鬼の頭を持って各戸を回った。家につくとラッパを吹いて、「お祓いします」といってどこの家にも縁側があったから、縁側に頭を置いた。大人も一緒に回っていて、大人はお神酒をいただいた。家々には皿鉢を3つも4つも用意していて、どこにいっても皿鉢があった。

ヤグラを担ぐ青年団の衣装は、白装束で、サスペンダーで白いズボンみたいなのを留めて、腰帯をまいていた。

母島では、ヤグラと神輿が競争する。鵜来島では、ヤグラが中央で、その周りを神輿と牛鬼が走り回るが、母島ではヤグラが中央ではなく走る。神輿が先で、ヤグラが後ろから追いかける。朝のうちは牛鬼もついて回る。青年団が担ぐヤグラが、壮年以上が担ぐ神輿を追い抜いて、神輿を神社に帰らせない。青年の実力行使。休憩の時には、ヤグラ唄とかあって、見よう見まねで歌った。ヤグラの青年団が、酒でつぶれたりしてしまうと、先に神輿が帰ってしまうこともあった。神輿とヤグラにはひもがついていて、先に帰ってしまおうとするとだれからともなくそのひもを引っ張って帰らせないようにしたり、あまりに帰らないヤグラを子どもたちを早く寝かせたい母たちが上から引っ張ったりして早く帰そうとしたりもした。

沖の島の干棚（ひだな）は、いまは残っている家もほとんどパイプだが、もともと竹だった。宇和島から貨物船が定期的に来ていて、竹も貨物船が持ってきていた。貨物船が来ると、きてるよ！ということを知らせるため、漁協のサイレンが鳴った。魚が大漁で船が帰ってきてもサイレンが鳴った。こういう良いときのサイレンと災害とか何かよくないことを知らせるサイレンはなり方が違うのですぐわかった。

竹の干棚を残したい。普及はむつかしいが、自分ができることをやりたい。片島・大島・沖の島・鵜来島で宿毛の島サミットをやりたいと思っている。連携して観光のお客さんをもてなしたりしたい。

## （沖の島弘瀬）20171104\_市原芳政さんのお話

昭和23年生まれの68歳。市原商店の経営のほか、漁師もしている。

白皇神社（しらおうじんじゃ）は、漁師の神。旧暦の5/18にお祭りをする。伝馬船（いまは、エンジン付きの船）で、男たちは神社までいき、神事をする。その後、網元さん（船や網の所有者）のお宅で振る舞いがある。子どもたちはお小遣いをもらう。

鴨姫神社（かもひめじんじゃ）は女の神。旧暦5/28にお祭りをする。越から下の健康に効くと言われており、安産の神として、効用がある。30年ほど前までは、神主さんを呼んでおり、お祭りの日にはテキ屋が7〜8軒、島外から来てお店を出していた。沖の島出身の方はもとより、宇和島から乗合の船が出たりして、島の外からの信仰も厚かった。神社などでのお祭りの日や農繁期には、弘瀬小学校が午前で休みになり、子どもたちも祭りや農業に参加した。いまでいう社会勉強、身体で文化体験をしてきたし、子どもたちは貴重な労働力でもあった。

荒倉神社は、弘瀬地区の最も高いところに位置し、集落を見下ろす山の上、標高100m、急な階段が約600段ある。荒倉神社では、春と秋に祭りを行う。秋祭りは、毎年旧暦8/28にお祭りをする。

ヤグラは小学生の昭和33年頃に維持できなくなって、なくなった。牛鬼は戦前にはなくて、ヤグラがなくなって以降は、神輿のみだと寂しいので、新しく牛鬼を作った。沖の島は明治時代まで土佐と伊予に分かれており、弘瀬は土佐側だったが、母島は伊予側であり、牛鬼が伝わっていたため、弘瀬でも牛鬼を取り入れることになった。高度成長で子どもが外に出て行ってしまい、海の仕事ではなく陸上での仕事にシフトして行った。漁師も減った。当時、牛鬼は中学生くらいの子どもが担当していた。男子中学生だけで、50人近くはいた。牛鬼はいまよりか大きく、10人以上で担ぐようだった。いまの牛鬼は、6人いれば担げるように小さく作りなおしたものになっている。

神輿の担ぎ手は弘瀬ではエリート16人が選抜されていた。担ぎ手は氏子の長老が決めていた。家柄や勢いのある家から、品行方正な人が選ばれた。ヤグラの担ぎ手はやっかみをもっていた。神輿の担ぎ手に嫌がらせしたりとかもあった。昭和32、33年頃には、青年団で祭りをまわしていた。昭和35年頃には、漁業から会社勤めの人が増える中で、青年団も維持できなくなって、中学生であっても、卒業して外に出てしまうような子には神輿を担がせたりもしていた。

前日の宵宮では、神輿の渡御の準備と神事を行う。普段、神輿は解体された状態で神社に収められている。拝殿に出して組み立てて、鈴や榊、色紙で作った紙垂（しで）を上から飾り付ける。飾り付け後に、神事を行い、御神酒が振る舞われる。神輿が拝殿に出されているので、その夜はお守り役として神官と氏子が拝殿に寝泊まりする。

本宮の日は朝、10時頃に御神体を神輿に移す神事を行う。神事が終わると、神輿を拝殿から出し、お下がりが始まる。お下がりとは、神輿が階段を下りて御旅所にお渡りすることで、神輿の後に牛鬼が続く。

担ぎ手はお下がりの間、「ヨーサンヤ」「ヨーサンヤ」という独特の掛け声をかけあう。

神輿の担ぎ手は最低18人必要。担ぎ棒が10人以上、神輿を引っ張ったり、ブレーキをかけたりする前綱と後綱という綱がついており、各4名ずつがその綱を握る。

最近は人手を集めるのが難しくなっている。幡多信用金庫の人たちが数年前から応援に入ってくれて助かっている。弘瀬地区には、昭和20年代後半には1500名以上住んでいたが、いまでは100人を切っている。

神社から御旅所までの石段には途中に踊り場が3ヵ所ある。踊り場に着くと神輿は5分程度休憩する。神輿の下をくぐると願い事がかなうといわれており、地区の人たちは踊り場に神輿がいるあいだにお賽銭をあげて、神輿の下をくぐる。担ぎ手はこの間、古くから地区に伝わる祭りの唄を歌う。

唄はねり唄、あげ唄、舟唄の3種類があり、メインの唄い手が唄い、周りがかけ声をかけて盛り上げて行く。ねり唄には、沖の島界隈の無人島も含めた地名が順番にでてくる。あげ唄は人が神輿の下をくぐるとき、舟唄は神輿が出発する前に歌われる。

階段を下る途中、弘瀬地区を開いたと言われている三浦家の旧屋敷の広場にてお練りをする。広場をかけ声をかけながら、神輿が勢いよくまわる。

御旅所に着くと、神輿は安置されて神官により神事が行われる。お初穂料をもってきた方には、荒倉神社の御札を授ける。

元々の御旅所は三浦家旧屋敷の庭であった。浜までおろして神事をしてから、三浦家の敷地まで上げて御旅所としていた。いまは、港まで下ろした後、港の広場を御旅所としている。

神輿がお帰りで御旅所を出発するのは午後5時30分ごろ。途中、三浦家旧屋敷の広場で再び練りを披露してから神社への石段を上がります。石段を上がるころには日が暮れかかり、宵宮の日に準備しておいた御神灯が灯される。お帰りのときも各踊り場で祭り唄を歌い、神輿くぐりが行われる。

神社拝殿に神輿が到着するころには、日はすっかり沈んでいる。神官が神輿の中の御神体を奥の院にお戻しする儀式を行う。そのとき氏子のひとりがラッパを吹き鳴らし、神輿の担ぎ手たちは神輿についている鈴をリンリンと鳴らす。それが神様移動の合図になり、境内に訪れた参拝の人たちも頭を垂れ、両手を併せて一心に拝む。

傘鉾は、２年に一度実施する供養のための行事で、お祭りとは違う。

島には土がほとんどなく、石を割って平地を作った。戦後、人が帰ってきて手狭になって新しい家を建てたりもしたようだが、物心ついてからは新しい家は建っていない。

もともと弘瀬港は、浜だった。いまは、石をたたんで斜面を作って、防波堤が延長されているが、もともと防波堤はなかった。昭和33年頃には、大人はみんなシュウレン棒という鉄棒をもっていて、石を運んだり、動かしたりするのに使っていた。

鵜来島では、一本釣りやトローリングでカツオ漁がさかんで、沖の島では一本釣りで深海魚、刺し網や定置網がさかんだった。波が強いため、養殖はできない。底の波が動くので魚がきずだらけになってしまう。唯一久保浦ではできる。

きびなご漁は刺し網が伝統的な方法。巻き網だと根こそぎとってしまうので、制限が必要。同じ漁場でとったきびなごでも、刺し網と巻き網では味が全然違う。漁期には4:00に網を入れて、4:30に水揚げする。水揚げも機械ではなく人力なので、とても重労働になる。すぐに浜に戻って、網を揺すって刺さっているきびなごを手早く落とす。3kgずつパックに詰めて、冷凍せず、冷蔵の氷を打って、朝の巡航船で全国に出荷していた。1日100箱は送っていたから、水揚げは300kg以上あった。昭和終わり頃に復活させてやっていた。

いまは伊勢エビを主にやっている。5/1~9月末までは禁漁期間になっている。網を沈めて、海底を引きずるようにして引っ掛ける。伊勢エビが捕れたら、かごに入れて海に沈めて活かしておく。注文がきたら生きたまま常温で全国に発送する。

宵宮には、神輿の飾り付け、拝殿で直会。漁師がとってきた魚の刺身や婦人部が田舎天ぷら、姿寿司、稲荷、のり巻きなどを作った。いまは仕出しを頼んでいる。中学校に上がるころまで、主食は芋麦だった。母と姉妹は芋麦だったが、父と自分は白ごはんも食べられた。実家が商店をやっていて現金収入があったので、普段からある程度白ご飯が食べられた。当時弘瀬では普通、祭りや法事でないと白ごはんは食べられない、一番のご馳走だった。先祖を祀るのは重要なことなので、法事でもごちそうがでた。いまでも、昔の話になると、姉妹からは自分たちはお米を食べられなかったのに男だから食べられてずるかった、と言われることがある。

地豆は贅沢品。芋麦は主食だし、現金収入になるが、地豆は現金化できないので、つくっている家は土地に余裕がある。芋は干して売っていた。ねぎ、だいこんなどおかず用の野菜のみ自給していた。土地がやせているし、畑でよいものはなかなか作れなかった。

## （沖の島弘瀬）20171104\_金子渡船岡崎正勝さんの話

最近、渡船業は7〜10月はお客さんがなく、休業している。

岡崎正勝さんは、1980年頃に宿毛に帰ってきて、宿毛市高砂のパシフィックマリンにて、ダイビング船のガイドをしていた。当時は、レジャーダイビングは少なく、銛や空気銃を持った魚突きのお客さんが多かった。ダイビングのお客さんだけでは、少なすぎて食べて行くのに足らないので、水中土木の仕事をとって食いつないでいた。約20年前に魚突きは追いやられ、レジャーダイビングのみになった。

片島から沖の島は40分程度かかるが、柏島からだと5分でこられる。柏島から沖の島や鵜来島にダイビングに連れてくる業者があらわれ、自分のところでやれよということで喧嘩が続いた。

先代のおじいちゃん、金子五郎さんが創業者で、弘瀬で一番早く渡船業を始めた。母島の澤近さんらとほぼ同じ頃から始めている。2002年頃に、跡を継いでくれないかと頼まれて、岡崎正勝さんが引き継いだ。

現在の場所に移って、3年。それまでは、市原商店の上にあるウッドデッキの家で民宿をやっていた。今の建物は龍神丸の荒木さんの家。この建物に住んでいたおばあちゃんが宿毛に出ていくことになって、取り壊すつもりなので、買ってくれといわれ、購入した。息子がダイビング黒潮をやっているので、旅館黒潮にした。ダイビング黒潮は、荒木さんの沖の島水産と合併して、継続してやっている。夏はダイビングのお客さんを民宿に泊めている。

## （沖の島弘瀬）20171104\_金子五郎さんの話

金子渡船創業者。95歳。

44歳のとき、1967年に渡船業を始めた。沖の島では、母島の沢近さんが一番早くて、その次に始めた。冬はグレ、夏はイサキ、フエフキダイ。

創業までは、漁船に乗ったりもしていたが、中古で30馬力そこそこの船を購入して渡船業を始めた。12名の定員に20名以上乗せて航行し、海上保安署がきて、中村に出頭し罰金を払ったこともあった。

## （沖の島弘瀬）20171128\_弘瀬徹さんの話

沖の島弘瀬生まれ、67歳。

弘瀬中学校を出て、カツオ船に１７，８年、降りてから荒木さんの龍神丸で１５年、一本釣りの仕事をしていた。昔は魚が豊富で、生餌をたくさんまくと、魚が食べない分がでるので、いけすの周りに小魚が集まり、その小魚を食べる大型の魚が回遊してきていた。餌をまかなくなって、魚も減ったように思う。養殖業をやっていた親父が亡くなって、跡を継いで養殖業を始めた。養殖を始めてみて、驚いたことは、従業員は魚が死んでいても平気で放置していること。何千匹もいるうちの1匹、2匹くらい別に構わないという考えだった。死んだ魚は毎日潜ってとるようにした。漁師は1匹を大切にする。漁師と比べると養殖は偽物の漁師。当時は、従業員10人で30~50万匹育てていた。

かつて、宿毛湾の魚を宿毛の人は食べなかった。平成7年頃に養殖の餌にペレットが使われるようになった。モアクラークジャパンという会社が、最初にEPを持ってきた。その後、ヤマハニュートリコジャパン、スクレッティングと入ってきた。EPは生餌よりか値段は少し高いが、海を汚さない。切り替えてから20年で海は何とかきれいになった。

20年前は、子どもが海で遊べなかった、海に入ると魚の死体が沢山あっていやだと言っていた。

平成8年頃まで、宿毛のブリは鹿児島経由で売っていた。平成10年頃、他所の名前ではなく宿毛の名前でも外に出せるようになってきた。宿毛では、宮本、貝崎、荒木、浜田、藻津では吉村などが、宿毛湾の養殖をささえてきた。宿毛湾はちょっとした発想でいろんなことができる。

弘瀬の鴨姫様は自分の母が世話をしていた。もともとは、小川家が世話をしていた。

白皇様は、山下梅吉（うめよし）さん、もう80歳近いが弘瀬に住んでいる。若いころは大きな網元で、白皇様の祭りの時には、白皇様には女人禁制だった。お参りをしてから自分の家で飲ませたりよくしていた。

荒倉神社の3月のお祭りでは、神輿は必ず出す習わしになっている。なぜなら、かつて大病が発生したときにお神輿を出して神頼みでそれを抑えてもらったという言い伝えがあるから。

遠洋のカツオ船は33トンとか、もっと大きいものもあった。カツオ船には、舳先に部屋があり、操縦室の奥に漁労長・船長・副船頭の部屋があり、機関長の部屋と無線士の局長には別に部屋があった。船員の寝床は、3段になっていて、ぎりぎり座れるか座れないかくらいの高さだった。奥行きは1mなく、70cmくらいで、長さは2m程度、高さは2mちょっとくらいの天井を3等分したくらいだったと思う。海がしけても、寝たときに壁に足がついて突っ張れるので、案外居心地がよかった。3月に出港して、鹿児島、高知、三重、静岡、千葉とカツオを追いかけた。6月頃には宮城の気仙沼や石巻に入っていった。3日1度とか2週間に1度は港に上陸し、飲み屋へ行った。11月までには宿毛に帰ってきていた。

## （沖の島長浜）20171221\_千﨑周子さんの話

　スナックさざんかのママ。70歳。昭和22年、沖の島町長浜生まれ。長浜小学校、母島中学校卒業。5人兄弟の長女として生まれた。中2の頃一番下の弟が生まれて、12歳離れていて同じ亥年。世話をしなくてはいけなくて嫌だった。

　当時、沖の島には、母島、弘瀬、そして、長浜に小学校があった。沖の島が村だった当時は、長浜あたりは谷尻といっていたが、町になって長浜と呼ぶようになった。長浜は、江戸時代から土佐藩の領土で弘瀬とのつながりが強かった。

　昭和10年ごろの生まれだと長浜からは弘瀬中学校に進学していたが、昭和12,3年ごろ以降には理由はわからないが、母島中学校に進学していた。自分も母島中学校まで、雨の日も風の日も1時間以上かけて歩いて通っていた。長浜小学校で同級生は12人、母島中学校では同級生が42人いた。

　長浜には川が2つあって、1つはおがわ・下流部分をたらいがわと呼んでいた。山の上から流れてくる谷川の水量が多く、ゴーゴーゴーゴーと流れていた。

　母島地区には、母島、古屋野、久保浦、アシミチの4つの部落があった。

　長浜地区には6つの部落があった。母島から長浜方面に歩いてきて、長浜に入ってきて、道路の下にあるのがコマツ、道沿いにもう少し言ったところにあるのがヨボシ、その先に大谷という地名があって、長浜小学校があったあたりはカイノコバ、小学校から下に降りていくと、タニジリ（谷尻）、さらに下に降りていくとナカヒラ、タニジリからさらに奥に行くとタマガラ（玉柄）。小学生の頃、タマガラには7～8軒の家があり、タニジリには、48軒の家があって、その端っこの家に暮らしていた。小学校の上には天満宮のお宮があった。

　物心ついたころには、カイノコバの上に開拓地があった。タニジリの川の近くには田んぼがあった。コマツの集落の下の芦の浜のあたりにも田んぼがあって、牛を飼っていたように思う。田んぼをやっていたのは1軒のみで、何か所かの田んぼを世話していた。芦の浜には遠足に行ったりもした。

　母島や弘瀬は波がとがる。長浜では断崖絶壁でごろごろ石からなっていて違っている。

　食べ物だと、冬の季節のメノリが最高。モグリという、ゴボウ、ニンジン、シイタケ、鯖缶などを炊き込んだご飯がごちそうだった。冬になると1月の終わりにメノリの口開けがあって、モグリご飯をメノリに巻いて食べるのが最高のごちそうだった。メノリは、一口いくらで権利を買っている人だけが、口明けの時に漁に参加することができた。口明けのときには、サイレンで知らされて、それが1~2回あった。その後、許可が出ると、権利を持っていない人でも誰でも採りに行くことができるようになった。

5月～6月ごろには、磯の口が明くと、テングサやフノリを採ることができた。磯の口明けになると、小学校が休みになって、みんなで採りに行った。テングサやフノリには、権利は設定されておらず、最初から子どもでも誰でも採ることができた。

ナカヒラの人で、村の助役だった中平益穂氏の奥さんが、メノリの口明けの時に流されて、亡くなったことがあった。自分が知っている限り、当時海で亡くなった人は子どもでも、大人でもこの件しか知らない。子どもながらに危険なことをわかっていて流されたりすることはなかった。欲して沖に出たのだろうとも言われていた。

　田んぼをやっていた人は山師もやっていたし、炭焼きもやっていた。男手は少なかったが、ある程度はいた。

　中学校ではお弁当を持って行った。薪でかまどでご飯を炊いた。だいたい、麦7合、米2合くらいで炊いていた。かまどで炊くと、軽い麦は上に行き、重い米は底の方に沈む。お弁当を詰めるとき、なるべくかまどの下を掘り返して、お米を多く入れるようにしていた。麦だけでも炊いていたし、朝夕は芋とか麦とかもよく食べていた。芋、麦、じまめ（落花生）は段々畑で自分たちで作っていた。屋敷の土間のあたりに穴を掘って、1年分の芋を保存していた。種芋と食べる芋と両方取っておいていた。畑では野菜を作っていて、ナスやキュウリ、ゴボウ、ニンジンなどいろいろと作っていた。椎の木からシイタケも作って取っていた。じまめ（落花生）もたくさん作っていた。サツマ芋は皮の色で黄芋と赤芋とあったが、身の色はどちらも同じだった。他に、ジャガイモやメアカ芋（里芋）も作っていた。麦の農繁期にも学校は休みになった。麦の収穫の7月とか、1月・2月頃の麦踏みのときとか。麦は芽が出たら踏んでやると強く育つので、みんなで踏んだ。

　イリコ（煮干し）を買ってきて、石臼で小突いて、小さく粉々にする。それに醤油入れて混ぜて麦ごはんにかけて食べていた。小中学生の頃に、お米はほとんどなかった。芋を洗って、鉋で薄く削って、干してからからになると真っ白になって、石臼で小突いてかけらにして、炊いて食べるものを干し芋飯と呼んでいた。米や小豆などを混ぜることもあるし、何も混ぜないこともあった。母親が、食べ飽きないように工夫して料理をしてくれていたと思う。

　長浜の人は、毎年、元長浜小学校の校庭で盆踊りを今でもしている。小中学生の頃は、櫓を立てて、櫓の上で得意な人が何人か踊って、櫓の周りでみんなが踊っていた。亡くなった人が帰ってくるので、母島や弘瀬からも人が来てくれていた。

　ナカヒラに降りていくためには、自分の家の敷地を通り抜けていく必要があった。おじいさんが果物が好きで、敷地内に果物をたくさん植えていた。いまは、家も取り壊してしまっている。

　小学生の頃、お蚕を学校で飼って、世話していた。桑の葉っぱは、その辺の山にいくらでもあったので、好きにとってこられた。桑の実が真っ黒に熟れるととてもおいしくて、大好きだった。

　だんだん、木を切ってしまってなくなったが、谷がゴーゴーと流れていた。水量がすごかった。竹を割って樋をつなげて谷から水を取っていた。家の中ではなく、外にタンクがあった。雨が降って大雨とかになるとタンクに水が来なくなる。樋に落ち葉がたまったり、虫が詰まったり、樋が外れてしまったり。そんな水を飲んで、風呂を炊いていたが、体を壊したりすることもなかった。

いま、長浜にはナカヒラに2件、ヨボシに2件、カイノコバにもいて、全部で8件くらい残っている。

　一番下の弟は、マグロ船に乗っていたが、火事になって、海に飛び込んで、そのまま亡くなってしまった。3月のとても寒いときで、一昼夜流されて、救助が来たが間に合わなかった。親が死んだ時以上に悲しかったし、悔しかった。

　母島中学校を昭和37年に卒業、職安から求人募集が来て、大阪の帝国産業という麻糸の加工などをする紡績企業に集団就職した。当時、高校に行くのは、勉強ができるか、金持ちか、のどちらかだった。勉強ができても家にお金がなくて、働く子も多かった。

　島では夜しか電気がなかった。長浜小学校にはテレビがあって、夜、たまに学校でテレビを放送してくれて、みんなで見たこともあった。まだ、各家にはテレビなんてなくて、学校でみんなでテレビを見られるのがとても楽しみだった。大阪では、電気はいつでもあったが、水は臭くて、消毒をしていて飲めなかった。6人くらいの部屋だったが、各自の持ち物とかをしまう半畳ほどの押入れがあって、そこにしまってある布団に顔を押し付けて、寂しさから泣いたこともあった。19歳の時にお見合いをして、20歳の時昭和43年に結婚した。相手は、マグロ船に乗っていた。結婚して1年は、沖の島に帰ってきて、親元で暮らしていた。それから、マグロを水揚する神奈川県の三崎に引っ越した。

　昭和49年に3男が生まれた。その時には、上の子たちを見てくれる人もいないので、神奈川から沖の島に帰ってきて、親元で子どもたちを預かってもらって、県立病院で産んだ。1か月くらい沖の島で暮らして、また神奈川に戻った。

　主人が、マグロ船を降りる昭和50年ころまで暮らして、その後、宿毛市藻津に引っ越した。藻津にはおばさんがいたので、家を借りて暮らし始めた。主人は、ハマチの養殖や貨物船での仕事などをしていた。平成元年、私が42歳の時に主人は体の調子が悪くなって、脳こうそくで倒れた。それから社会復帰できず、平成27年に亡くなった。家では面倒を見きれなくて、27年間病院と施設とを行ったり来たりしていた。

　お店は、平成元年の11月16日に開店した。もともとは大井田病院からみて村上眼科を右に曲がると真丁商店街の方に続く三差路の寿司屋の隣のビルで24年間営業した。その後、宿毛印刷の並びに移転して、現在3年目。お店の名前は、沖の島の海を想いださせるような名前にしようかと思ったが、よい名前にならず、歌があって花がある名前を考えて、さざんか、と名付けた。あと5年は頑張って店を続けようと思っている。

## （宿毛湾沿岸域‐宇須々木）「宇須々木の旧海軍基地」

宇須々木公民館前に設置されている「宇須々木の旧海軍基地」という宿毛市教育委員会設置の案内板に記載の内容を記載する。

----------

大艦隊の停泊が可能な宿毛湾には、大正10（1922）年に戦艦長門を旗艦とする艦隊が寄港して以降、昭和17（1942）年まで、次々と艦隊が姿を見せており、宇須々木が訓練、休養を支える基地として活用された。

宿毛湾沖はワシントン軍縮会議により、廃艦となった戦艦土佐を沈下させたり、戦艦大和が沖の島ー鵜来島鵜来島間を公式航行試験を行ったことでも知られている。

この宇須々木に、常駐の基地が設置されたのは、昭和8年頃で、兵舎が2棟でき、航空隊が配置された時期もあったが、太平洋戦争が激化する中で、昭和20年3月、第21突撃隊の特攻基地本部となった。

第21突撃隊は、越浦（土佐清水市）、泊浦、柏島（大月町）などにも派遣隊を置き、特攻用の震洋が配備された。さらに、戦況の推移に伴い、豊後水道全域を指揮する、第8特攻隊の司令部も大分県佐伯から移転した。終戦時、宇須々木は、須崎の第23突撃隊、佐伯の第24突撃隊も指揮下に置く重要な基地だった。

当時は、兵舎、桟橋、無線塔、病院など多くの施設があったが、現在も弾薬庫、貯油庫、飛行艇揚陸のスロープ、飛行艇の係留場、誘導灯、防空壕などの遺構が残り、戦争をいまに伝えている。（遺構に許可なく立ち入りはできません。）現在の宇須々木公民館は兵舎跡に位置する。

----------

## （宿毛湾沿岸域‐宇須々木・藻津）20171222\_増田卓生さんの話

　昭和29年生まれ。昭和55年生まれの息子がいる。藻津で生まれ育った。小学校の頃には、宇須々木に兵所の跡が残っていた。兵所跡は昭和39年ごろ、デンプンの加工場の会社が入所していたが、その後、芋ケンピの会社に変わった。しかし、ある時、火事があって焼けてしまって、払い下げられた。

　宇須々木港には、基地があったので米軍のグラマン戦闘機が来て、機銃掃射を受けたこともあったと大人から聞いて育った。

　宇須々木が海軍の基地だったのは、遠浅だが、すぐに水深が深くなって、磯や碆（はえ）がなくて、浜だったから。なので、かつて戦艦大和も寄港していた。

子どもの頃には自衛艦が何泊も停泊していて、大人と一緒に見に行ったりもした。

　家は、養殖を手掛けていた。養殖を継いでやっていたが、平成8年に不況で倒産。他に勤めたりして、6年くらい前からフィッシング吉村の筏や磯への渡船を手伝ったりしている。

　生まれたときには、藻津では、おジャコを炊いたり、干物つくったり海産物加工をする人が多かった。アジやウルメ、キビナゴなど魚がいろいろと沢山とれた。

　養殖ハマチは、もともと、自分のおじさんにあたる吉村ハルミという人が、香川で勉強してきて宿毛で始めたのが最初だった。入り江を金網で閉じて網を囲いして浮子式で始めた。魚は、刺網で獲って、出荷していた。餌は、手やりで与えていて、手を叩くと餌の時間だとわかって魚が集まってきていた。ハマチが始まる前は、みんな真珠をやっていた。

　養殖のいけすは、もともとはオカ（岸壁）のすぐ近くで飼っていたが、潮の流れがある方がよく育つので、宿毛湾では一番最初に沖出しした。それにあわせて、養殖の方法を、10m×10mの沈下式（海の中に網を閉めて沈めておいて、餌を与える時にだけ網をあける方法）から、15m×15mの浮子式（常に網をオープンにしている、フロート式ともいう）に変わった。それから、監視船が毎晩出て、密漁などがないようにしていた。

　沖出しして、成長はよくなったが、生餌の値段がかなり上下するし、ハマチの値段も上下するので、経営は難しかった。モイストやEPは薬の配合が簡単にできた。生餌に比べ、無駄になる分が少なかったので、みんな切り替えは早かった。

養殖の餌が生餌から船上モイストに変わったのは、平成になってから、平成5年ころだったように思う。モイスト船は、3,000万円から4,000万円はしたが、ほぼみんなモイストに切り替えた。

　ここ10年くらいはEP（乾燥ペレット）が主流になってきた。EPを与える船はあまりお金かからなかった。

　　平成6年、稚魚の値段が高く、平成7年に病気が蔓延して、10万匹いたところが、6割は死んで、4割しか出荷できず、自分の会社が倒産した。いまは、1尾ずつワクチンを打つので、死ぬ率が大幅に減った。

　昭和30年代からずっとハマチだが、ここ10年くらいはシマアジの養殖も始まって、増えている。宿毛湾は他の地域に比べて、よい漁場で成長がよかった。大きな漁場や業者だと、1日100万円とか200万円とかの餌代をかけていた。ただ、毎日餌を与えるわけではなく、業者によって異なるが1週間に5日とかだった。1日30万円として、1週間で150万円。4月から5月に10cm30gくらいのモジャコを入れて、その年の冬には2.5kgほどになり、次の年の冬には4kgになった。温かく成長の良い宿毛湾で、瀬戸内海の業者の魚を預かって、越冬させたりするビジネスもあった。

　桐島と大藤島（おとうしま）の間のいけすでは、香川の企業が入ってトラフグの養殖をしている。20以上の小割があって、小割1つあたり、3万匹は入っている。

　宿毛と大月の漁協が、すくも湾漁協に合併されたとき、藻津漁協はいち早く合併しないことを決めて、合併協議に、初めから参加しなかった。藻津漁協は、当時黒字で必要な設備投資も自分たちで賄うことができていたが、他の漁協は赤字だったり、漁協幹部が横領まがいのことをしたり、使い込んだりしていることも知っていた。県からの合併するようにという指導もあったが、独自路線を貫いて今に至っている。しかし、いつかはすくも湾漁協に合併するときが来るように感じている。

## （宿毛湾沿岸‐宇須々木・片島）20171220\_宿毛歴史館矢木館長の話

明治20年に林有造が宿毛‐片島間に道をつける以前は、物流の拠点となる港は現在の坂ノ下にあり、小筑紫方面のモノは全て坂ノ下に集まっていた。当時は、現在の四季の丘の入り口から宿毛駅、松田川橋にかけてのラインが海岸線であり、このラインより西側は海であった。

旧海軍の基地があった宇須々木は、海が深かったため、そこに艦隊が停泊し、小船で片島まで来ていた。次第に、艦隊停泊地に近い宇須々木が軍港として開発された。呉で作った軍艦は、全て宇須々木で検査し、宿毛湾・沖の島・鵜来島界隈で試験航海をしている。そのため、歴代の大将は宿毛湾に停泊し、片島を訪れている。宿毛では補給と休憩が目的なので、片島に遊びに繰り出していた。片島の兵頭商店が海軍御用達の商人だった。輸送はみんな船だった。昭和30年ごろまで沿岸部の人たちの主要な移動手段は船だった。

## （宿毛湾沿岸‐池島）20170822\_マリンジャパン武内専務の話

　5時40分、池島新港到着。武内重喜専務取締役の案内で、養殖ハマチと養殖マダイの水揚げ、活魚車への積み込みの様子を視察した。

　魚を新鮮な状態で運ぶため、昔は氷を打って調整していた。しかし、最新の活魚運搬車は、いけすの下にクーラーがついていて、自分で温度調整が可能。宿毛湾の水温は夏は30度弱、通年平均約21度くらい。輸送するときは、16度くらいまで温度を下げて魚を暴れさせず、なるべく余計な酸素を使わないようにしている。ケースは魚の大きさで仕切りをして、2,000～3,000尾／日、1年では200万尾を出荷する。ハマチは、4~5月にもじゃこ（稚魚）を入れて、翌年の5~6月以降、丸一年たってから出荷する。マダイの場合は丸2年育てる。病気や状態が悪いものは、活魚運搬車に積み込むケースの仕切りに入れるときに、目視確認して選別する。状態が悪いものは、市場では100円/尾とかになってしまうが、加工して出せば関係ない。頸動脈を一撃で仕留めて氷水で血抜きをすることで、身質を維持できる。

　マダイの場合は、5月ごろに13cmの稚魚を入れて、1年で2kg、2年で3kgまで育てる。魚の値段は数か月ごとに値が動く。全国で入れた尾数が少ないと高くなり、多いと安くなる。餌を工夫して、短期間で育てる。価格は生産者が決められないので、コストをカットして競争力を高めるよう工夫している。

　養殖の網は、水産庁許可で綱の枠を設置したもので、それを借りる形になる。発泡スチロールの浮きをつけた鉄枠を網枠まで運び、網枠と鉄枠を固定する。鉄枠の中に魚を入れておく網を取り付ける。台風の時期になると網の口を閉めて、1m水中に沈める。鉄枠や自動給餌機は撤去する。網の大きさは、12m×12m×12m。カキが付かないように特殊なペンキを使って網染めをしているが、半年ごとに網を変える必要がある。出荷までに3回することになる。新しい網を敷いてから、古い網を取り除く作業をする。自動給餌機での餌のやり方は、業者によって違う。餌を消化するときには、酸素濃度、水温、その他の条件をどうしたらいいか研究して工夫をしている。漁業規格が決められており、いけすを増やしたくても水産庁許可が必要で増やせない。1区画9万円/年、大きい区画だと27万円/年。例えば、マリンジャパンが養殖をやめることになったとして、宿毛の組合で枠をどうするか相談してその対応を決めることになる。1つの網の中に、1万2000尾程度が入っている。それだけたくさんいると、風邪をひいたり、病気になったりする魚もいて、注射したり、餌に薬を混ぜたり、死んだ魚は日々日々取り除いている。

　稚魚を年間で100万匹入れたら、全部にワクチンを打つ。夏は餌をバカ食いするが、成長はしない。秋以降は餌をあまり食べないが、成長はする。6月に産卵。がりがりになるが、1年目の産卵はあまり影響はない。2年目だと影響が出るので、産卵前に出荷する。出荷の時期も業者によってばらばら。魚の状態と市場での価格とお客様のニーズとを照らし合わせて決める。マリンジャパンでは通年で出荷している。20kgのエサ袋を1日で15~20袋与える。餌は、1日おきに与える。餌を食べている間は水面にばちゃばちゃと集まるが、餌を食べ終わると潜っていく。食べなくなるぎりぎりのところまで与える。餌づくりからメーカーと相談して進める。

## （宿毛湾沿岸‐田ノ浦）20170822\_与力水産の話

（吉村社長＠市場）

時代は輸入ではなく輸出。日本ブランドで勝負できる。ダイレクト販売で流通を変えて、ハマにお金を残すことができるようになった。片田舎の小さな会社だけど夢は大きい。来週からはベトナムに行く。

（有田取締役＠加工場）

　午前中に入札で落としたシイラ、ウツボはすべて買い手がついて行き先が決まっている。買い手の方の希望に合わせた一次加工をして出荷する。冷凍方法は、プロトン凍結。県内で2社のみ。電磁波を使って細胞を壊さないように冷凍できるが、1時間に30kg程度が限界で、速度は遅い。県内では液体凍結、窒素を使っているものがある。プロトン凍結は世界規模で評価されている技術だが、その分ものすごく高い。プロトン凍結した後は、マイナス30度の冷凍庫に入れる。継続して取引いただいている商品は、在庫を切らさないように常に作り続けている。殺菌水を使って菌を殺し、金属探知機を通してから凍らせる。何度も探知機で引っかかる場合には、出荷をしない。

　魚屋だが、柑橘類や野菜も取引している。高知県の魚と野菜セットでという要望に応えている。仲買業者の1つでしかないが、加工場も持っている。いままでは現状打破を目的に続けてきた。一次産業が衰退すれば、作り手がいなくなる。しかし、一次産業では収入が上がらないので生活できない。システムがおかしく、いまの時代に合っていない。流通にも問題がある。このままではだめだ！ということで話し合って創業したのがこの会社。世の中で1000円のものを1000円で売るのは当たり前。加工とか価値を勉強した。特に料理人の声を聞いた。まず、血抜き。コロダイ800円/kgが1300円/kgで買ってもらえるようになった。最初、馬鹿にされたり、いやがらせされたりした。いまは圧倒的に多くの魚を入札して落としている。消費地市場ではなく消費地のレストランなどに直接出す。関西なら翌日の朝、関東なら翌日の午後に届けられる。ここまで来るのに10年かかった。仲買は買って売って差額を取るのが儲け。高知県産の魚の根が高くなって大阪でも品薄になっている。やり方を変えると何かを失うことになる。漁師の後継者もできてきた。若い人がまだ少ない。昨日、与力水産を見学することを目的にタイからお客様が4人来た。海外では日本の魚の評価が高まっている。メジャーな魚は人気がある。築地よりも割高に思うかもしれないけれども、よい品質のものを出していける。お客様とのやり取りは、レスを早くする。信用にかかわるところに気を遣う。JETRO、シーフードショーを兼ねたイベントに東京、来週から吉村社長はベトナムへ。東北の魚への忌避感はいまだあり、産地証明を求められることもある。全国の取引先が毎月たくさん来てくれる。先週は新阪急ホテルの元総料理長が来てくれた。期待されている分、商品の確保には血眼。いまはやっていてよかったと思う。やめていたら、いまはなかった。

　松山のある地区から「地域活性したいけど、アドバイスをもらえないか？」と相談に来た。各地で「活性化」の意味が違うので、それぞれの答えがあると思う。なんでもいいけど、ここに来てほしい。直接体験してほしい。自分たちも勉強しながらやってきた。自慢ではないが、補助金は一切入っていない。銀行から借りて創業した。県も背中を押してくれている。実際、やってみないとわからないことが多い。苦い思いをしても経験することに価値がある。ぜひ定置網に乗ってみてもらいたい。とれたての魚が食べられる。今朝はサメの水揚げが多かった。それだけの漁場があり、魚がいる。

　輸送はヤマト運輸を使っている。漁師の方の名前や〆方までわかる。「山本さんが神経締めした魚です」といえるのが強み。東南アジアでは見直されてきている。例えば、エビスダイ。知られていないけど、水揚げがあるので売り出し中。宿毛に来たら、スマ、イギス、セミエビなど食べてほしい。宿毛湾のイギスは宮廷晩餐会でも提供され、天皇陛下からおいしかったとお言葉をもらったこともある。

## （宿毛湾沿岸‐栄喜）20170426\_河原海産河原優さんの話

「じゃこください」といったとき、何を指すか。地域性がある。四万十市ではきびなごのこと。宿毛ではカタクチイワシ。他ではいろいろのケースがある。高知・四国のだし事情は面白い。いままで、きびなごといえば、鹿児島とか宿毛とかだったが、愛媛の伊方原発界隈でも、排水で海水温度が上がってきびなごが取れるようになったらしい。

2昼夜乾燥させる。1日目は20度。2日目は23度。すると、こういう状態になる。

自分で漁に出て、小魚をとって、自分で漁協の市場に持っていって、自分で入札入れて買う。ちゃんと市場で価値をつけることで、公平にしている。漁での売り上げのうち、20%分を乗組員に配当する。夜船を出して、カツオのエサもとる。カツオは生きたエサしか食べない。

2500円/kgで卸して、3500円/kgで小売りする。

漁師にとって資源保護はいや。うる話ばかりでる。ただでさえ低い収入に直結する。

（優さんが）大学を出たとき、栄喜では7m×7mのマスの中にハマチが沢山。ハマチブームだった。卒業して、即帰ってきた。車買ってやると言われたのもある。しばらくすると、生産過剰で養殖がだめになった。網漁に移った。マイワシの子（コベラ）が押し寄せて、網で儲かった。毎日、何船も入ってきた。

網と加工場を平成15年に受け継いだ。栄喜では2~3件。すくも湾漁協と市場の合併の時に市場といざこざがあったが、いまはない。自由販売で、昔は片島に持っていっていた。

売り手市場にするためには、うる先はいくつかあった方がいい。深浦片島とか。漁協が負債を抱えて統合したので、みんなひとくくりにされた。販売の自由がなくなった。ほんとうは、深浦とくっついた方がいいと思っている。高知県のJFより深浦の方がよい。深浦には網漁があり似ている。（高知県下でまき網があるのは宿毛だけ）。深浦のマグロは上位になったことがあり、生きた小魚が大量にいる。それを宿毛が供給している。

海は、常に変わっている。言い伝えはあるけれど、全く通用しなくなっている。漁獲高は変わらないが、量は減った。

後継者対策として、船や網の話がよくでるが、資源が残っていないと意味がない。資源保護をしてないのに後継者対策は意味がない。継ぐ人の話をもっと聞かないと。漁民の豊かさは船を見ればわかる。4.78トン。船体4.5トン、600万円、150馬力で500万円、発電機など200万円、ソナーなど200万円。新しくすると多く獲れるには獲れるが、同じ取れ高で収入・効率を上げるように設備を入れたい。むしろ、漁民の後継者を減らして今の漁民の収入アップしたほうが良い。売り手市場の漁民になりたい。

息子夫婦はいつでも帰ってくるといっているが、帰ってくるなと言っている。本当は継いでほしいし、息子（36歳）も継ぎたい。ただ、資金面でむつかしい。決まった金額をもらって、安定して生活してほしい。公務員の老後と漁業者の老後。全く違う。現役での差は努力や能力の差もあるので、ある程度許容できるが、老後はある程度平等がいい。日本の食卓を支え続けてきた漁民が、老後まで苦労するのは報われない。

アミ（漁業での収入）が良いとき、オカ（加工したじゃこの収入）がよいとき、両方ある。最近はオカの売上が悪い。アミで収入があるので、オカでいりこ（選別するスタッフ）を雇える。夜23時から漁に出て、じゃこを煮て、ガスの配達してる。寝ないで仕事をしている。ゴルフお酒タバコのためにがんばる。笑

じゃこを仕分けするときに、粉が出たり、くずがでたりするが、加工場で出たものは全てゴミにはなっていない。床に落ちたじゃこや粉は鶏の餌にしたり、肥料にしたりしている。

若い人は離乳食にじゃこの粉を使ってくれている。塩分減らして、水にこだわって、添加物を使わずに日持ちするように作っている。病院食にも使ってくれている。

## （宿毛湾沿岸‐栄喜）20170823\_河原海産河原優さんの話

いさり火を３～４ｍにおろして、母船の網で魚を囲んで、きんちゃく（網）の下を閉じる。漁場までの距離は岸から見えるところで漁をする。小型のまき網でとると、いろいろな魚が混ざって水揚げされる。きびなご、かたくち、うるめ、いか、など。主な漁は、15人くらい規模の中型まき網と夫婦二人くらいの規模の小型巻き網。小型は年金もらいながらほそぼそと続けているような漁業者がほとんどで、宿毛湾で現在20頭の船が残っている。日没から日の出までが漁の許可されている時間。きんちゃく網は母船で落としていって、小さい船外機でとる。

ここは、小規模の工場で、最大でも5人規模。大きなロットでの注文は来ても、獲れたときに出荷するようになるので、お客様をお待たせすることになってしまう。気に入ってくれているお客さんに直接届けることが理想だと思っている。ロットを重視するようになると数揃えることが重要になるが、自分たちは見た目より味にこだわってる。宿毛駅で買ってくれたお客さんが、どこでも同じと思っていたが、個々のじゃこじゃなきゃ、と直接注文をもらった。うれしくて、やっていてよかったと思う。お客さんの半分はリピーターだと思う。

加工場は、昭和50年代に、父が始めた。地の利を生かして鮮度の高い魚を原料に煮干を作れるようになった。煮干しを作るためには、魚を炊く必要があるが、海水でから炊く方法と水に塩を入れて炊く方法とある。河原海産では、水に真塩を加えたもので炊いている。水には特にこだわって、軟水を使っている。水の中にもミネラル分は含まれており、それが水の硬さになる。軟水を使用することで、余分なもので魚本来の味を邪魔されずに魚のうまみを最大限引き出すことができる。

多くのちりめんじゃこには酸化防止剤や着色料、漂白などが一般的に使用されている。漂白されているちりめんじゃこは色がきれいな白。うちは、昔ながらの方法で塩以外の添加物を一切使用していない。そのため、ちりめんが少し黄色っぽく見えるのは素材そのものの色がでる。自分自身がたべて納得できないものは作りたくないし、子どもさんや妊婦さん、お年よりまで安心して食べてもらえるものを作ることを一番大切にしている。

茹で上がった魚は、乾燥作業もこだわって、天日干しをしているものもある。太陽と潮風により、おいしくなる。このとき、出来上がりの食感を考えて、乾燥時間を調整する。

きんちゃく網での稼ぎは完全配当制。乗組員3人でやっているが、燃料代と氷代を売上から経費として引いて、残りの40％を出資者である船主がとる。残りを乗組員の3人で等分する。だから、船主で乗組員もする自分は、経費を引いた残りの60％をとれることになる。売り上げは多い時で100万円を超えることが年に2～3回で、乗組員の配当は月に10～15万円で、月20万円を超えることもある。

浜（網）での稼ぎが良いときと丘（加工場）での稼ぎが良いときがあって、何とか生計を立てている。これがどちらかしかなければ、厳しかったと思う。

宿毛湾は台風の避難港になっている。風は吹くが、波は立たない。北向きの湾だから、防波堤は作らないし、要望も出ない。造ったら海岸の作業場がとられてしまう。台風などで死者が出たことはない。

## （宿毛湾沿岸‐片島） 20170822\_TATEDAGROUP立田昌敬さんの話

＋とさぶし１７号　http://tosabushi.com/archives/vol17/entry-282.html　から一部人名など補記

1982年生まれ35歳。

片島は離島の無人島だった。明治以降に入植、開発が進んだ。戦時中、日本海軍の出張所や専門の郵便局、その後の最盛期には税関、気象測候所等の官庁設備があった。四国西南地域で新しいものが最初に入ってくるのは片島。この狭い地域に、映画館、ディスコ、飲食店などの娯楽施設が多くあった。もともとの海岸線は現在のイートリエルのところまでだったが、だんだんと埋め立てられて、陸地が広がっていった。イートリエルのあたりは、90年前の埋め立て。ホテルマツヤ、まなべ旅館など、宿毛の事業者で片島発祥の会社は多い。かつては、片島が宿毛の経済の中心だった。

立田回漕店は、曾祖父・立田義衞が1924年に創業した宿毛桟橋株式会社が最初。

片島の港に貨物船が来て、積み下ろし、荷受けして、配達をする港湾運送業全般。大阪から豊後水道、宇和島沖を通って日用雑貨などを積んだ定期船が港に着くと、自社の桟橋から貨物を受け取り、倉庫で保管し、宿毛から近隣各地へ配送した。空になった船には木炭を詰めた俵を積み込み、阪神方面に出荷した。

　戦後は、パルプ材用の原木が主流になり、祖父・敬二が社長になった1951年頃からはセメントの輸送が増えた。多くの船が道路やダムなど工事がある度にセメントの粉を樽に入れ、周辺の港に運ぶ。しばらくすると船に材をそのまま〝ばら積み〟して運ぶことが増え、最盛期は１日に何十隻という専用の機帆船が大阪周辺に行き来していた。

　木炭は石油へ、木材は外材へ、日本の基幹産業が変化する一方、道路事情が改善されると、内航海運は陰りを見せるようになる。大阪からの定期船がなくなって、船の仕事がないときに陸送やクレーンの貸し出しのほか、宿毛に船が入るときの手続き全般を担う船舶代理店業なども手掛けるようになった。1974年、宿毛の船会社と合同で若宮汽船を創業。船と船員を所有し、内航船舶貸渡業として大手メーカーから国内輸送の請け負いを始めた。やがて立田グループとして港と船の両方を動かすようになった。

立田グループには、大きく４つの会社がある。

（株）立田回漕店は、現在、宿毛市で唯一の港湾運送、船舶代理店業者になった。昔は宿毛市内にも５社あった。大型の資材の運搬も手掛けており、大月の風車は、宿毛新港に荷揚げして、よそから大型のクレーンを借りてきて、運搬した。クレーン6台、トラック3台、粉体輸送車2台、フォークリフト2台を有している。

若宮汽船（株）は、積トン数ベースで、国内50位に入る規模。宇部興産海運、JFE物流といった国内有数の海運会社に船舶を貸し出している。太陽光発電事業、航空機リース業、不動産事業も行っている。石灰石専用船１隻、セメント専用船２隻、鋼材専用船１隻を所有している。石灰石専用船は国内で12隻しかない１万トン積。宇部、北九州、須崎、高知、北海道などの産地から関東の工場地帯へ輸送する。一般貨物に比べて、石灰石やセメント、鋼材は、公共事業にて必要になるため、不況に強い。景気がよければ民間が建物に投資するので必要になる。そのため、経営が安定しやすい。

K.T.S有限会社、資材販売、商社事業、業種品目を選ばず商品を販売、お客様の利便性第一でやっている。例えば、クレーンの爪とか、岸壁のクッション材とか、本体の事業やお客様の事業に関連する資材を取り扱っている。

（株）花菱は、不動産業、大阪、京都にワンルームマンションと貸しビルを所有している。

いつも思うことは、海、船、港について知ってもらいたいということ。

内航海運業は、暮らしを支えている、生活用品の輸送の44.1％の輸送は船。外国から基地に入って、船であちこちの拠点へ。若い人たちは、「船乗りになりたい」と思うことなく、大人になっている。従業者が2.5万人いて、半数が50歳以上。生活に必要な物資を船で運べない時代が10年以内に来る。1トンのものを運ぶためにかかるエネルギーは小さいし、CO2の排出も少ない。1トンの石灰を運ぶことを考えたとき、トラックだと宿毛から東京まで2日間で1000台だから、のべ2000人が必要だが、船であれば1トンの石灰船は法律で9人の乗組員で運べると定められている。研修生を入れても10人。効率が良い。今後のモーダルシフトを考えると、船の活用は重要。重要港湾を持つ宿毛の役割は大きい。陸路を基本に考えると宿毛は返球の地だが、海を基準に考えると、世界で一番船が混んでいる瀬戸内に隣接して、太平洋に開けている高知県は、ハイウェイに面しているようなもの。海から世界に出ていくジャンクションとして宿毛を育てていきたい。

## （宿毛湾沿岸‐片島） 20171216\_橋本邦彦さんの話

昭和10年、大阪生まれ。4男として生まれた。昭和23年から片島に住みはじめた。新制中学になった時、宿毛で中学に進学した。

鹽竈神社の由緒の碑は、事実と逆のことを書いている。由緒の碑には「本宮は高知一宮の土佐神社である・・・この大神を宿毛本城山に御分神致し」とあるが、違う。一宮神社は明治時代に神社制度が変わって宗教法人になった。郷々であった神社を県の単位で、土佐神社に一つにまとめることという合祭の令があったが、宿毛の各村では相談し、各村の神社の総鎮守神としてだったらよいということになって、宿毛の水道局のところの八坂神社のところに祀っていたものを宿毛城のところに移し、その後、片島のいまの一宮神社のところに移ってきた。

伊賀さんが領主で、林有造は家臣であったが、だんだん林有造の方が偉くなり、鹽竈神社の御分神を連れてきた。鹽竈神社の祭神は、塩の神で、武術の神でもある。明治23年に第1回帝国議会選挙に臨むにあたり不退転の決意を示すために、陸奥一宮鹽竈神社の御分神を勧請しを片島の自分の山に祀った。いまの文教センターの前の林邸を立てたのも同じ年のこと。譲治の安産祈願のためのためでもあった。

林有造は、防潮堤を作って、大島に行く途中にて製塩を始めた。

　宿毛のまちを背にして片島へ向かう道には、明治20年に林有造が造った宿毛から片島への防波堤、排水溝、道路があった。林有造は、兄、岩村通俊が北海道長官の時に、小樽築港事業に関与しており、小樽での事業をそりを使うことで人件費を節約し、利益を残すことができたので、その金で明治22年に他の出資者に金を返し、林新田をすべて私有地とした。製塩は当時としては規模が大きく、50人くらい雇っていたという。（橋本さんが）中学生の頃、林とは関係ないが、木下さんという方が、まだ製塩をやっていた。滝本製材所が近くにあって、木材を製材をした後のおがくずで海水を焚いて製塩をしていた。第一林産も片島で製材をやっていた。いまの、うみかぜ公園と片島公民館の間の横断歩道のところに水門があった。

戦前の片島は、軍港でひらけたが、それまでは大島字片島だった。江戸時代には、伊賀家の直轄地で、船着き場のある別荘で御鳥場などもあったから、何人たりとも立ち入り禁止だった。きれいな浜だったそうだが、入植することも許されなかった。

片島から大島へ続く道は、少なくとも3回は埋め立てられている。もともと、片島は小さな島であったが、だんだんと埋め立てられて陸地が増えた。戦前には、遊郭がずいぶんあった。華やいだ町だった。宿毛から片島の道は全て2車線のコンクリート造りだった。これはとても珍しいことであった。軍用だったから実現した。昭和23年頃、宿毛から片島までのコンクリートの2車線の道から南側に2軒分入ったくらいのところが当時の海岸線だった。崩れかけた岸壁だった。現在の片島から大島までの道は、いまよりも片島の山際であった。阪神築港（株）が、大島と片島の間の砂の湾にて防波堤を造っておいて、サンドポンプを用いて、水と砂をバキュームして、砂で埋め立てた。

現在の農協の選果場のあたりには、青いワタリガニがたくさんいた。汽水域で水がきれいだった。一島は景色もきれいだった。トンゴロイワシがたくさんいた。エバ、フカ、ヒョウダイとかがいて、フカに追われてトンゴロイワシが浜に打ち上げられたりしていた。咸陽島にキリアイ（チャンバラガイ）もたくさんいた。

かつて、神社のフェンスは立派な玉垣だった。裏山を整地したときに土止めにしているのが出てきたので、びっくりして、掘り返して、一部を復元した。1つ1つ石工が手作業で作っていて、寄付者の名前が書かれていた。後藤環爾も30円を寄付している。ご神体は昔からのものが残っている。神社では、2月3日に厄除け、輪くぐりをする。獅子舞は秋祭りで披露される。大みそかの12月31日に23:30頃から獅子舞が舞われ、ちょうど日付が変わったところで巫女さんの踊りが奉納される。昔からそういう風習になっていて、片島では日付が変わる頃に一宮鹽竈神社を参拝する。

終戦後、海軍ゆかりの人がプロペラを奉納したこともあった。林譲治が議長になった時、菊の御紋のついた杯が配られた。林遉（さすが）市長からもらったことがある。

## （宿毛湾沿岸‐片島）20171220\_笹木保さんの話

サイクル&マリンスポーツササキの笹木さん、昭和10年、片島生まれ。大島小学校卒業。

大島の庄屋の小野家は、小野造船を営んでいた。大字大島のなかに、字片島、池島などが含まれていた。片島のあたりの海水の水位はだんだん上がってきている。大島に橋が架かるまでは、船で渡しをしていた。いまの橋はだいぶ補強されている。

片島の山の上に海軍がいた。警備船が4隻は片島に常駐していた。陸軍の中部48部隊もいた。防空壕が2つあって、終戦後にそこに武器を投げ込んで爆破した。

片島の旧道は生まれたときにはあった。新道（いまの公民館から郵便局、中野海産の前を通る道）は小1の時にはあった。そのころ、おけや（遊郭）が9件、旅館も9件あった。軍が入ってくると、その時だけ、にわかの食堂が道沿いに開いて、にぎわった。

連合艦隊の演習後は、宿毛湾沖に停泊し、ランチ（原動機つきの小艇）で片島に入港してきた。ランチの大きさは、10～12mくらいの大きさで、数十人が一度に乗ってこれた。夜はランチが迎えに来て、引き上げていった。小学校も軍隊式で、厳しかった。ぼっけん（木剣）は、小3からしか持てなかった。

父親は、山下鉄工所（漁協事務所のまこと食堂よりにある山下さんちの昔の家の裏）で働いていた。戦後にやめて、自分なりに闇市で、大阪の方からの商品を売ったりしてから、自転車屋になった。当時、片島に自転車屋は5件あった。幡西自転車連絡会という組合があって、宿毛三原大月に33件の自転車屋があった。開業したころは、タイヤも配給制で、タイヤ1本4000～5000円はした。母親は戦前から旅館みかどやを経営していた。他に旅館は「みはらしや」、「みさかや（いまの清家旅館）」などがあった。

小学校5，6年の頃には、丸三座というベンチ付きの白黒の映画館が、現在の河内山商会の手前、加藤のタバコ屋の向かいの駐車場になっているあたりにあった。その後、高村の酒屋の駐車場のところに片島劇場ができて、散髪屋の裏に内燃機屋が大劇を作った。映画館が3件あった。

戦前にはタカヒロジュウゾウという、おけやの元締めがいて、年に2回は大相撲を呼んで興行していた。人気があった前田山とかを連れてきて、荒稼ぎしていた。当時は林有造の銅像の前で銅像相撲を毎年実施しており、ものすごく多くのお客さんでにぎわった。

　片島の港は、だんだんと埋め立てられて、狭くなった。金澤旅館～肉屋のデバリの前の道が海岸線であった。

## （宿毛湾沿岸域‐片島）20171221津野幸恵さんの話

イートリエル津野幸恵さんの話。

12/16から3月までシラスウナギが漁がある。松田川の両サイドの河口と海でとる。明かりをつけて、船からも獲れるし、港からも獲れる。満潮時くらいがよくとれる時期なので、そのころに片島や宿毛大橋の下、福良とかあちこちで獲れる。小さい船の漁師さんはそれが結構大きな収入になる。捕る権利は、松田川漁協と宿毛湾漁協、福良川は福良の尾崎さんが責任者で漁業権を管理している。採る場所によって権利が必要。宿毛の冬の風物詩。捕ったシラスウナギはある程度の量がたまると、買い手が買い付けに来る。港を広げたり、エルニーニョ現象のあおりを受けたりして、獲れなくなってきている。松田川に入ってくる量は年々減っていて、入ってくるタイミングも遅くなっている。

## （宿毛湾沿岸域‐片島・大島）20171222\_山口しずかさんの話

　68歳。大島生まれ、片島に45年住んでいる。親は漁師で、網も釣りもいろいろな漁をやっていた。エビ網とかもやっていた。中野海産で30年、いまも勤めている。車乗らないし、家近いし、子どもが小さかったので、何かあった時、すっと帰れるのでよかった。人を募集しているときに雇ってもらった。ジャコを炊いたり、干物をつくったり、何でもやってきた。煮干しづくりは、四角いせいろに市場から持ってきたおけの中の魚を掬って、うっすらと魚を載せて、何枚もせいろを重ねて窯に入れて茹でてから釜揚げして干したり、乾燥させたりする。茹でる時間は魚の種類によって異なっている。

　大島には、春日神社とハイタカ神社がある。春日神社のお祭り、というのはなくて、春にみんなで集まって、花見酒をする。電気もつけてきれい。春日神社までの道もみんなで草刈りしたりしていた。

　春と秋はハイタカ神社のお祭りがあった。いまは、神輿を船に乗せるだけだが、小学生の頃は、落しあいこをしていた。神輿を担ぐ人と、獅子舞の人は落とされないし、水に濡れてはいけないが、それ以外の人は落としたり落されたりした。別に、落とす役割の人がいるわけではないが、神輿や獅子ではない人は落ちる覚悟で、着替えを用意していた。神輿を乗せた船には、女は乗せてもらえなかった。お祭りの時にはそこそこの大きさの船を2杯つなげて、それを引っ張る船も出ていた。

大島の神輿はこのあたりでは一番大きい。神輿は20人くらいで担いでいた。船から戻ったら大島公民館の前に、神輿を据える台座を準備してあって、そこに置いた。お神輿にお賽銭をして、お神輿の下をくぐると、健康に良いと言われていて、みんなでくぐった。もともとのお祭りは、旧暦の10月17日だったので、とても寒かったし、海に落ちたりすると寒そうだった。いまは普通の10月の第3日曜日とかにやっている。

大島で、小学生の頃、巫女をやったことがある。巫女は、衣装を着て、お神輿の後をついて歩いたり、お宮に上がって役者（担ぎ手のこと）さんにお酌して回ったりした。巫女になれるのは、生理が来る前の女の子だけだった。いまは、そんなうるさいことは言われない。

　獅子舞は、大島の各戸を1件1件まわっていた。神輿の担ぎ手は、若手というわけではなく、40代から60代くらいで、担ぐことを希望した人が担いでいた。家柄とか、担ぐための条件が決まっていたわけではなかったと思う。「親も担いだけん、おらもやろうかにゃ」というような人が担いでいた。もちろん、男しか担げなかった。

## （宿毛湾沿岸‐高砂）20171201\_パシフィックマリン川田さん

ダイビングでは、宿毛の沖の島・鵜来島の海は、外洋ではあるが、比較的安全といえる。ケーソンを打ってあり、アンカリングしないように係留用のブイもあり、毎年レジャー組合にてメンテナンスをして、ロープをチェックして老朽化していれば替えたりもしている。

沖の島では昔から渡船業者があって、勝手にアンカリングされてしまい、海底の珊瑚が壊されたりして、問題になっていた。柏島は20年位前にダイビングムーブになってNHKの番組で海の中の写真が取り上げられたりもして、知られたスポットになっていた。柏島から沖の島・鵜来島は近いため、柏島から沖の島・鵜来島にきて勝手にダイビングなどをしている業者もいた。自分の海は自分で守らなければならないという気風が強まり、平成11年に沖の島海洋レジャー事業組合が発足した。

パシフィックマリンは、もともとは水中土木を請け負っていたが、1975年、いまから42年ほど前にレジャーとしてのダイビングを始めた。

私は20年前からここにいるが、20年前はもっと活気があった。スタイルも変わりつつある。いまは、おとなしい。泳げなくて、下手な人が多い。写真を撮りに入るだけ。昔はもっと積極的なダイバーが多かった。

（以下、ホームページの内容を掲載）

1975年10月創業。

高知県宿毛市にある現地型のダイビングプロショップ パシフィックマリンです。沖の島ダイビングにおけるパイオニア的存在のオーナーが営むお店です。創業以来『安全に楽しく潜る』をモットーにお客様のダイビング経験に応じた沖の島ダイビングを提供しています。

並びにライセンス取得コース・体験ダイビングなど開催しています。

営業時間8：30～18：00（年中無休）

営業内容

●沖の島 日帰りダイビング（フルシーズン）

●ダイビングライセンス講習

●ウェットスーツ製造・販売（オリジナル)

●ダイビング用品のメンテナンス

●器材販売・レンタル

●タンクレンタル・チャージ

●ダイビングツアー(鹿児島・沖縄離島　年一回）

●水中作業・撮影・調査全般（プロのお仕事）

## （宿毛湾沿岸‐すくも湾漁協）20170426\_すくも湾漁協河原宜人参事のお話

市場には、産地市場と消費地市場がある。産地市場とは、漁業者が水揚げした魚の卸売りのため、水揚地において開設される市場。一方、消費地市場とは、水産物の卸売りを行うため、消費地において開設される市場。高知県には大きな産地市場はなくて、平成17年にすくも湾漁協中央市場がはじめてできた。

特に、まき網（地元では「きんちゃく」ともいう）漁法は宿毛湾のみで許されている。他の地域では漁をできない。あじ、さば、きびなご、うるめなどを大量に水揚げできる。いままで、対応できる港が県内になくて、漁業者は県外に陸揚げしていたが、それでは地元のためにならない。100トンも200トンも獲る。朝一番に入札が行われる。

宿毛・大月の漁獲の９９％はこの市場に水揚げされる。それまでは、浦々に市場があった。市場に卸すのは、価格競争を働かせて、売値を上げようとすることが目的。そのためには、魚の水揚げ量を増やして、入札に参加する仲買の数を増やして、価格競争をしてもらう必要がある。平成17年に、宿毛・大月の小規模の漁協を合併してできたのがいまのすくも湾漁協。漁民に利益を還元できるようにすることを目指している。

入札は1日に3回ある。朝のまき網の入札が6時30分ごろ、その後10時ごろからは定置網の入札をして、16時ごろからは釣り。朝から晩まで市場では水揚げがされている。船で直接水揚げに来る漁業者もいるし、大月からはそれぞれの港で水揚げして、トラックで運んでくることもある。中型まき網は年間1.5万トン、15~16億円になる。アジサバイワシが70%でトン当たり50円程度。じゃこを獲る小型まき網は家族経営が多い。

　すくも湾漁協では、築地市場などで市場というとイメージしやすい「せり」方式ではなく「入札」方式をとっている。「せり」は、買いたい人がいっぱいいる時に有利。高くなるが、ほしい人がいないと安くなってしまう。「入札」はほしい人がいるかどうかわからないときに、有利。札入れして落とした2番手の金額がわからないので、ほしい人は落とせる値段を入れるため、結果的に高く買ってくれる。

　すくも湾漁協中央市場は、衛生に気を付けた市場で、高度衛生管理型市場。いままでは施設内への車の侵入ができたりしたが、この市場ではやめた。1.5度傾斜で30mはば、構造的には入れないようになっている。コンテナを持ち上げるリフトもガソリン・ディーゼルはやめた。全て電気式。排気ガスが出ないからよい。市場内では殺菌された水しか使っていない。以前はくみ上げた海水だった。殺菌方法は、UV（紫外線）と塩素の2種類。菌が増えることで魚は腐食する。殺菌された水を使うとともに、冷やすことで菌の繁殖を抑える。水の種類は4種類用意している。水道水、UV殺菌海水、塩素殺菌海水、UV殺菌氷海水の４つ。

【質疑応答】

Q.貝はどうか？

→かき、長太郎はあまりない。せい、きりあいはある。

Q.買い手は？

→消費地市場の卸や小売り、ホテル、地元の飲食店など。小型まき網は地元で消費、中型まき網は主に養殖のエサになる。愛媛の会社などが買う。

Q.売れ残りは？

→基本的にでない。売れなかったものは漁師に戻す。鮮度が悪いものと毒があるもののパターンがある。

Q.仲買の資格は？

→200万円をJFマリンバンクに預けてもらう。与信管理のため。中型まき網のアジを大量に購入するといった場合には、400万円となる。例えば、八幡浜は古い市場で、大きい。扱い額で、50~70億円の水揚げがある。仲買人が組合を作っていて、既存の100社とかで基本的に新規参入を認めていない運用をしていると聞いた。すくも湾漁協では、与信ができれば、意欲あれば、市外の業者や極端な話外国の企業でも受け入れてやる。そのため、活力が出てきている実感がある。

Q.ブランドは？

→ホテルなどから求められたら生産地照明を出したりもする。

Q.珍しい魚は？

→網で死んだクジラ。さんまは宿毛では珍しいが、状態があまりよくないので高値が付くことはない。

Q.若い人は多いか？

→職員は若い。仲買人も後継者が増えて若くなってきた。漁協の統合前までは、自分の代で終わり、、、と考えていた方が多かったが、統合したことでビジネスチャンスが拡大した。もともと10億円規模が、取扱額が増えてきて、儲け額も増えている。

Q.漁業権とは？

→海はみんなのもの。漁業権は国が海からの便益を守り維持するために認めている仕組み。海岸から1~2㎞の共同漁業権は、漁法を決めてJFが県から認められて管理をしている。参入にはJFの許可がいる。養殖など県に依頼して認可をとる区画漁業権、安全に安定したタンパク供給を目的としている。

Q.すくも湾漁協の扱い額は？

→魚の水揚げは15~16億、珊瑚10億、養殖150億円。養殖は、はまち、ぶり、たい、かんぱち、に加えてすくも湾漁協ではマグロを進めている。マグロの生育については宿毛湾は大きくなるスピードが速く、身質が良く、優秀といわれている。日本で3位になっている。最近は、近畿大学で完全養殖が完成し、世界的には天然物は認められなくなっている。

　養殖漁業全体について、魚離れが進み、過剰生産気味であるため、養殖量を減らす方針が水産庁から出ている。しかし、すくも湾漁協では減らすつもりはない。国内に出す量は減らし、海外に出す分を増やそうとしている。昨年は香港のシーフードショーに行った。

Q.施設の変化については？

→製氷施設を新設し、１日６０トンの氷を作っている。いままでは、３０トンの中型巻き網の漁獲は手作業で仕分けしていたが、機械化した。大きさ順に、いわし→あじ→さばと仕分けされる。

いままでは、木箱をつかっていたが、木箱を廃止し、きれいなコンテナに統一。床に埋め込み式のスケールで重量を量れるようになった。

養殖の加工所も作った。フィレにする。いままでは、丸ごと送っていたが、3kgのブリの要らないところ（内蔵、ひれ、骨など）をとって、きれいにフィレにすると2kgになる。見だけ送れるようになって運賃が削減できた。

【加工所の説明】

養殖のブリをフィレに加工して真空パックして、出荷している。

関東便は朝10時に出す。翌日築地に並ぶ。例えば、10時に宿毛を出て、13時に松山空港で検査されて、17時に飛ぶと19時に羽田に着く。今進めているのは、その後、翌日4時に香港に飛ばして、10時にはお店に届けるルート。宿毛の立地だと日本に出すのも、海外に出すのも時間にそれほどの差はなくなっている。切り身1つ、東京だと1,500円、香港だと2,500円、3,000円でもほしい人がいる。日本人は、この10〜15年の間に所得が減っている。世界で17番目くらいになっている。もっと金持ちのところに直接届けられれば、高く売っていくことができる。今日は260尾のブリをさばいた。そのくらいの量だとすぐ終わる。

## （宿毛湾沿岸‐養殖業）20171130\_バイオ科学販売　谷村様

ハマチのエサは、凍った生餌をクラッシャーで砕いて、船にためて、船に搭載したモイスト機で生餌、栄養剤、魚粉などを混ぜて、圧力をかけて管から押し出して、刃物でペレット状に切り出したものを風で飛ばして給餌する。これがモイストペレット（MP）。生餌のイワシだけでなく、魚粉、栄養剤を簡単に転化して均一に混ぜられるのでよい。イワシばかりだとビタミンB類が欠乏するので、生餌に比べて栄養価が高い。生餌は値段の上下があるし、大きな船や冷蔵庫が必要になるし、陸で餌を砕いたり、船で餌を混ぜたり、手間がかかる。生餌が昔はただ同然の価格だったが、かわってきた。いまはエクストルーデッドペレット（EP）がメイン。宿毛湾ではこの4，5年で一気にEPに変わった。代替わりのタイミングや船の買い替えのタイミングなどで変わることが多い。EPは、工場で配合飼料に栄養剤らを混ぜて、高圧下で乾燥させてペレットにしたもので、手間がかからない。養殖場ではそのまま与えられる。しかも、EPはすぐに沈まず、水についても形が保持されてある程度海に浮くため、後からきた魚も食べられるので、海が餌の無駄が減り、汚染されにくくなった。

タイには、ドライペレット（DP）がメイン。消化が良く、成長が良いし、扱いやすい。

いまでも、カンパチは生餌を与えている。

宿毛の養殖業は、昭和の終わりから急減して、その後も高齢化でじわじわと廃業していった。現在残っている養殖業者は、1件1件の規模が大きい。愛南町の宇和水産とかは、マダイだけで200万匹とか買っているが例外で、愛媛だと10~15万匹くらいの家族経営規模の業者が多く、業者数もある程度ある。一方宿毛では淘汰が進み、マリンジャパンはマダイ60万匹が少し規模が小さいくらいの状況。現在も規模を拡大してやっている業者は、後継ぎがいるし、経営が安定していることが多い。人が減っても養殖いかだの数や養殖の生産量は変わらない。人がいなくなると、大手企業が入ってくる。宿毛湾ではマグロの養殖がそう。キョクヨウ、道水などが入ってきている。マグロはそもそも大手企業の資本力がないとできない。

宿毛湾は海水温が高く、養殖魚の生育が早い。愛媛県に比べて、下手すると1年近く成長にかかる時間が短い。そうすると安く出荷できる。宿毛湾の安い養殖魚が売り切れた後、その他の地域の養殖魚が売りに出されるような状況がある。昔は、安かろう悪かろうだったのが、最近は質もよくなってきている。

## （宿毛湾沿岸‐鮮魚販売業）20171219\_堀尾鮮魚店堀尾さんの話

堀尾盛俊さん（昭和19年生まれ、73歳）、堀尾勢津子さん（昭和24年生まれ、68歳）。

西町の魚屋、堀尾鮮魚店　魚誠。33歳の時に始めて、今年で開業40年。23～26歳のころは、千葉県で製材工として古河電工の材を挽いていた。外材がだめになって会社が倒産、宿毛に帰ってきた。運転手や土方や営林署の臨時職員などをして食いつないでいたが、33歳の時に、自分で始めた。親が昔、闇市で魚屋をやったことがあって、それを頼って教えてもらいながら始めた。母親の里が深浦であり、魚は深浦から仕入れていた。深浦には魚がたくさん揚がっていたが、そこまでの道は悪く、たいへんだった。最初の4年ほどは、店舗を持たず、車で出売りをして生計を立てた。その後、6年間ほどは店舗と出売りとやっていたが、開業10年くらいで店舗だけの営業にした。

　深浦や宿毛で魚が手に入らないときには、小満目や清水まで魚を買いに行っていたこともあった。清水まで買いに行って、帰路で魚を売りながら帰ってきた。一人では寂しいので、子どもをお駄賃あげて車に乗せて、一緒に連れて行っていた。

　昔は宿毛のまち中にも何軒も魚屋があったし、リヤカーを引いたおばちゃんの出売りとかも多かったが、跡取りがあるわけでもなくだんだんといなくなった。宿毛市内の魚屋だと中平鮮魚は娘2人で切り盛りしていて、西川鮮魚は伊予から来てる人。どちらも、すくも湾漁協の株は持っていないと思う。昔は、魚を自分でさばく人が多かったし、まるっぽで買って、アラまで出汁とったり使っていた。いまは、さばいてある方が好まれるようになった。

　宿毛の市場は当時閉鎖的で、地元で営業している魚屋でもなかなか入れてもらえなかったが、開業から15年くらいの1992年頃には宿毛市漁協組片島市場にも出入りするようになった。

　25年前頃の宿毛市漁協組片島市場には、片島市場の床に並べくれないくらい魚がたくさん水揚げされていた。打瀬網漁をする船が3隻あって、アマダイ、コブイカ、タビエビ、イトヨリダイ、など様々な魚が水揚げされた。いまはもう打瀬網漁の後継者がおらず、池島の人で、新しい打瀬船を作ったけれども、一度も漁に出ずに辞めてしまった人もいた。

　宿毛市漁協組の片島市場に行って、魚を自分で選んで知り合いの仲買さんに札入れしてもらって、1割手数料を払って魚をわけてもらっていた。その後、2000年頃に知り合いのツテで宿毛の市場の株を譲ってもらって自分で札入れして落とすようになった。

　漁協が合併し、田ノ浦に新しい市場ができた。25年前の宿毛市漁協組のときに比べて、魚の値段が高くなった。与力水産、やまこう、かめさんが、ざまに高値で札入れしてくる。以前では値段がつかなかったような魚まで高くなったし、魚の確保が大変になった。

　魚屋の屋号は、事業を始めて数年たって、男の子が生まれた時に、考えてつけた。魚屋は、朝早く夜も遅くまでなので、1日で2日分くらい働いている。戦後、肉はぜいたくで、ほとんど魚を食べていた。仕事を始めたころはサバ1尾30円とかで、農家の一家がみんなで食べられた。

　5年ほど前に息子に帰ってきてもらって、一緒に仕事を始めた。最初、息子を深浦に連れて行こうと思っていたが、自分も年だし、距離もあるし、深浦での水揚げも減っていたので、やめて、いまはすくも湾漁協で魚を手に入れている。

## （宿毛湾沿岸域‐クルーズ船）20171218\_宿毛市観光協会の白石洋平さんの話

宿毛新港には、ここ数年は年に1度、大型客船が来航している。自分が勤め始めた5年前、平成24年5月にはふじ丸、平成25年4月にはにっぽん丸、7月にはぱしふぃっくびぃなす、平成26年5月にはにっぽん丸、8月には飛鳥Ⅱ、平成27年4月ににっぽん丸、平成28年9月にぱしふぃっくびぃなす、平成29年9月にはにっぽん丸が来航した。

来航のたびに、港湾担当の宿毛市役所企画課と協議の上、宿毛新港でのふるまいや特産品の販売を企画運営してきた。宿毛市観光協会の会員を中心に８４マリンターミナルにて物販に協力してくれる事業者を募り、カツオのたたきなどふるまいを用意し、歓迎セレモニーのためのアトラクションを手配する。地元片島中学校の吹奏楽部の演奏や宿毛幼稚園や沿岸域の保育園・小学校の幼児・児童などによるお遊戯など、をお願いしていて、市民全体で歓迎しているような演出をする。平成29年のにっぽん丸来航時には、地元の組子職人に協力をしてもらって、組子細工体験を実施するなど、クルーズのお客様にご満足していただけるように努めている。

過去の資料によると、平成22年8月と平成23年1月にもふじ丸が来航している。さらにさかのぼって正確なことはわからないが、中西市長の頃にはもっとクルーズ船が来航していたように思う。